

就活か魔王か！？ 殺虫剤無双で愛と世界の謎を解け！ ～鏡の向
このダンジョンでドジっ子と一緒に無双してたら世界の深淵へ～

月城 友麻

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自宅の鏡に潜ったらダンジョンだった。ゴブリンに襲われていた可愛いドジっ子を助けようとしたら大失敗。目つぶしにと、持ってた殺虫剤をふきつけたらなんと倒せてしまった!?

殺虫剤がこの世界では魔物退治のリーサルウェポンとなる事を知った主人公は、就活そっちのけでドジっ子とダンジョンで無双。巨大モンスターを瞬殺し、中堅冒険者たちを助けたり大活躍して楽しい異世界ライフを満喫だ。

しかし、異世界は魔物の大発生で危機に瀕していた、不思議な異世界の構造を解明して世界を救おうとする主人公。

そして、そこで見えてきた恐るべき異世界の裏の姿……。それは日本をも巻き込む想像を絶するものだった。

愛と陰謀と科学が織りなす本格ファンタジーが今、始まる。

目次

プロローグ	異世界への鏡	1
1章	鏡の中の異世界	
1-1	ドジっ子の危機	3
1-2	その者、青き筒を掲げ	7
1-3	時空を超える鏡	12
1-4	就活か魔王か	15
1-5	異世界に就職!?	19
1-6	物干しざおの戦士	22
1-7	重なる二人	25
1-8	もう一つの就活	28
1-9	捕食された少女	31
1-10	モンスターハウス	34
1-11	ステータスウインドウ	38
1-12	忘れられないケーキ	41
1-13	双頭のワイバーン	45
1-14	ハチ・アブ・マグナムZ	48
1-15	魅惑のヘッドハント	52
1-16	真紅に輝く魔石	55
1-17	歴戦の猛者の風格	58
1-18	レディーの歳	61
1-19	大人の誘惑	66
2-1	創世の女神	69
2-2	チョコチャンクスコーン	72

3 1 3.	猫の人	152
3 1 2.	六十万年の壮大な計画	149
3 1 1.	海王星の衝撃	146
3 1 0.	魔王の悩み	143
3 9.	秒間三百回の世界	140
3 8.	ダイヤモンドリング	136
3 7.	ジョッキ爆散	132
3 6.	百万匹の魔物	129
3 5.	新たなる異世界	126
3 4.	一生、一緒	123
3 3.	立ち昇る死の香り	120
3 2.	ドジっ子大ピンチ	117
3 章	世界をかけた死闘	114
2 1 4.	ネオ・エステル	110
2 1 3.	神様の中の神様	107
2 1 2.	魔王によろしく	104
2 1 1.	茶髪の女神様	101
2 1 0.	十万匹の魔物	97
2 9.	突然のモテ期	94
2 8.	レストインピース	91
2 7.	六十一番の彼女	88
2 6.	ドジっ子前途多難	84
2 5.	ダンジョン地図	81
2 4.	最強のパーカー	78
2 3.	ウサギ爆笑	75

3 | 1. 戦闘準備

※特別編	3 1 4.	ネオエンジェル六十一号	155
登場人物インタビュー	3 1 5.	疑惑の海王星	159
	3 1 6.	一キロメートルの地球	162
	3 1 7.	猫女猫女猫女!	165
	3 1 8.	エステルの選択	168
	3 1 9.	届かぬ想い	171
	3 2 0.	貨物船襲来	174
	3 2 1.	エステルの決断	177
	3 2 2.	失われた未来	180
	3 2 3.	足りなかつた運	183
	3 2 4.	最後の賭け	186
	3 2 5.	言い損ねてたプロポーズ	190
	3 2 6.	新しい管理者	193
第61話			197
			200

プロローグ 異世界への鏡

「このままじゃ無職だ……、人生終わりだ……、冗談じゃないぞ！」
就活が終盤になりながら、いまだに一つの内定も出ていなかった俺はまるでゾンビのように部屋でのたうち回っていた。

ピロン！

薄暗い部屋の中でスマホが鳴った。誰かが俺を呼んでいる。

スマホを無造作に取って確認すると……サークルの飲み会のさそいだった。

「内定出てる奴と酒なんか飲めるかってーの！」

スマホをベッドに投げつけ、頭をかきむしってベッドに倒れ込んだ。苦しい……。誰か助けてくれよ……。

息が苦しくなり、大きく深呼吸を何度も繰り返した。

ダメだ！ この精神状態では何やってもうまくいかない……。酒飲んで気晴らしは確かにイイかもしれない。

「お前ら！ 俺の愚痴を聞け——！」

そう叫びながら、俺はすっかり暗くなった東京の路地を駆けた。



「何が『ご健勝をお祈りします』だ！ お前本当に祈ってるのかつつの！」

居酒屋のテーブルで俺はすっかり絡み酒となっていた。

すると、美人の先輩が声をかけてきた。

「ハイ！ ソーター！ 荒れてるじゃない」

先輩は透き通るような肌に、シャープなギリシャ鼻、そして心を捉えて離さない大きな琥珀色の瞳で俺を見つめ、ワイングラスを差し出してきた。

俺はちよつとドキツとしながら先輩のグラスにジヨツキをチン！と合わせた。

「カンパーイ！」「カンパーイ！」

「就活うまくいってないの？」

先輩は少し茶色のセミロングパーマの髪をかきあげながら聞いて

くる。

「ダメっすね！ どこか永久就職とかさせてくれる先ないっすか？」

俺は自暴自棄ぎみに言い放った。

先輩はそれを聞くとニヤツと笑い、

「じゃあ、ソータにだけいい事教えちやおつかなあ♡」

そう言う俺の耳元に近づいて

「殺虫剤持って、鏡に「φ」って書いてトントンと二回叩くといいわ。就活しなくてよくなるから」

そう言つてジョッキの水滴でテーブルに「φ」を書いた。

「なんすかそれ！ そんなんで就活しなくてよくなるなら、みんなやってますよ！ なんすか殺虫剤って!?!」

「騙されたと思つてやつてみるといいわ。永久就職もついてくるかも？」

先輩はそう言う俺と、ケタケタ笑いながら別のテーブルへ歩いて行つてしまった。

俺はバカにされたと思つて憤慨した。しかし……、翌日、面接行くのに気が重くなつた俺は何気なくこのおまじないをやつてしまう。

すると……、鏡は異世界のダンジョンへと繋がつてしまったのだつた――。

この物語は深淵への旅の物語。

どうぞお付き合いください。

1章 鏡の中の異世界

1—1. ドジっ子の危機

サークルの先輩に言われた方法で鏡の中に入ったら、そこはダンジョンだった——。

「いやあああー！ やめてえええー！」

女の子の悲痛な叫びが洞窟の中にこだましている。

俺は洞窟の通路を急ぎ、広間をそーつとのぞいた。

すると、女の子が緑色の異形な生き物たちに組みしかれて、服を破られているのではないか。背が低く耳と鼻の尖った造形……もしかしたらゴブリンと呼ばれる魔物かもしれない。俺は初めて見るファンタジーな存在に目を疑った。

「グギャケケケー！」「グルグルグル！」「グギャ——！！！」

ゴブリンたちは彼女の服をはぎ取ると口々に歓声を上げる。女の子は十六歳くらいだろうか？ 金髪に美しい碧眼、整った鼻立ちに透き通るような白い肌……、ドキツとするくらいの可愛さだった。

「やあああー！ ダメえええー！」

優美な曲線を描く白い肌が露わになり、女の子が泣き叫ぶ。

ゴブリンたちは人間の女の子を犯して孕み袋はらにしようと言う話を聞いたことがある。何とかしたい……、が、俺は就活に行こうと思ってた学生だ。リクルートスーツ姿で武器なんか何も持ってない。ゴブリンは小柄で力はそれほど強くはなさそうだが、五匹も居る。戦闘経験などない素手の学生が何とか出来る感じではない。どうしよう……。

俺が逡巡しゆんじゆんしていると、一匹のゴブリンがいよいよ女の子の両足を持ち上げた。

「やめてえええー！」

女の子が暴れてゴブリンを蹴り飛ばす。もんどり打って転がるゴブリン。

「ガルグギヤア!」「ギヤギヤツ!」

しかし、周りのゴブリンにボコボコと殴られてしまう。

女の子が酷い目に遭うのを黙って見ている訳にもいかない。

このやろおお!!

俺は後先考えずダツシユしていた。

ゴブリンたちは白い肌の女の子に注意がいついて、俺に気づくのが遅れる。

俺はゴブリンが落としていた短剣を拾うと、ゴブリンの脳天に突き立てた。

ズブリという生々しい手ごたえが伝わってくる。

「グギヤツ!」

緑色の血をまき散らしながら倒れるゴブリン。

俺はさらに隣のゴブリンの首めがけて短剣を振り抜く。

が、ゴブリンは腕で避け、致命傷には至らなかった。

「ギヤツ!」

血を流し、怒りをあらわにするゴブリン。

「グギヤツ!」「グググガ——!」「グギヤ——!」

ゴブリンたちは武器を手に立ち上がってきた。マズい。

俺はダツシユで逃げだした。

来た道を必死に走る。

「ギヤツギヤツ!」「ギヤウツ!」

二匹ほどが追いかけてくる。

思ったより足が速い。

ヘッドライトで照らす洞窟の通路を命がけの必死の逃走——。

しかし、こここのところの運動不足で足がもたつき、俺は無様にも転倒してしまう。

「うわあああ!」

カン、カン、カラン……。

すっ飛んで行ってしまう短剣。

ヤバい!

はあはあ言いながら振り向くと、ゴブリンが迫っていた。

「ギャギャッ！」

獲物を追い詰め勝利を確信したゴブリンは、いやらしい笑みを浮かべながら短剣を振りかざした。絶体絶命である。

何かないかと探したが、武器になりそうな物など何も無い。ジャケットの内ポケットに入れておいた小さな殺虫剤の缶しかなかった。こうなったら目くらましだと、半ばヤケクソになって俺はゴブリンに殺虫剤を噴射する。

プシユ——！

すると、短剣を振り下ろそうとしたゴブリンは、

「グギャアッ！」

と断末魔の悲鳴を上げ、ドス黒く変色し……、次の瞬間溶け落ちて行った。

「え……？」

驚く俺と後ろのゴブリン。

コンコン……。

溶けたゴブリンの跡にはエメラルド色に輝く小さな石が転がった。俺は何が起こったのか良く分からなかったが、固まっているゴブリンにも殺虫剤を吹き付ける。

プシユ——！

「ギャギャッ！」

すると、二匹目も変色し、溶け落ちて行くではないか。

なんと、ゴブリンには殺虫剤が効くのだ！先輩に言われて持っていた殺虫剤。まさかこんな効果があるとは！

「やめてええ！」

遠くで女の子の声がする。まだゴブリンは二匹残っていたのだ、女の子が危ない！

俺は全力でダッシュした。

広間に来ると、女の子は身をよじって必死にあがいている。

「お前らふざけんなよー！」

俺は叫びながらゴブリンに迫り、殺虫剤を思いっきり吹き付けてやった。

身構えたゴブリンだったが、殺虫剤を浴びるとやはりドス黒く変色し、溶け落ちて行く。

コン、コン……。

エメラルド色の光る石が二つ転がった。

ひっ！

女の子はおびえた目で俺を見て、両手で胸を隠す。

「だ、大丈夫だよ。何もしないから」

俺はそう言っ、投げ捨てられた彼女の服を拾い、そつと彼女にかけあげた。

「うわあああん！」

女の子は服で顔を隠し、丸くなって号泣した。

「恐かったね、もう大丈夫だよ……」

俺は優しく声をかける。

彼女はすすり泣きながら服をずらして俺のことをジッと見つめる。

「ケガは大丈夫？ みせてごらん」

俺は微笑んで言った。

すると彼女はいきなり立ち上がり……、

「うえええんー！」

と、号泣しながら抱き着いてきた。

「えっ!？」

可愛い全裸の女の子に抱き着かれ、俺は激しく動転する。ふんわりと甘酸っぱい女の子の匂いに包まれ、俺は頭が真っ白になった。

女の子との接触なんて全くない人生で、いきなり生まれたままの姿で抱き着かれている。一体どうしたらいいのだろうか？

「うっうっうっ……」

洞窟の広間に響く彼女の嗚咽おえつ。

俺はなだめようとそつと抱きしめる。しつとりと柔らかい背中が生々しい手触りは刺激が強すぎるが、それでも大きく息をつき、目をつぶって彼女の心の傷がいやされるように祈った。

1—2. その者、青き筒を掲げ

しばらくして彼女も落ち着いてきたので、服を着てもらう。

破かれてしまった服だが、彼女は上手にリボンを結び、うまく身体を包んだ。

彼女はモジモジし、そして、意を決するようにして俺を見あげると、言った。

「あ、ありがとうございます……。私はエステル……。あなたは？」

丁寧に編み込まれた金髪に、透き通る青が美しい瞳、そして柔らかく白い肌……。ただ、ゴブリンに殴られたところが赤く腫れてしまつて痛々しい。

「俺は水瀬颯汰……。あー、ソータつて呼んで」

可愛い子に見つめられることなんて全く慣れてない俺は、赤くなりながら答えた。

「ソータ……。いい名前です……」

そう言つてエステルはちよつと恥ずかし気に下を向いた。

「ケガ……。痛くない？」

俺が心配して言うと、

「あ、今治すです！」

そう言つて、エステルは転がっていた木製の杖を拾つた。

「治す？」

俺が怪訝けげんに思っていると、エステルは手のひらを殴られたところに当て、目をつぶつて、

「ヒール！」

と、唱えた。

エステルの身体が幻想的にぼうつと淡い水色に光り……。手のひらからは美しい金色の光が噴き出す。

なんと！ 魔法である！ 俺はあつけにとられた。

しばらくすると、腫れは引き、透き通るような美しい肌に戻ってきた。

俺は生まれて初めて見た魔法に圧倒される。現代科学では不可能

な治癒の魔法。それを女の子が当たり前のようにやってしまったのだ。

一体この世界はどうなっているのだろうか？

「す、すごいねそれ……」

俺が感嘆していると、

「こ、これは一番初歩の治癒魔法です、恥ずかしいです……」

そう言っただけで、うつむいた。

現代科学で不可能な事も初歩だそうだ。異世界恐るべし。

広間を見渡すと、奥には祭壇らしき物があるが、長く使われていないようで、あちこち崩れ、廃墟のようになっている。

「エステルはこんなところで何やってたの？」

女の子一人で居るようなところじゃない。不思議に思っただけでみた。

「最近魔物の大群が街を襲うようになってしまって、今、元気な若者はダンジョンで修行させられるんです。それで私もパーティを組んでダンジョンに来たんですが……、間違えて落とし穴に一人だけ落ちてしまったんです……私ドジなんです」

なるほど、ここは魔物が出るダンジョンなのか。ファンタジーなゲームそのままの世界に驚かされる。

「他のみんなは？」

「多分、上層にいると思うんですが、連絡の取りようもないのでもう帰っちゃったかと……」

「そうか……、じゃあ安全なところまで付き添わないといけないなあ……」

自分の事で手いっぱいなのに、さらに面倒ごとをしよいだんできました。思わずため息をつく。

「ごめんなさい、助かるです」

エステルは申し訳そうな顔で俺に手を合わせる。

その時だった、通路の奥からいきなりドタドタドタと多くの足音が聞こえてきた。

「あぁっ！ この足音は！」

エステルはひどくおびえ、顔が真っ青になる。

俺が振り向くと、何かがドヤドヤと広間に入ってきているのが見えた。エステルをかばいながら目を凝らすと、それは犬の頭をした背の低い魔物だった。確か漫画やゲームではコボルトと言われていた魔物ではないだろうか？

手には短剣を持ち、にやけ顔で口を開けて牙を見せ、長い舌をだらしとたらしながらこちらを見ている。どうやらこちらを獲って喰うつもりようだ。俺はゴブリンの落とした剣を急いで拾ったが、多勢に無勢、まともに戦ってはこちらに勝機はない。殺虫剤がコボルトにも効いてくれることに期待するしかないが、どうか。

タラリと冷や汗が垂れてくるのを感じる。

「ソータきあん……、ど、どうしましょう……」

俺にしがみつき震えるエステル。

「な、何か魔法無いの？」

「私は侍僧^{アコライト}なので白魔法しか使えません。それにもう魔力ないですう……」

泣きそうになるエステル。

「グルルルル！」「グワウウウウ！」

のどを鳴らしながら近づいてくるコボルトたち。絶体絶命である。

「効いてくれよ！」

俺は祈りながら殺虫剤を噴射した。

プシュ——！

コボルトたちは変な霧を吹きつけられ、怪訝そうな表情を見せる。そして、次の瞬間、グオオオ！ と断末魔の叫びを残し、見る見るうちにドス黒い色に変色するとドロリと溶け落ち、次々と消えていった。

「ええっ!？」

目を丸くするエステル。

「おお、効いたみたいだ」

俺はホッとして胸をなでおろす。

コボルトたちが消えた跡には、茶色い光る石がコロコロと転がるだ

けだった。

エステルはキラキラとした瞳で俺を見つめ、手を合わせ、つぶやきながらにじり寄ってきた。

「その者、青き筒つつを掲げ、我が地に降り立ち、邪よこしまなるものを塵芥ちりあくたへと滅ぼす……」

「ど、どうしたんだエステル？」

気圧され、後ずさりする俺。

「ソータ様！ あなたが伝説の稀人まれびとなのです！」

俺の腕をガシツとつかむ。

「ちよ、ちよつと待ってくれ。なんだそれは？」

「神託です！ 神託！ 教会でシスターに聞いたです。女神様が私たちに予言をくださったのです。この魔物はびこる、人類滅亡の危機に唯一託された希望！ 稀人まれびと！ それがソータ様なのです！」

「いやいやいや……。俺はただの学生！ そしてこれはただの殺虫剤！ 人類を救うとか何言ってるの!?!」

「青き筒ですよね？」

確かにこの殺虫剤のスプレー缶には青い印刷が施されているが、『殺虫剤』とちゃんと書いてある。

「いやいや、ここ読んで！ ただの殺虫剤だよ、ほら」

俺は殺虫剤のスプレー缶を見せた。

「殺虫剤……?」

「虫を殺す薬だよ！」

エステルは首をひねっている。

「もしかして……、そういうの無いの？」

「虫はパンつと叩いて殺すものですよ?」

エステルはまっすぐに俺を見て言う。

俺は考え込んでしまった。

おかしな洞窟に、次々出てくる魔物に、襲アユライトわれる侍僧に、異常に効く殺虫剤。一体ここは何なんだ?」

「殺虫剤でもなんでも、ソータ様は『青き筒』で魔物の群れを一瞬で倒されました！ 神託の稀人まれびとに間違いないです。ぜひ、世界をお救いく

ださい！」

エステルはそう言って俺にひざまずいた。

「世界を……救う？」

俺は思わず天を仰ぎ、何だか面倒な事に巻き込まれてしまったことにクラクラした。

俺は就活地獄の大学四年生。ついさっきまで俺は自宅面接に行く準備をしていたのに、一体なぜこんなことになってしまったのか。
トホホ。

1—3. 時空を超える鏡

時をさかのぼる事数十分、俺は東京のワンルームの自宅にいた——

今日も面接。リクルートスーツを着込み、最後に鏡でチェックをする。でも、鏡を見ながら俺は、

「行きたくねーなあ……」

と、つぶやいていた。どうせまた人格否定されて落とされるのだ。もう何十通もお祈りメールをもらってきた俺には全て分かるのだ。俺は大きいため息をつき、鏡の向こうの疲れ切った顔をしばらくボーっと見ていた。

その時ふと、昨晚飲み会でサークルの美人の先輩に言われたことを思い出した。

『就活が嫌になったら、殺虫剤持って、鏡に「φ」って書いてトントンと二回叩くといいわ。就活しなくてよくなるから』

先輩はニヤツと笑いながら、俺を見ていた。なんとも荒唐無稽な話である。

その時は、相当酔っぱらっていて、

『なんすかそれ！ そんなんで就活しなくてよくなるなら、みんなやってますよ！ なんすか殺虫剤って!?!』

と、食ってかかったのを覚えている。先輩は在学中にベンチャーを起業したらしいから、就活の苦しさが分かかってないのだろう。

おまじないでも何でもやってみるか……。

「えーっと、殺虫剤持って、「φ」書いてトントンね」

就活地獄で心身ともにボロボロな俺は、藁わらにもすがりたい気分で作ってみた。

直後、鏡はピカツと閃光を放ち、俺は目がくらんだ。

「ぐわあー！」

何だこのおまじないは!?! 俺は混乱した。一体何が起こったんだ……!?!

目が徐々に戻ってきて、俺はそーっと目を開ける。鏡は……、鏡だ。

別に変ったところはない。何かが出てくるわけでもなく、ただ、細長い姿見の鏡がリビングのドアの隣にあるだけだ。

俺は不審に思い、そつと鏡面に触れてみる。

すると、鏡面はまるで水面のようにスツと指を受け入れ、波紋が広がった。

「はあ?」

鏡が液体みたいになっている!

一体こんなことあっていいんだろ? 物理的にあり得るのか? 俺は想像を絶する事態にうろたえた。

もしかして心労がたたって幻想を見てるだけかも……。しかし、何度触っても鏡は液体のままだった。

俺は好奇心が湧いてきて腕をズーつと鏡の中に入れてみる。どこまでも入ってしまう。鏡の裏側を見てみたが、腕はどこにもない。腕はどこに消えたのか?

空間が跳んでいる、つまり、別空間へのトンネルが開いたと考える他なかった。

『就活しなくてよくなるから』っていうのは、内定が出るって意味じゃなくて、どこか別世界へ行けるっていう意味らしい。あの先輩何を考えているのか……。

俺は意を決してそつと頭から鏡に潜ってみた……。暗い。真っ暗だ。

棚からアウトドアで使っていたヘッドライトを取り出して点け、再度潜ってみる。

しかし、ライトをつけても暗い……。どうも洞窟みたいな岩肌が見える。濡れて黒光りするカビ臭い洞窟。

ちよつと、これ、どうしたらいいのだろうか? とても嫌な予感がある。

『君子危うきに近寄らず』だ。大人しく面接に行こう

そうつぶやいて、顔を引っ込めようとした時だった。

「ぎゃあああ!」

かすかに女の子の悲鳴が聞こえた。

どうしよう……。

空耳……、空耳だということにしたい……が、女の子の悲痛な叫びを無視できるほど俺は冷酷にはなれなかった。

俺は急いで靴を履き、殺虫剤をポケットに入れると鏡の中に潜ったのだった。

1—4. 就活か魔王か

「ソータ様！ それでは世界を救いに行くです！」

エステルは興奮して両手で俺の手を熱く握る。

「いやいや、世界を救うって誰から救うんだい？」

「魔王ですよ！ 魔王！ 悪の魔王がどんどん魔物を生み出して街に攻めてくるんです！ ソータ様のお力で魔王を倒すです！」

「え——！ 俺は就活があるんだよ。内定取れなきや人生終わりで。そんな事協力できないよ」

「シユーカーツ？ 何ですかそれ？」

「説明会行って、エントリースhirt出して、お祈りメールもらって……って、分からないよね、ゴメンね」

「お祈りなら教会が協力してくれるです！」

うれしそうなエステル。

「いや、そのお祈りじゃないんだよ……」

俺は天をあおぐ。

「でも、ソータ様が魔王倒してくれないと世界滅んじやうんですう……」

泣きそうな顔で俺をジッと見るエステル。

稀人だか何だか知らないが、人類を救うとか以前に就活何とかしたいんですが俺は。

転んで汚れ、破けたリクルートスーツを見ながら俺は大きいため息をついた。もう一着買わないと……。

そもそももう面接には間に合わないじゃないか……。

俺は腕時計を見てガツクリとした。

「で、エステルはこれからどうするの？」

「もちろん、ソータ様に付いて行くです！ 私はソータ様の付き人です。何なりとお申し付けください！」

キラキラとした瞳で俺を見つめるエステルに、俺はちよつと気が遠くなる。

「まあ、このままここに居ても仕方ない。一旦俺んちに戻るよ」

「はいっー」

うれしそうなエステル。

俺は洞窟を歩き、鏡から出てきた場所へと移動した。

そこには姿見があり、出てきた時のまま洞窟に立てかけてあった。鏡面はと言うと……、触ると波紋が広がり、まだ通り抜けられそう
だ。

俺はエステルの手を引きながら鏡を通り抜け、ワンルームへと戻つた。

「靴は玄関へやってね」

そう言いながら靴を脱いだ。

「ここが……、ソータ様のおうち……ですか?」

エステルが不思議そうにベッドが置かれた狭いワンルームをきよろきよろと見回す。

「狭くてゴメンね。これでも月に八万円もするんだ……って、お金の話しても分からないよね」

エステルは首をかしげる。

「ベッドしかありませんよ? お部屋はどこにあるんです?」

俺をジツと見つめるエステル。

俺は何と答えていいか分からなくなり、

「ここは寝るための家なんだよ」

と、目をつぶって答えた。

「あー、ちよつとおいで」

俺はベランダにエステルを連れて行って東京の景色を見せる。

「ええ——っ!? なんですかこれ!」

目の前に広がるビルの森、通りを走るたくさんの車たち、そして遠くに見える真っ赤な東京タワー……。エステルには、全てが初めて目にする訳分からない存在だった。

「ここが俺の住む街だよ。エステルの世界とは全然違うだろ?」

エステルは真ん丸に目を見開きながらつぶやいた。

「さすが……、ソータ様……」

何だか誤解をしているような気がする。

と、その時、
グルグルグルギユ――。

景気のいい音が鳴り、エステルが真っ赤になってしゃがみこんだ。
「あ、お腹すいたの？ カップ麺しかないけど食べる？」

「恥ずかしいです。こんなはしたない……」

エステルは恥ずかしそうにうつむいた。

「ははは、それだけダンジョンで苦労したんだろ、一緒に食べよう」
そう言っつて部屋に戻り、俺はエステルをベッドに座らせた。

「シーフードとカレーと普通のどれがいい？」

「わ、私は何でも……」

「じゃあ、普通のにするか。俺はカレーで……」

俺はキッチンでお湯を沸かす。



カップ麺を持って部屋に戻ってくると、エステルが真っ赤になって
カチカチになっていた。

何だろうと思っつて手元を見ると……エロ同人誌を持っていた。

「あつ……」

棚にそのまま置いておいたのは失敗だった……。

「ソ、ソータ様は……、このようなご奉仕が……良いですか？」

真っ赤になっつてうつむきながら、一生懸命絞り出すように聞くエス
テル。

「あ、いや、それは……」

何と説明したらいいか俺も真っ赤になっつてしまう。

すると、エステルは目をグルグルさせながら必死になっつて言う。

「わ、私……胸もこんなにはなく、経験もないですが、ゴブリンに穢けがさ
れるところを助けてもらつた身。ご、ご要望とあれば、それは……」

そう言っつて、エロ同人誌を握り締めた。

「な、何を言っつてるんだ。そういうのは好きな人とやるものだよ。自
分の身体をもつと大切にしなさい。いいから食べるよ」

俺はそう言っつて同人誌を取り上げると、小さなテーブルにカップ麺
を並べた。

「そ、そうですね……。ソータ様に好いてもらえるように頑張るです！」

そう言ってエステルはこぶしを握り締めた。

俺は彼女が何を言ってるのか良く分からなかったが、救世主だとの誤解は早めに解かねばなと思った。

1—5. 異世界に就職!?

カップ麺のふたを開けると美味そうな匂いが立ち上ってくる。

「うわあ！ いい匂いですう！」

目を輝かせるエステル。

割り箸を渡したものの、エステルはお箸を見て怪訝けげんそうな表情をする。お箸の文化が無いようなので、フォークを取ってきて渡した。

エステルは麺を一本引つ張り出し、フーフーと冷まして口に入れる。

「うーん、美味しいですう！」

エステルは幸せそうに目を閉じた。口に合ったようで何より。

俺が麺をズルズルとすすつていると、エステルが不思議そうに、

「ソータ様はなぜこんなに熱い物を一気に食べられるですか？」

と言つて、首をかしげた。

「え？ すすりながら食べると熱くても大丈夫……、みたいだね？」

そう言つて、ズズーつとすすつて食べた。

エステルも真似してすすろうとして……、

ゲホツゲホツと咳込んだ。どうも麺をすすする事が出来ないらしい。

本当に異世界の人のようだ。

「無理じゃなくていいよ、少しずつ食べて」

「はい……」

そう言つて、また一本ずつ食べ始めた。

「ソータ様はお料理上手なんですネっ！」

エステルはカップ麺がいたく気に入った様子でニコニコしながら

言う。

「あー、これはお湯を入れただけなんだよ」

「ふうん、それでも嬉しいですよ」

エステルはニツコリと笑った。

俺はキラキラとした美しいエステルの笑顔についドキツとしてしまう。可愛い女の子にこんなに好意的に接してもらったことなんて、生まれて初めてかもしれない。

とは言え、俺がやったことなんて殺虫剤撒まいてカップ麺にお湯入れた位だ。思いあがらないようにしなくてはならないな、と思った。

カップ麺を食べながらこれからどうしようか考える。とりあえず、ダンジョンを脱出して家に送り届けるまでは、ついて行ってやらないとマズいだろう。しかし、魔物が次々と出てくるダンジョン、全てに殺虫剤が効く保証もない。となると、それなりの装備が必要だ。殺虫剤もたくさん調達しないといけないそうだし、服装も冒険に合った物にしないといけない……。ただでさえ金欠なのに、と気が重くなる。

と、ここで、あの魔物が落とした光る石を思い出した。俺はポケットから石を出して聞いた。

「これ？ 何かに使えるの？」

「魔石はギルドで買い取ってもらえるですよ！ これだけあれば銀貨三枚くらいですね」

銀貨の価値が良く分からないが、魔物を倒すと金になる……。これはもしかしてチャンスなのでは？

「え？ じゃ、もしかして、強い魔物を倒したらもつとお金になるの？」

「そうです。金貨何十枚にもなる魔物もいるです！」

エステルは嬉しそうに言う。

「金貨？」

俺は驚いた。もし、そんな魔物も殺虫剤で瞬殺なら、金儲けになるのではないだろうか？ 金貨一枚を日本で五万円で買い取ってもらえるとしたら魔物一体で……。百万円!? え!?

俺は皮算用をして仰天した。救世主的な事は全く興味なかったが、金になるのであれば話は全然変わる。金貨をじゃんじゃん稼いでこつちで換金できたら俺、就活しなくていいのではないだろうか？

サラリーマンなんかよりも、圧倒的に稼げる道を見つけてしまったかもしれない。

ここでようやく先輩の言った意味が分かった。日本でダメなら異世界で稼げばいいのだ!

俺は思わずこぶしを握った。が、先輩はなぜそんなことを知ってい

たのだろう？ 今度会ったら聞かねばと思った。

◇

俺がそんなことを考え、一人で盛り上がっていると、エステルがうつらうつらしている。ダンジョンでひどい目に遭って疲れたのだから。

「はい、じゃ、ここで横になつてね」

俺は優しくエステルをベッドに寝かせた。

すぐに寝入っていったエステルの綺麗にカールしたまっげを、俺はポーつと見る。女つ気の全くなかった俺の部屋で、透き通るような白い肌の美少女がすやすやと寝ている。一体これはどう理解したらいいものかちよつと戸惑った。

異世界、美少女、そして金貨。就活地獄の中にいきなり現れたこの僥倖（たまたま）を何とかモノにしてやろうと俺は野望（やぼう）に燃えた。

1—6. 物干しざおの戦士

ホームセンターへ行っているんなタイプの殺虫剤、防刃ベストにヘルメットを選ぶ。そして、最後に武器になりそうなものを探した。

刃物は扱いなれてないとむしろ危険だし、そもそも戦闘に使えるような刃物などホームセンターには売っていない。困っていると物干しざおを見つけた。やっぱり男は棒が大好きなのだ。中国拳法の人みたいに試しにブンブンと振り回してみると、結構しつくりとくる。これならゴ布林くらいなら打ち据えられそうだ。結局一番頑丈そうなステンレスの物干しざおを選んだ。

荷物をどつさり抱え帰宅すると、ほのかに甘い匂いがする。女の子が自宅にいるってなんて素敵な事だろうか。別に恋人でも何でもないのについドキドキしてしまう。

そつと部屋に入ると、夕暮れの薄暗がりの中、まだエステルは熟睡している。相当疲れているようだ。

俺は起こさないように気を付けながらコーヒーを入れた。部屋中に広がるコーヒーの香ばしい匂い、とても癒される。

俺はコーヒーを飲みながら買ってきたものを整理し、使える状態にして装備してみた。まるでスズメバチ退治に行くようないで立ちになったが、俺はこの装備で一攫千金を目指し、もしかしたら世界を救ってしまうのかもしれない……。

「世界を救う……？」

冷静に考えると、あまりに荒唐無稽すぎる話にちよつとめまいがした。ベッドでエステルが寝ていかなかったら、バカバカしくなって放り出してしまいうレベルだった。

金髪の美少女は気持ちよさそうに寝息を立て、さっきの戦闘が夢や妄想ではなかったことを教えてくれる。

俺はエステルの寝顔をジッと見つめた。こんな可愛い女の子まで戦闘に駆り出されるなんて一体異世界はどういう状況なのだろうか？ また、倒さねばならない魔王とはどういう存在なのだろうか？

殺虫剤で即死してくれるほどぬるい存在でいてくれるのだろうか

？

俺は深くため息をついた。今日は結局、企業研究も面接対策も何もやっていない。就活をほっぽり出して物干しざおを物色してて本当に良かったのだろうか？

悩み事は尽きない。

俺は姿見を見つめ……、近づいてもう一度鏡面を触ってみた。波紋が広がる。まだ液体のままだ。

試しに俺は「φ」を描いてトントンと叩いてみた。すると、鏡面は元の鏡に戻った。そして再度「φ」を描くと……鏡面は光り輝き、またダンジョンにつながった。

俺はダンジョンへ移動し、鏡面を持ち運んでみた。移動させても鏡面は液体のままだった。そして、中をのぞくと俺の部屋のままだった。

その後いろいろやってみたところ、鏡面は持ち運んでも空間は接続され続けるが、「φ」を描くと空間の接続はオンオフされ、一度オフにすると次の接続先は一番最初に戻るようだった。

で、あるならば、鏡面は持ち歩いて、ヤバくなったら鏡面に逃げ込んで接続をオフにするという作戦が使えるそうだ。エステルには鏡面担当をやってもらい、常に持ち歩いて、危なくなったら先に逃げてもらえばバッチリだ。

俺は段ボールで姿見のケースを作り、背負えるように紐ひもを付けた。エステルには頑張って持ち運んでもらおう。

いろいろやっているうちに夜になってしまったが……、エステルはまだ起きない。今日はもう寝るしかないが……、一体どこで寝たらいいのだろうか？

幸せそうにスヤスヤと寝るエステルを、俺はぼーっと眺めた。サラサラとした金髪が美しく輝き、透き通るような白い肌は寝息に合わせて無防備にゆっくりと上下を繰り返す。少女から大人の女性へと脱皮していくような確かな生命力を感じ、俺はグツと来てしまう。

「可愛いよなあ……」

つい本音が漏れる。

詰めたら二人で寝られるかもしれないが……、こんな美少女と一緒に寝るなんて、絶対にロクな事にならない。そもそも眠れないだろう。諦めて床で寝ることにした。

毛布を出し、座布団を工夫して寝床を作り、電気を消す。

ちよつと床に腰の骨が当たって痛みが仕方ない。

スースーというエステルの寝息を聞きながら、俺は意識が薄れていった。

おやすみ……、エステル……。

1-7. 重なる二人

「ソータ様！ 申し訳ございません！」

耳元で大きな声がして、俺は目が覚めた。

「ん？」

寝ぼけ眼で辺りを見回すと、明るくなり始めた部屋の中でエステルが土下座している。

「ど、どうしたの？」

俺が目をごすりながら体を起こすと、

「ソータ様の寝床を奪ってしまいました！ 付き人としてこの不手際、何なりと罰をお申し付けください！」

と、エステルはひどく恐縮している。

「ふぁーあ……。そんなのは後でいいから今は寝かせて……」

俺は毛布に潜り込む。

「ダメです！ ベッドで寝るです！」

「いいから寝かせて……」

「ベッドでー」

エステルは俺を起こそうとして、足が滑って俺の上に倒れ込む。

「きゃあー！」「うわっ！」

エステルが俺の上に抱き着いた格好になり、俺は反射的に彼女の身体を両手で抱きかかえた。甘酸っぱい少女の香りが俺を包み、柔らかな胸のふくらみが俺に押し付けられる。

いきなりやってきた予想もしない展開に俺は言葉を失う。

エステルも、どうしたらいいかわからなくなって固まっている。

気まずい沈黙の時間が流れた……。

エステルの甘い吐息が俺の耳にかかり、ドクドクと速く打つ心臓の音が聞こえる。

俺は横にごろんと転がって、エステルの上になる。

エステルは目をギュッと閉じた。プックリとした果実のような赤い唇がキュツと動く。

このままエステルを……。おれはそつと柔らかくすべすべとし

たエステルほおの頬をなでる。と、その時、エステルが震えている事に気が付いた。

俺は正気を取り戻す。震えている女の子に手を出してはダメだ。俺は大きく息をつき……、体を起こすとベッドに転がった。

「危ないから気を付けてね」

俺はそう言つて毛布をかぶった。

「ご……、ごめんな……さい」

エステルは真つ赤になりながらそーつと身体を起こし、正座してうつむく。

「はしたないことしてしまいました……。付き人失格ですう……」

エステルはひどくしよげている。

俺は眠ろうとしたが、すっかり目が覚めてしまつて眠るどころではなくなっていた。どうしたものかと悩んでいると、

「あのお……」

と、エステルが声をかけてくる。

俺は毛布をそつとずらしてエステルを見る。なぜか真つ赤になつてモジモジしている。

「どうしたの?」

怪訝けげんに思つて聞いた。

「お、おトイレ……、どこ……です?」

そう言つて、エステルは恥ずかしそうにうつむいた。

「あ、ごめんごめん。こっちだよ。シャワーも浴びてね」

俺は立ち上がつて玄関わきのユニットバスに案内した。

そして、ウォシュレットとシャワーの使い方を簡単に教えてあげる。

しばらくすると、

「ひゃうっー」

というエステルの叫び声が聞こえた。きつとウォシュレットにビックリしているのだろう。

もう眠れる気もしないので、朝食にすることにした。

エステルがシャワーを浴びている間、俺はパンを焼いてミニトマト

を洗い、ヘタをとった。

◇

朝食をとりながら、作戦会議をする。目標はエステルを家まで届けることと、ダンジョンと魔物の情報をなるべく集めることだ。

前衛は俺、物干しざおと殺虫剤で戦闘を担当する。後衛はエステル。索敵とマッピングと逃げ場所確保担当。ケガした時の治療もお願いする。

そして、安全第一で、少しでもヤバかったらすぐに鏡に逃げ込むことをエステルに厳命した。

「分かったです！」

エステルは子リスのようにミニトマトをほお張りながら、うれしそうに答えた。

1—8. もう一つの就活

食べ終わると俺は皿を軽く洗い、リュックに荷物を詰め、防刃ベストを着込んで装備を整えた。

「それでは行くです！」

エステルはやる気満々でこぶしを握り、ニッコリと笑った。

俺は物干しぎおを左手に、殺虫剤を右手に持ってダンジョンに乗り込む。

いよいよ、俺のもう一つの就活が始まる。金貨だ、金貨を確保する道を見つけ出すのだ！

エステルは背中に鏡を背負って、鉛筆で洞窟の地図を作りながら俺についてくる。

洞窟はいぜんジメジメとしてカビ臭く、足場は悪い。

歩きながらエステルにワナの見つけ方を教えてもらおう。でも、エステル自身ワナにはまって落ちているので信憑性は微妙しんぴょうなのだ。

昨日は気が付かなかったが、壁面には淡く光る石が含まれていて、ライトを消しても月明かりの夜程度の明るさにはなっていた。でも、月明かり程度ではワナは見抜けないので基本ヘッドライトは点けて進む。

程なくエステルが襲われていた広間についた。魔物もおらずシーンとしている。

「付近に魔物の反応はないです」

エステルは索敵の魔法を使って教えてくれた。頼りになる。

「ではこっちから行ってみるか……」

俺はコボルトが出てきた洞窟の方へ足を進める。

ワナに警戒しながらゆっくりと進んでいくと、エステルが小声で言った。

「ソータ様！ この先に魔物がいるです！」

「え？ どんなの？」

「良く分かりませんが……、一匹です。コボルトやゴブリンよりは強そうです」

いよいよ戦闘である。

俺はヘッドライトを消し、殺虫剤のロックを解除し、物干しぎおを構えながらソロリソロリと進んでいく。

洞窟が大きく左に曲がるところでそーつとのぞくと、二十メートルほど先に何者かが立っていた。人間より一回り大きく、コボルトやゴブリンとは異なる圧を感じる。

まだこちらには気づいていないようだ。

俺は殺虫剤をできるだけ前にして、プシューッと吹きつけてみた。届かないだろうが、洞窟の中をなるべく薬剤で満たしたかったのだ。いきなり変な音がして驚いた魔物は、

ムオオオ！

と、叫ぶとこちらに駆けだしてくる……。顔はイノシシ……。オークと呼ばれている魔物だろうか？

ドストドストと重厚な足音を響かせながら、すごい速度で迫ってくる。

俺は冷や汗をかきながら後退しつつ、殺虫剤を噴射し続けた。

「頼むから効いてくれよ……」

物干しぎおを握る手が震える。効かなかつたらこのまま鏡へ飛び込むだけはあるが、それでも魔物は怖い。

果たして、魔物は走ってくる途中で、ギャウウウ！ という断末魔の悲鳴をあげると、溶けていった。光る石がコンコンと音を立てて転がってくる。

「さすが、ソータ様！ 今のはオークですよ、オーク！ 新人冒険者たちの多くはあれにやられちゃうんです！」

後ろで鏡を準備していたエステルが興奮している。

俺はふう、と大きく息をつき、オレンジ色に光り輝く魔石を拾った。

「これなら銀貨一枚ですよ！」

エステルが嬉しそうに言う。

銀貨は十枚で金貨になるそうなので、これで五千円くらいだろうか？

確かに慣れてきたらいい商売になるかもしれない。



俺たちはさらに洞窟を進んでいく。階段を見つけないと地上へは出られない。エステルに頑張つてマップを描いてもらいながら探索範囲を広げていく。

「あ、何かいるです！」

エステルが声を上げる。

「オークくらいのが一匹です」

「了解！」

俺はまたライトを消してそーつと歩いて行く。

洞窟がくねくねとしているので、慎重にゆつくりと様子をうかがいながら進んでいく……。

しかし、何もいない……。

「おーい、エステル、何もいないぞ」

俺が振り返ると、なんと巨大なテントのような球が洞窟をふさいでいた。

「な、なんだこれは!？」

あわててライトをつけると、なんとそれはスライムだった。どうやら天井に張り付き、エステルの上に落ちてきたようだった。

その透明な巨体の中で、エステルがもがきながら^{おぼ}溺れている。衣服はすでに消化が始まっていて、白い肌があちこちからのぞいている。

俺はエステルが今まさに食べられているという事実にも、心臓が止まりそうになった。

1—9. 捕食された少女

「うわ——っ！ エステル——！」

俺が駆け寄ろうとすると、いきなり足を取られた。スライムの粘液が周りにまかれていたのだ。

「おわあ！」

俺は派手にすっ転んで殺虫剤がふっ飛んでいく。

カラランツ、カラカラ……

さらにスライムは俺に向けて刺激臭のする粘液をピュツピュと浴びせかけてくる。何という嫌な奴だろうか。

「ぐわっ！ ペッペー！」

この間にもエステルは消化されて行ってしまう。一刻を争う。逃げ！ 逃げ！

俺は後ろを向いて予備の殺虫剤を取り出すと、急いでロツクを外し、プシューッと吹きかけた。

効果はてきめん。

グモモモ……。

異様な音がして、スライムは溶けて崩れていく……。

そして、エステルがドサツと落ちてきて地面に転がった。

駆け寄ってみると、力なく横たわり、微動だにしない。服はもうボロボロで、美しい透き通った素肌があちこちからのぞいていた。

「おい！ エステル！ 大丈夫か!?」

俺は抱き起して頬ほおを叩いてみるが返事がない。これはマズい！

俺は急いでみぞおちの上に両手を重ねると、エイエイエイと胸骨圧迫をおこなってみた。綺麗な形に膨らんだ白い胸が丸見えだが、今はそんなことにこだわっている場合ではない。

「エステル——！ エステル！」

叫びながら何度も何度も必死に押す。

ドジっ子だが可愛いこの少女を失う訳にはいかない。

「おい！ 戻ってこい！」

俺は必死に胸を押し続けた。

俺が不注意だった、全部俺のせいだ……。

「エステルう……」

涙がポトポトたれてくる。

するとエステルは、

「うう……」

と言って、苦しそうな顔をした。

「あっ！ エステル！」

俺が叫ぶと、エステルはボコボコつと水を吐いて、

ケホツケホツつと咳をした。

俺は急いでエステルを横向きにして背中を撫でる。

「ううーん……」

と、声を出し、エステルは目を開ける。

「おお！ エステル！ 大丈夫か!？」

エステルは軽くうなずくとまた、ケホツケホツつと咳をした。

俺は鏡を取り出すと急いでエステルを抱き上げて部屋へと運ぶ。

そしてバスタオルで全身を拭いて毛布でくるみ、ベッドに寝かせた。

弱ってベッドで眠るエステル……。

俺はその横顔を見つめながら、手を握って回復を祈った。

やはりダンジョンは一筋縄ではいかないのだ。

魔物だってバカじゃない、あの手この手で我々を狙ってくるのだ。

俺は自らの浅はかさを恥じた。

しばらくすると、エステルは目を開き、こつちを向いた。

「ソータ様、申し訳ございません……」

泣きそうな目でそういうエステル。

俺は首を振って、

「俺が不注意だった。ごめんね」

と、謝り、そつと美しい金髪をなでた。

その後、治癒魔法をかけたいということ一旦ダンジョンへと移動する事になった。どうも日本では魔法が使えないらしい。しかし、服はボロボロ、実質全裸である。俺はTシャツとスエットパンツを柵か

ら掘り出して、エステルに渡した。

フラフラとしながら着替えるエステル。

「うふふ、ソータ様の匂いがしますう」

と、力なく笑う。

少しは余裕が出てきたようでホツとした。

エステルはブカブカのスエツトパンツのすそを折りたたむと、鏡の向こうをじっくりと偵察する。そして杖を持ってヨロヨロとダンジョンへと入って行った。

しばらくすると、鏡から顔を出して

「もう大丈夫です！ 先を行きましょう！」

と、元気に笑った。

俺はホツと胸をなでおろした。

だが……、俺はちよつと疲れてしまつて、いったん休憩を入れることにする。



コンビニに行つて、おにぎりやジュースなどを買い込む。異世界人は何を喜ぶのか良く分からなかったので、種類多めにして買つてみた。

「エステル、戻つたよー！」

部屋のドアを開けると……、いない……。

「おい！ エステル！」

声をかけるが返事がない。トイレにもベランダにもいない。

見ると靴もない。もしかして一人でダンジョンへ行つてしまったのでは？

折角生き返つたのに、一体何をやってるんだあいつは！ 俺はまたエステルを失うかもしれない恐怖に真つ青になった。

1-10. モンスターハウス

急いで鏡に頭を突っ込んでみると……。

「いやあああ！ やめてえええ！」

エステルがまたゴ布林たちに囲まれていた。

「グギャケケケ！」「グルグルグル！」「グギャ——！」

ゴ布林たちはうれしそうにエステルを取り囲んで雄たけびを上げる。

エステルは殺虫剤を持っていて、ゴ布林たちに吹きかけているのだが……、全然効いていない。一体なぜだ？

俺は急いで物干しざおと殺虫剤を手に取るとゴ布林たちに駆け寄り、殺虫剤をプシューつと噴霧した。

すると、ゴ布林たちは

「グギャアツー！」「ギャアツー！」

と断末魔の悲鳴を上げ、次々とドス黒く変色し……、溶け落ちて行った。

やっぱり殺虫剤は効くのだ。しかし、同じ製品の殺虫剤をエステルがかけても効かなかった……。こんな事あるのだろうか？

俺はいぶかしく思いながらも、エステルに駆け寄った。

「ソータ様あ！ うわああああん！」

エステルは思いっきり抱き着いてくる。

俺もホツとしてエステルをしつかりと抱きしめた。

温かく、そして柔らかい細身の身体。俺はそれを全身で感じ、無事を喜んだ。

「ヒックヒック……、ごめんなさい、描いた地図を洞窟に落としましたままだったので、ちよつと拾おうと出ただけなんです。そしたらいきなりゴ布林が湧いて……」

エステルは泣きながら説明する。

「これからは一人でダンジョンへ行くのは禁止な」

俺はぎゅつと抱きしめて言った。

「は、はい……」

ふんわりと立ち上ってくる甘酸っぱい優しい匂いに包まれて、俺は心から安堵した。

◇

部屋に戻り、オレンジジュースを一口飲んで、エステルが言った。「私の殺虫剤は効きませんでした……。やっぱりソータ様でないダメなんです。ソータ様は世界を救う稀人まれびとだったんです……」

キラキラとした瞳で俺をジッと見つめるエステル。

「いやあ、そんなことってあるのかな？ 誰がかけたって殺虫剤の成分は同じだよ」

「実際、私は効きませんでしたよ！」

「うん、俺も見てた……。なんでかなあ？」

「ソータ様が稀人ってことです！」

エステルは両手のこぶしを握って興奮気味に言う。

「うーん、良く分からないけど、エステルは引き続き後衛な。俺が殺虫剤担当で」

「はいっ！ 次は天井にも注意するです！」

エステルはうれしそうに言った。

◇

食後にダンジョンに再エントリーする事にした。

エステルには俺のパーカーを着せてみる。さすがにブカブカなのでそでを折って着てもらおう。エステルはパーカーの匂いをクンクン嗅いでうれしそうにニコニコしている。大丈夫だろうか？

ダンジョンに潜ると、スライムのいたところに出る。暗闇の危険性はよく分かったので、エステルに照明の魔法を使ってもらい、明るい中を移動していく。

次々と出てくるコボルトやオーク、ゴブリンを難なく倒しながら進んでいくと、壁面に大きな扉が現れた。

「あー、これはモンスターハウスかもです……」

エステルが言う。

「何それ？」

「モンスターがうじゃうじゃ大量にいる小部屋の事ですよ。宝も多い

ですが皆さん結構倒すのに苦労しているです」

「宝!」

俺は聞き捨てならない単語に色めき立った。

「そうです、宝箱の中に金貨とかポーシヨンとか、武器とかあるです」
「欲しい! 欲しい! 行こうよ!」

「えー!? ソータ様、安全第一で行くって言ったじゃないですか」

「殺虫剤が効くなら何とかなるよ。ダメだったら鏡に逃げよう」

「うーん、そうです?」

エステルは気乗りしない様子だった。でも、お宝を前に素通りはできない。俺は就活をほっぽり出してダンジョンに来ているのだ。何らかの成果を上げない限り、就活に戻らざるを得なくなる。もう『無い内定』の人なんて周りに数えるほどしかないのだ。

「さあ、やるぞ!」

俺はそう言つて、くん煙式殺虫剤『バルザン』を取り出した。家全体を煙でいぶすタイプの殺虫剤だ。俺はふたを開けて点火場所をこすつて火を起こす……。

しばらく待っているとブシューと煙が噴き出し始めたので、ドアを少しだけ開けてバルザンを放り込んだ。

そしてドアを閉め、輪っかになつてる取っ手の所に物干しぎおを突っ込み、かんぬき 門かのようにしてドアが開かないようにした。

少し離れて様子を見てみると、ドアが内側から激しい勢いでガンガン! と叩かれ、ドアがきしむ。

「いやあ!」

エステルがビビつて俺にしがみつく。

ここは物干しぎおに頑張つてもらうしかない。

魔物の叩く勢いでドアがギシギシと揺れている。

「頼むぞ、物干しぎお……」

俺は手に汗を握りながら推移を見守つた……。

「ソータ様あ……」

エステルが震えているので、俺はそつと頭をなでながらドアをにらんだ。

徐々に音は弱々しくなり、やがて何の音もしなくなった。
さて、どうになりましたやら……。
俺はそつと近づくと物干しざおを抜いた。

1-1-1. ステータスウィンドウ

俺は慎重にドアを開けて中をのぞく……。すると、部屋の中にはたくさん魔石が、赤に青に緑にいろんな色でイルミネーションのようにキラキラと光っていた。

「やったぞー！ 成功だ！」

俺は思わずガッツポーズ！

「きやあー！ すごーい！ さすがソータ様！」

エステルはピヨンピヨン飛び上がって喜んでくれる。

部屋の中を照らしてみると、魔石散らばるフロアの奥に祭壇があり、エステルの言った通り、宝箱が置かれていた。なんと一つも一番の楽しみは宝箱である。うしし……。

俺はまず魔石を拾い集めてみる。色とりどりの魔石が約三十個。これだけで金貨数枚になるらしい。日本円にして十数万円ですよ数万円！ バルザン焚いただけでぼろ儲けだ。

そして、最後に宝箱に近づく……。

「気をつけます。ワナがある宝箱もあるんです」

エステルが心配そうに言う。

「えー!? じゃ、どうしたらいいの?」

「ごめんなさい、私、開けたこと無いんです……」

駆け出しの冒険者には酷な質問だったようだ。

「まあいいや、ちよつとつついてみよう」

俺は物干しぎおで恐る恐る鍵の辺りをガンガンと叩いてみた。

すると、ガチャという重厚な音と共にふたが少し開く。

俺は物干しぎおで慎重にふたを持ち上げ、完全に開けてから遠巻きに中を覗き込む……。

「どれどれ……」

すると、そこには金貨と魔法の杖が収められていた。

「やったー！ 金貨だー！」

俺はガッツポーズして小躍りした。数えると金貨は五枚、推定二十五万円である。なんだよ、すごくいい商売じゃないか！

「杖もありますう！」

エステルも大喜びだ。

エステルに杖を渡すと、

「ステータス！」

と、叫んで何か空中を見ている。

「あれ？ エステル何を見てるの？」

「えっ？ ステータスですよ？ この杖の方が今のより少しいみた
いです」

と、当たり前のように言う。

「ちよ、ちよつと待って！ ステータスって見えるの？」

「はい？ 普通に見えるですよ？」

エステルは首をかしげる。

俺も真似して、

「ステータス！」

と、叫んでみた。

すると目の前に浮かび上がる青いウィンドウ。

ソータ 時空を超えし者

稀人 レベル：12

これ以外にもHP、MP、強さ、攻撃力、バイタリテイ、防御力、知力、魔力……と俺のステータス情報が綴られていた。

なんだこれは……、まるでゲームの世界じゃないか……。

俺は啞然とした。鏡を抜いたらゲームの世界？ では、エステルはゲームのキャラクター？ エステルのあの柔らかな肌も甘酸っぱい匂いもみんな作り物のゲームデータって事か？ こんな高精度で繊細なゲームなんて作れるのか？

俺はなんだかともんでもない世界にやってきてしまったことに、愕然とした。

そして、職業は『稀人』。やはり俺は神託に謳われた救世主らしい。一体なぜ俺がそんな存在にされているのだろうか？ もう、謎だらけでクラクラしてしまった。

とは言え、せつかくステータスが分かるのだからいろいろ聞いてみ

よう。

「レベルっていうのは魔物倒すと上がるのかな？」

「そうですよ、私は18、今ので少し上がったです！」

「え？ エステルそばにいただけなのに上がるの？」

「良く分からないですけど、ソータ様と一緒に行動してるからパーティ扱いみたいですね？」

なるほど、その辺は自動で判断して経験値が分配されるらしい。

「レベル18つてどのくらいなの？」

「ダンジョンに入るのがだいたい20からで、冒険者として認められるのが30。50まで行くと中堅です」

「ふむう、レベルあがると強さとかが上がるんだよね？」

「そうです、職業に応じてパラメーターの割り振りは変わります。私は侍僧アコライトなので魔法関係を中心に上がります」

「えーと、強さ上がると筋力ってアップするのかな？」

「筋力かどうかわからないですが、力強くなるです。Aクラスの冒険者さんは家の屋根とかに、簡単にピョーンと飛んでるです」

「マジか……」

この世界でやっていくなら、レベルは上げておいた方が良さそうだ。俺も屋根まで飛んでみたい。

「強い魔物倒した方がレベルは上がりやすいんだよね？」

「そうですよ」

「なら、ダンジョンのずっと奥でモンスターハウスばかり回ってたらすぐにレベルあがる？」

「うーん、理屈はそうですが……、奥は怖い……ですう」

確かに死んでしまっただけは元も子もない。でも、奥で安全に殺虫剤で倒せる魔物しか出ないルートを見つけたら、そこを回っているだけで安全に強くなりそう。昔ゲームでそうやって経験値を稼いだの思い出した。

調査をしてそういうルート、探してみたいなと思った。

1-12. 忘れられないケーキ

俺たちは一旦部屋に戻った。得られた金貨が本当に日本円になるか確かめないとならない。ゲームのような世界で得た金貨、本当に換金なんてできるのだろうか？

エステルには飲み物とおやつを出し、くつろいでもらって、俺は貴金属買取屋へと走った。ポケットで踊る五枚の金貨、果たして買い取ってなんてもらえるのだろうか？

スマホの地図を頼りに買取屋前までやってくると、調べた写真どおりのガラス張りのお店があった。『ブランド高額買取！』と、のぼりが立っている。

俺は大きく深呼吸をして気持ちを落ち着けると、自動ドアの前に行った。

「いらっしやいませー」

若い女性がにこやかに声をかけてくれて、俺はおずおずと店内に進む。

「買取ですか？」

「は、はい。金貨なんですけど、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ、それではそちらにおかけください」

女性は奥の綺麗なテーブルを指さした。

俺はこわごわと店内を進み、席に座る。

女性が飲み物を出しながら向かいに座る。

「どういった金貨ですか？」

「これなんですけど……」

俺は取ったばかりの五枚の金貨を、ラシヤの張られたトレーに広げた。

「ちよつとよろしいですか？」

そう言って女性は白い手袋をしてトレーを引き寄せる。

「どうぞ」

女性はコインをじっくりと眺め、ルーペで拡大して観察する。

そして、秤ばかりで重さをはかり、電卓をパチパチと打った。

「見たことのない金貨ですが、金には間違いなさそうですね。今の金の価格が6,611円なので、五枚でこの金額なら買い取らせていただきます」

電卓には『285,110』とある。

「二十八万ですか？」

俺は驚いた。宝箱から拾ったばかりの金貨が、サラリーマンの初任給をはるかに超えている。

「そうですね。他店へ行かれても同じような金額になると思います」

女性は淡々と言う。

「わ、分かりました。買取をお願いします」

「それでは身分証明書をお願いできますか？」

「は、はい！」

俺は買取手続きを進め、あっさりと現金の入った封筒を手渡された。

ずっしりとした重みを感じる封筒……。これが冒険者としての初任給と言えるかもしれない。

俺は帰り道、人目につかない所でガッツポーズを繰り返した。

「行ける！ 行けるぞ！ もう就活なんて止め止め！ 俺は冒険者になるのだ！」

俺はうれしくてうれしくて何度も飛び上がった。



ケーキ屋で芸術的な装飾が施された高級なケーキを二つ買い、部屋に戻った。

「ただいまちゃん！」

俺は上機嫌でリビングのドアをバーンと開けた。

すると……、

「いっちにー！ いっちにー！」

エステルがTシャツ一枚で、下に何もはかずに腕を振り上げ、踊っていた。

真っ白く艶やかで優美な曲線を描く太もものラインが、露わになって揺れている。

「え?」

あまりに予想外の事に呆然ぼうぜんとする俺と目が合った……。

「きゃあ!」「うわあ!」

俺は後ろを向いて聞いた。

「ご、ごめん……。でも……。何してるの……。?」

エステルは急いでスウェットをはきながら言う。

「申し訳ないですう……。日課の体操なんです。暑くなっちゃって……」

「あー、ごめん。エアコンの使い方教えてなかったね」

俺はエアコンのリモコンを取ると、見せながらボタンを押した。

「これを使うと涼しくなるんだよ」

「え!? すごい! 氷魔法です!」

「魔法じゃなくて科学だな」

「科学……。?」

首をかしげるエステル。

やがて出てきた冷風を浴びて、

「うわあ、涼しいですう」

と、目を閉じて金髪をなびかせながら幸せそうに言った。



「ケーキ食べよう! ケーキ!」

そうやって俺はテーブルにケーキを並べた。

ケーキの上にはパティシエが丹精込めた芸術的なチョコのオブジェが載っている。

「えっ!? 何ですかこれ!」

「いいから食べてごらん」

俺はフォークを渡す。

エステルは恐る恐るフォークでチョコのार्टを口に運ぶ……。

「うわあ! あまあい!」

最高の笑顔を見せるエステル。

「金貨を使って買って来たんだ」

「うふふっ、金貨最高ですう!」

「そうそう、最高だよ！　ちゃんと最後に清算してエステルにも渡すからね」

「いやいや、私は付き人ですから……」

「遠慮しないの、一緒に儲けよう」

「……、頑張るです！」

俺たちは笑顔で見つめ合いながらケーキを味わう。

それは忘れられない最高の味がした。

1-13. 双頭のワイバーン

夕方になり、本日最後のダンジョン・エントリーを行った。

さすがに慣れてきて、俺たちはオークやゴブリンたちを難なくこなしていく。

そろそろ階段が見つかってもいいのに、と思いつつながら洞窟を歩いて行くと、地面に怪しい筋を見つけた。

「エステルこれって……」

俺が指をさすと、

「あっ！ ワナですよ！ ワナ！ このタイプは落とし穴ですよ」

と、エステルが説明してくれる。

「どれどれ……」

俺は物干しぎおでガンガンと、あちこちを叩いてみる。すると、カチツ！ という音を立てて床が下へと開いた。

「おおおお……」

おつかかなビツクリ穴をのぞいたが、真っ暗で何も見えない。ヒュオオオオ……と風が吹きあがってくる。生暖かく、カビくさい臭いがする。

「どこに繋がってるのかな？」

「うーん、分からないですう。でももっと強い魔物が出るところです、きつと」

すると、穴の奥から

「ウオオオ！」

と、かすかに声がして、ガン！ という衝撃音が伝わってきた。誰かが戦っているようだ。

「誰かいるぞー！」

俺は聞き耳を立てた。

(ホーリーシールド……)

かすかに人の声がする。

それを聞いたエステルは驚いたように言う。

「あっ、クラウドディアさんです！」

「え？ 知り合い？」

「私の先輩のプリーストです。怖いですが、腕は立つです」

「ふーん、じゃ、行ってみようか？」

「え!? 安全第一じゃないんですか？」

「凄腕の知り合いが戦ってるんだろ？ 見てみようよ。危なかったら

鏡に逃げればいいし」

「うーん、そうですが……」

「で、どうやって降りるの？」

「ホーリークツションという魔法があります。ゆっくり落ちれるです」

「じゃあそれで！」

「……。本当に行くんですか？」

エステルは乗り気じゃないようだ。

「え？ 不安？」

「クラウディアさん、ちょっと苦手なんです」

と、うつむいて言うエステル。

なるほど、ソリのあわない先輩ということだろう。どうしようかな……。

悩んでいると、

(キャ——！)

という悲鳴が聞こえてきた。どうやらピンチらしい。

「どうやら助けに行かないとならないらしいぞ」

「うーん、じゃあ、行くです！」

エステルは杖を掲げると、

「ホーリークツション！」

と叫ぶ。するとエステルの身体がぼわっと淡い光に包まれた。

「ソータ様、つかまるです！」

そうやって手を出すエステル。

俺がエステルの手をガツシリとつかむと、エステルは、

「せーの、で飛ぶです！」

と、俺の顔を見る。

俺はうなずき、一緒に

「セーのっー」「セーのっー！」

と言って落とし穴に飛び込んだ。

魔法のおかげで落ちる速度は緩やかだった。

ふわふわとゆっくり真つ暗な落とし穴の中を落ちて行く……。

ソイヤ———！ カン！ カン！ グオオオオオ！

戦闘音が徐々に大きくなってくる。

すると、急に視界が開けた。そこは大きな広間になっていて、観光バスくらいのサイズの巨大な恐竜に似た魔物が暴れている。二本の長い首をブンブンと巧みに振り回し、翼を大きく羽ばたかせ、挑んでいる四人の冒険者を翻弄していた。魔物はトカゲのようないか鋭ついウロコに覆われ、巨大な口には鋭い牙が光っている。

どうやったらあんなのを人間が倒せるのか、俺には想像もつかなかった。

「双頭のワイバーン!？」

エステルが驚いて声を上げる。

「強いのか？」

「珍しいAランクの魔物です！ ただのワイバーンならBランクなんです……。クラウディアさんのパーティだと厳しいかもです……」

と、その時、ワイバーンの二つの頭がそれぞれ大きな口をパカッと開けた。

「来るよー！」

クラウディアが叫ぶと同時にワイバーンがファイヤーブレスを放つ。二つの頭が前衛と後衛にそれぞれ火炎放射を浴びせ、辺りは火の海となった。

「キヤ———！」 「ぐおおおお！」

叫び声上がる。

火が収まると黒いローブをまとった女性が倒れていて、白い法衣をまとったクラウディアが走って治癒魔法を発動していた。

1-14. ハチ・アブ・マグナムZ

俺たちはそつと脇の方に着陸したが、これはどうしたらよいのだろうか……。

どう見ても苦戦している。助けた方がいいのではないだろうか？ クラウディアは銀髪で緑色の瞳をした美しい女性で、口元をぎゅつと食いしぼり、必死に戦っている。

俺たちはクラウディアに近づいて、声をかけた。

「お手伝いしましょうか？」

クラウディアは俺とエステルをチラツと一瞥^{いちべつ}すると、

「エステル!? ひよっこどもは邪魔邪魔！ あっち行ってな！」

と、邪険にする。

確かに俺の装備は防刃ベストに物干しぎお。どう見ても頼りない。役立たずに思われたのは心外だが……、仕方ないだろう。

俺はエステルと目を見合わせ、肩をすくめながら少し下がった。

ワイバーンは下から見ると異常にデカく、攻撃もすさまじい。見上げるような高さから長い首をブンブンと振り回し、頭に着いた長い角をものすごい勢いでぶち当ててくる。その度に、ガーン！ という激しい衝撃音が上がっていた。俺が直撃を受けたら間違いないで即死である。これが魔物との戦闘の現実なのだ。思わずゴクリとツバを飲んだ。

戦闘を見ていると、盾役がワイバーンの攻撃を一手に受けながら、剣士と魔術師が死角から攻撃を加えていくスタイルのようだが、頭が二つあるためどうしても一方の頭の攻撃を抑えきれないようだ。

「ジャック！ またターゲット外れてるわよ！」

クラウディアが盾役に叫ぶ！

その直後だった、ワイバーンが巨大な尻尾をいきなりブンつと振り回し、剣士と盾役が吹き飛ばされた。

「ああっ！」「キャ——！」

前衛崩壊である。

ワイバーンはズーンズーンと地響き鳴らしながらクラウディア達

に迫った。

「ホーリーシールド！」

クラウディアは光り輝く魔法の防御壁を展開する。しかし、ワイバーンの力は強大だ。ガーン！ ガーン！ とシールドにデカい角をぶち当て、今にも崩壊しそうであった。

「キャ——！」

クラウディアにしがみついた魔術師が悲鳴を上げる。

「ちよつとアウラ！ しっかりして！」

クラウディアは必死になってシールドを支えながら叫ぶ。

さすがにこれは出番だろう。俺はリュックから最強の殺虫剤『ハチ・アブ・マグナムZ』を取り出し、取っ手をガチャツと下ろしてロツクを外した。これはスズメバチ用の最終兵器、射程距離はなんと十三メートルもある。ホームセンターで一つだけ残っていた俺のとおつておきの切り札だった。

そして、クラウディアに近寄って言った。

「このトカゲ、倒しちやつていいですか？」

クラウディアは俺の方をキツとにらむ。

ダサイヘルメットをかぶった工事現場の作業員のような身なり。武器らしい武器も持ってない。なのになぜこんなに自信満々なのか？ と、クラウディアは困惑してるようだった。しかし、前衛崩壊、ホーリーシールドが破られたら全滅確定の命の危機に、答えなど一つしかなかった。

「お、お願いします……」

俺はニコツと笑うとシールドの脇から殺虫剤を噴射した。

ブシュ——！

派手な音を立てながら殺虫成分がワイバーンに襲いかかる。

ワイバーンは俺の方をギロツと睨んだが、直後、「ギョエ——！」と断末魔の叫びを上げながらどす黒く変色し……、そしてドロツと液体になって溶け落ち、最後には真っ赤な魔石がコロコロと転がった。

「う……、うそ……」

クラウドディアは目を真ん丸に見開いて言った。魔術師も啞然あぜんとしている。

「はい、お疲れ様でした」

俺はクラウドディアを見てニツコリと笑いかけた。

「あ、あなた何やったの？」

クラウドディアは眉間みけんにしわを寄せて聞いてくる。

「俺は薬剤師、ワイバーンに効く薬を調合して、かけたんだよ」

俺は適当に嘘をつく。そもそも俺自身、なぜ殺虫剤で魔物を倒せているのか分からないのだ。でも、『分からない』じゃ誰も納得しない。それっぽい説明しておいた方が都合が良さそうだった。

「薬剤師……。聞いたことないわ。あの娘こと……。パーティ組んでるの？」

そう言つてエステルの方を見る。

「そうです！ 私はソータ様の付き人なんです！ ソータ様は何と言つても……」

エステルは得意げに解説を始めたので、俺は、

「エステル！ あの倒れてる前衛を治してやってくれ！」

と、ごまかした。稀人だということを知られると、ロクなことにならないに違いないのだ。俺は金貨を安定的に得られる道を作るのが第一目的なのだから。

「あ、そ、そうですね！」

エステルがテツテツと走つて治癒魔法をかけにいった。

「た、助かったわ……。ありがとう……」

クラウドディアは疲れ切った顔で伏し目がちに言った。魔術師も頭を下げる。

俺は真紅に輝く魔石を拾うと、

「これは山分けでいいですか？」

と、聞く。

クラウドディアは首を振つて言った。

「何言つてるのよ。あなたの物よ。私たちは命があっただけでもラツキーなんだから」

「そう？　ありがとう」

俺はうれしくなった。Aランクの魔物なのだ、きっと金貨十枚くらい……六十万円近い収入になるに違いない。俺は小さくガツツポーズをした。

1—15. 魅惑のヘッドハント

「あ、そうだ！ どうやって帰るか分かりますか？」
俺はクラウディアに聞く。

「え？ あなた達、地図も持ってないの？」
驚くクラウディア。

「落とし穴を落ちてきたので……」
「呆れた……。ここは60階のボス部屋。そのドアを開けると地上へのポータルがあるはずよ」

そう言っただけでクラウディアは壁面にあるドアを指さした。

「ありがとうございます。それでは……」

俺はそう言っただけで、帰ろうとした。

「ちよつと待って……」

クラウディアは立ち上がると俺の手を取り、両手で包んで言った。
「え？」

「あの娘より私の方が役に立つわよ……。どう？ 組まない？」

クラウディアは上目遣いで俺の目をジッと見て、ニッコリと笑った。戦闘の汚れが見えるが、すべすべとした肌に整った目鼻立ち、相
当な美人である。

「い、いや、ちよつと……そのう……」

俺が困惑していると、

クラウディアは俺の手を胸に押し当てる。豊満な胸は温かくてマ
シユマロのように柔らかく俺の心臓はドクドクと高鳴る。

「ソ、ソータ様……？」

エステルが戻ってきて驚き、寂しそうな目で俺を見る。

「あー、いや、これは……」

俺が言葉に窮していると、クラウディアはニヤツと笑い、

「どっちがいいか……。よく考えてみてね。また後で！」

そう言っただけで俺にウィンクをすると、仲間の方へと歩いて行った。

エステルは俺の手をそつと両手で取り、寂しそうにうつむいた。

「大丈夫だよ、エステルを見捨てるような事しないから」

俺はそう言ってエステルをポンポンと叩く。

「ほ、本当です……？」

エステルは今にも泣きそうな目で言った。

俺はニツコリとうなずく。

「良かったですよ」

エステルは胸をなでおろし、安堵あんどした表情を見せた。

◇

ドアの向こうにあった、白く光りながらクルクル回るポータルに触れると、身体がふわつと浮いて景色が変わった。そこは洞窟の入り口だった。夕暮れ間近な傾いた日差しの中で、多くの屋台が出て、冒険者でにぎわっている。

冒険者たちは皆冒険用の装備でバツチリと決めていて、まさにファンタジーの世界だった。それぞれよろいやローブをまとい、派手な剣や杖を装備し、中にはデカイ盾を背負っている者もいる。

「おお……」

俺が圧倒されてキョロキョロしていると、

「あつ！ 串焼き食べるです！」

エステルが俺の手を引いて屋台に連れて行く。

「はい、いらつしやい！」

おじさんはにこやかに対応してくれる。

「俺、魔石しか持ってないよ」

と、エステルに言うのと、

「魔石でも大丈夫ですよ！」

と、おじさんが答える。

「え？ そうなんですか？」

俺はゴブリンの緑の魔石を出すと、

「それなら二本だね」

と、言って俺とエステルに一本ずつ肉の刺さった串を渡してくれた。

炭焼きで香ばしい香りが立ち上る串。俺は一口食べてみる。

少し硬いが、噛むと肉汁がジュワツと湧き出してきて、それがタレ

の甘みと合わさり、素敵なハーモニーを奏でる。

「うはっ！ これは美味しい」

俺は思わず声に出してしまう。

「ありがとうございますー！」

おじさんもうれしそうに言う。

「この屋台は評判なんですよ」

エステルは口の周りをタレだらけにしながら、ドヤ顔で言った。

1—16. 真紅に輝く魔石

串焼きを食べながら歩いていると城壁が見えてきた。あれがエステルの暮らす街らしい。

「俺が『稀人かもしれない』っていうのは内緒にしておいて欲しいんだよね」

串焼きの最後の肉をかじりながらエステルに言った。

「え？　なんでです？」

「だって、稀人だったら徴兵されて国の防衛に回されちゃったりするんだろ？」

「うーん、まあ、王様に謁見えっけんはしないといけませんね」

「ほらほら、俺そういうの嫌なんだよね」

「え——！　でも、ソータ様にはこの世界を護まもっていたただかないと……」

「徴兵されちゃったらもうエステルとは会えないと思うよ」

「えっ!？」

急に立ち止まるエステル。

「だってそうだろ？　エステルはただの冒険者なんだから、軍隊には入れてもらえないよ」

「そ、そうでした……」

しよげるエステル。

「だから、稀人の事は内緒な」

「でも……。世界を救わないと……」

「そんなの二人で救えばいいよ」

俺はそう言ってニッコリと笑った。

「そ、そうですね！　ソータ様ならどんな魔物でも瞬殺ですもんね！」

パアツと明るい顔をして俺を見るエステル。

俺はうんうん、とうなずいた。

最終的に国の組織に所属するにしろ、情報を集めておくことは重要だ。何も知らずに国に利用されるような事だけは避けなくてはなら

ない。

まずは自分達だけでできる範囲の事はやってみようと思う。何しろ金には困らないし、いざとなったら日本に逃げればいい。



立派な城壁の門をくぐると、そこは中世ヨーロッパのような素敵な石造りの建物が並んでいる綺麗な街だった。路面は石畳で、馬車がカツポカツポと行きかっていた。

「うわあ、素敵な街だね」

俺が声を上げると、

「ここ、バンドウの街はこの辺では一番大きいんです！」

と、エステルが自慢げに説明してくれる。

しばらく歩くと、剣と盾の絵が描かれた木製の看板の建物が見えてきた。石造りで歴史のありそうな重厚な趣きおもむを感じる。

「ここが冒険者ギルドです！ 魔石の買取と、ソータ様の冒険者登録をやるです」

エステルがニコニコしながら言う。

「エステルの生還も報告しないと」

「あつ、そうでした……」

ちよつと恥ずかしそうに下を向く。

木製のドアを開けると、ギギギーときしみ、酒とたばこの臭いがムツと漂ってくる。

正面にカウンターがあり、左右はロビー。数十人の冒険者たちが賑やかに歓談していた。

俺はちよつとアウエーな感じを受けながらカウンターを目指す。

「あら、エステルちゃんー！」

渋い赤色のジャケットを着こんだ受付嬢は、エステルを見るなり驚きの声を出す。

「えへへ、無事、帰ってこられたです……」

「良かったわ……」

受付嬢は涙ぐみながらエステルの生還を喜んでくれた。

「あなたのパーティはもう別の僧侶を見つけて、ダンジョンへ行つた

わ。残念だったわね……」

「それは仕方ないです。それに、このソータ様と新しいパーティ組むので大丈夫です」

そう言つて、エステルは俺を引き寄せた。

「ソータさん……ですか？ 初めてですよね？」

「そうです。冒険者登録と魔石の買い取りをお願いできますか？」

俺はそう言いながらバッグの魔石の山を見せた。

受付嬢は魔石の山をジーツと見て……、

「えっ！ これつてもしかして……」

と、驚きながら真紅に輝く魔石を手を取った。

「双頭のワイバーンですよ！」

エステルが自慢げに言う。

「双頭のワイバーン!？」

驚く受付嬢。ロビーの冒険者たちが一斉にこつちを振り向く。

「ソータ様が一人で倒したんです！」

受付嬢は驚きの表情のまま俺の顔をジツと眺め……、

「しよ、少々お待ちください！」

そう言つて奥へと駆けて行った。

1-17. 歴戦の猛者の風格

ヒソヒソと、ロビーの冒険者たちが俺たちの事を話しているのが聞こえてくる。

なんとも気まずい時間が流れた。

「ちよつと、二階の部屋へ来ていただけますか？ ギルドマスターがお呼びです」

受付嬢がそう言いながら出てきて、階段の方へ案内する。

彼女はコンコンと重厚な木製の扉を叩き、ギギギーと開くと、

「どうぞお入りください」

と、言った。

案内されるがままに部屋へ入ると、ひげを蓄えた中年の男が鋭い目つきで俺を見る……。ガツシリとした筋肉質の体格は凄腕の冒険者といった風貌だった。

そして、相好を崩すと、

「すまないね、ちよつと話を聞かせてくれるかな？」

そう言ってソファアの椅子をすすめた。

俺たちはソファアに座って姿勢をたただす。

「ソータ君？ 双頭のワイバーンを一人で倒したって本当かね？」

向かいに座ったギルドマスターは射抜くような視線で俺を見て言う。

「そうです。この薬剤を噴霧して倒しました」

そう言って俺はスプレー缶を見せた。

「薬剤？」

「私は薬を操るスキルを持っていて、それで魔物を倒します」

「ほう……。そんなスキル初めて聞いたな……」

エステルが横から言う。

「私も見てましたし、クラウディアさんが一部始終を見ています！

後で彼女に確認してください！」

ギルドマスターはエステルをチラツと見た後、俺の目をジツと見つめ……。そして言った。

「なるほど、それであれば問題ない……。ところで、君は稀人って知ってるかな？」

キタ——！ と内心思いながら、

「え？ 何ですかそれ？」

としらを切る。

「魔物からこの地を救う救世主の事なんだが……。君はもしかして稀人だったりしないかね？」

鋭い視線が俺を射抜く。俺は内心ビビリながらも、就活で鍛えた取り繕うスキルで、

「残念ながら私はただの薬剤師ですね」

と、淡々と嘘をつく。

「稀人だったら貴族扱い、上流階級の暮らしができるんだぞ？」

ギルドマスターは身を乗り出してアピールする。

「マスターがもし稀人だったら申告しますか？」

俺は極力表情を出さないようにしながら聞いた。

マスターは眉をしかめ……。腕を組んで考え込み……。ニヤツと笑って言った。

「まあ、しないだろうな」

俺はニコツと笑い、

「もし、将来稀人になる事があつたら申告します」

そう返した。

「……。まあいい。君も聞いているかもしれないが、今、人類は危機に立たされている。最近になって頻繁に十万匹規模の魔物の大津波が街を襲ってくるようになった。すでにいくつもの街が滅ぼされている」

ギルドマスターは苦虫を噛み潰したような顔をして言った。

「深刻ですね……」

「それに対抗する切り札が稀人……。と、されている。君もこのギルドの一員になるという事であれば、魔物の侵攻の際には力を貸してくれる」と困る

「もちろん、そのつもりです」

ギルドマスターは俺の目をジッと見据え……、

「頼りにしてるぞ……」

と、熱を込めて言った。

「が、頑張ります」

俺は気迫に圧倒されながら答えた。

「それで、ギルドカードのランクだが……、双頭のワイバーンを一人で倒せるなんてのはもはやSランクだ。しかし……初発行の最高ランクはCなのだ。まずはCランクから始めてもらおうでいいかな？」

「私は何でも」

そもそもランクが何を意味するのかもわかってないのだ。そう答える以外ない。

「よろしい！ では、Cランク冒険者のソータ君、これからよろしく！」

ギルドマスターは右手を差し出し、俺は握手をする。

ギルドマスターの手のひらは皮が厚くゴツゴツとして、歴戦の猛者の風格を感じさせた。

1—18. レディーの歳

一階に戻り、魔石を換金したら全部で金貨十五枚ちよつととなった。百万円近い利益だ。なんかもう就活なんて馬鹿らしくなってきた。

そしてCランクの認識票とギルドカードを受け取る。認識票は赤茶色の銅の板のネックレスで、一目でCランクと分かるようになっていられるらしい。ちなみにBランクだと銀でAランクだと金だそうだな。なお、エステルは駆け出しのFランクなので陶器。ちよつと安っぽい。

Cランクに到達できるのは20人に一人くらいで、なおかつ多くが中年のベテランなので、俺みたいに若くてCランクなのは超エリートなんだそう。悪い気はしないが……、ただ殺虫剤まいているだけなのでちよつと気が引ける。



ギルドを後にする頃にはすでに真つ暗になっていた。

「時間かかっちゃったね、ごめんね」

俺はエステルに謝る。

「そんなの全然大丈夫ですよ。それより、お腹すきませんか？」

エステルは俺を覗き込むように見つめ、ニッコリと笑う。

「あー、お金儲かったし、パーツと行くか！」

俺はニヤツと笑って言うと、エステルは、

「やったあ！」

と、言ってピヨンと飛んだ。



エステルのおすすめのレストランに入ると、おばちゃんが声をかけてくる。

「あら、エステルちゃん！ いい男連れてデートかしら？」

「デ、デート!? ち、違いますよお、パーティ結成記念なんです！」

真つ赤になって答えるエステル。

「ふうん……、じゃあそのテーブル使って」

俺たちは窓際の席に座った。

「ここは肉料理が美味しいんですよ！」

エステルがうれしそうに言う。

「好きなの頼んでどうぞ」

俺は微笑みながら返す。そう言えばまともな食事は久しぶりかもしれない。期待が高まる。

結局、俺はエール、エステルはリングゴ酒、それからエステルがお勧めの料理をいくつか頼んだ。

すぐにやってくる木製のジョッキ。

「それでは、無事の帰還を祝って！」

「カンパニー！」「かんぱーい！」

俺たちはジョッキをゴツつとぶつけてお互いの健闘を祝った。

ゴクゴクつとエールを飲むと、ホップの香りが鼻腔をくすぐって爽快だ。

「カー！ 美味しい！」

「美味しいですねえ」

エステルはニコニコしている。

「はい、おまたせ〜！」

しばらくすると、おばちゃんが大きな皿をドンとテーブルに置いた。

皿には大きな骨付き肉がどつきりと入っている。

「うわっ！ なにこれ!？」

俺が驚いていると、エステルはいきなり手づかみで齧り付いた。そして、

「美味しいですう〜」

と、うっとりとした幸せそうな顔をする。

「どれどれ……」

俺も真似して齧り付くと、癖のない旨みたっぷりの肉汁がジュワツと湧き出て、甘辛いスパイシーなタレのとのハーモニーが奏でられる。これは美味しい！

さらに少し濃くなった口にエールを流し込むと……最高！ まる

で天国だ。

俺もエステルも無言でひたすら貪り食った。これは東京でお店やってもウケるに違いない。異世界恐るべしである。

「お肉以外も食べてね〜!」

そう言つて、おばちゃんが野菜の煮込みと豆を潰した練り物の皿を並べた。

野菜はボルシチっぽく、豆は中東のフムスに似ていて両方ともメチャクチャ美味い。このお店、凄すぎる。毎晩通いたいくらいだ。

あつという間にエールが空いたので、

「おかわりお願いしま〜す!」

と、おばちゃんに頼むと、エステルも

「私も〜!」

と言つてジヨツキを掲げる。

「あれ? エステルつてお酒飲んでいい歳なんだっけ?」

今さらながら不安になってきた。

「こう見えても、もう大人なんです!」

「え? いくつ?」

「レ、レディーに歳聞いちやダメなんです!」

そう言つてパイッと向こうを向いた。

「ごめんごめん。でも、飲み過ぎないでよ」

「大人なので大丈夫です!」

胸を張るエステル。

大人……、ねえ……。俺は嫌な予感がよぎる。



「そう言えば『シューカツ』は大丈夫ですか? お祈りしてるんですか?」

肉をかじりながらエステルが聞いてくる。

「就活ね、今はやってる暇がないな。ここでの暮らしに目途が付かなくやまた始めないと……」

「シューカツすると何が良いですか?」

「いい会社に入れるんだよ」

「いい会社？ 毎日金貨もらえるのですか？」

「いや、そんなにももらえない……」

「楽しいんですか？」

「いや、楽しいわけではないかな？ 四十年間毎日お仕事に通い続けるだけだから……」

俺は自分で言っただけで暗い気持ちになって沈んだ。

「四十年!? 楽しくないことやったらダメです！」

エステルはあきれて怒る。

「いや、お金稼がないと……。衣食住にはお金かかるでしょ？」

「そのくらい、私が何とかするです！ シューカツしなくても大丈夫です！」

エステルはニツコリと笑う。

「え？」

俺は何を言われたのか分からなかった。それって……。ヒモってことじゃないの？

「いやいやいや、そんな、エステルに頼れないよ」

「ソータ様は私の恩人です。遠慮しなくて大丈夫です！」

エステルはそう言っただけで胸をポンと叩いた。

俺は困惑した。

可愛い女の子に養ってもらいながら、異世界でのんびり暮らすなんて……。ん？

それって最高なのでは？

いやいやいや、ちよつと待って。俺は日本でいい会社入って、毎日朝から晩まで働いて、可愛い嫁さんもらうんだ……。って、そんな実現怪しい道より目の前のヒモ？

俺は頭を抱えた。

可愛い少女のヒモ……。なんて魅力的なんだ……。

「嫌です？」

「いや、嫌じゃないよ！ 嫌じゃない！ ただ……」

俺はここで思い直す。やはり自分の人生は自分の足で自立しなきゃダメだ。やりがいをもって稼ぐこと、これが人生には大切な

だ。

「大丈夫、ありがとう。俺はちゃんと自分で稼ぐから」

俺はそう言つてニツコリと笑つた。

「そうですか？ いつでも頼つてくださいね」

エステルはちよつと寂しそうに言う。

俺は自分のことを一生懸命考えてくれる少女の言葉に、胸が熱くなる思いがした。こんななを考えてくれる人に会つたのは初めてかもしれない。俺はちよつと目頭を押さえ、この素敵な出会いに感謝をした。

1—19. 大人の誘惑

と、その時、いきなり声をかけられた。

「(こ)……、いいかしら？」

驚いて振り返ると、クラウディアだった。

着替えてワンピースになり、お化粧もバツチリ決めたクラウディアは、まるで別人のように美しかった。

「ど、どうぞ……」

おれはその美貌に圧倒されながら席を引いた。

「エールお願いしまーす！」

クラウディアはおばちゃんに向けて叫ぶ。

「ど、どうしたんですか？」

俺はドギマギしながら聞く。

「前を通りがかつたら見かけたので……。さつきはありがとう。助かったわ」

クラウディアはニツコリと笑う。

「いや、こちらこそ魔石をありがとう」

俺は照れながら頑張って返事をした。

ジョッキが来たので乾杯である。

「では、お疲れ様！ カンパーイ！」

「カンパーイ！」「かんぱーい」

クラウディアは俺をジッと見つめる。美人に見つめられるとエールの味が良く分らない。俺はゴクゴクとエールを飲んだ。

クラウディアはエステルを鋭い目でチラツと見る。

「お、おトイレ、行ってきます……」

エステルがちよつとビビったように席を立つ。

「それで……。さつきの話、考えてくれた？」

エステルの後姿を確認した後、クラウディアは単刀直入に切り込んでくる。

「あ、ありがたいお話ですが、もう僧侶はエステルがいるので……」

俺は気圧されながら答える。

クラウディアは俺の手を取り、自分のふとももの上に載せ、手を重ねた。

「私あの娘こより優秀だし……、きつと満足してもらえるわ」

上目づかいに俺を見るクラウディア。

エステルとは違う、大人の魅力を漂わせるクラウディアに気圧される俺。

「お、俺と組んで何をやりたいんだい？」

「ダンジョンの百階。ボス部屋の奥にあるはずの、まだ誰も行った事のない伝説の宝物庫……。私、行き方知ってるのよ。あなたと私なら行けるわ」

なるほど、それは面白そうだ。

「取り分は七対三、私は三でいいわ。どう？」

クラウディアは俺の目をのぞきこむ。

「うーん……」

確かに魅力的な話だ。だが……、何かが引っかかる。

俺はエールを一気にグツと飲む。

「悩む事なんかないじゃない！ あの娘こじゃ無理よ！ 私とだから行けるのよ？」

必死にアピールするクラウディア。

そこにエステルが寂しそうな顔をして、うつむきながら帰ってきた。

俺は大きく息をつくと言った。

「魅力的なお話だけど、お断りします」

「なんで!？」

クラウディアはいきり立つ。

「エステルは『世界を護って』って俺に言うんだよ。命かけるならお宝じゃない、世界平和だ」

「当然、私だって魔物の襲来時には手伝うわよ！」

「それはそうなんだけど、百階攻略で死んじやう可能性もそこそこあるだろ？」

クラウディアは俺をにらむ。

俺は視線に耐え難くなり、エールを一気に空けた。

「ああ、そう。分かったわ！」

クラウドディアはバッグから銅貨を何枚か取り出し、パンとテーブルに叩きつけると、

「きつと後悔するわよ！」

そう言っただち上がり、足早に店を出て行った。

やっちゃったかなあ……。俺は美しい後姿を揺らしながら出ていく彼女をボーっと見ながら、すでにちよつと後悔をした。

「ソータ様あ……」

エステルはウルウルしながら俺の手を取った。

俺はエステルの頭をポンポンと叩く。

「すみませーん！ エールおかわり！」

おばちゃんに叫んだ。

◇

腹いっぱい飲み食いして、店を出る。

エステルは気持ちよさそうにふらふらしながら、

「お月様がきれいですう」

と言っただけ、両手を月に伸ばした。

正直言えば、クラウドディアと一緒にお宝狙った方が正解なんだろう。でも、エステルとクラウドディア、どっちと冒険したいかと言えばエステルだ。クラウドディアの方がナイスバディだし、優秀なものも間違いない。でも……。利益でつながる人間関係はぜい弱。損得勘定が合わなくなつた瞬間裏切られるリスクが常に付きまとう。

その点、エステルは損得で動いていないから、離れられることはあっても裏切られる心配はなさそうだ。

しかし……。あのナイスバディと仲良く……。なりたかったな。

俺の煩惱が後悔を誘っていた。

2-1. 創世の女神

「ここがうちの教会アース！」

上機嫌なエステルは、腕をピンと伸ばして紹介する。

ゴシック様式に似た重厚な石造りの教会は尖塔を持ち、ずいぶんと立派だ。

「それでは、ご案内しまーす！」

そう言つて通用門のカギを開けて中へと入っていくエステル。

エステルの家に行くつて話だったのに、なぜ教会へ行くのか？

俺は疑問に思ったが、エステルは楽しそうなので、仕方ないかといつて行つた。

教会の中へ入ると中は広く、正面には立派なステンドグラスがならび、壇上には巨大な女神像が飾られていた。

「おお……、凄いな……」

思ったより壮麗な教会に目を奪われる。さっきの料理といい、異世界の文化には驚かされることが多い。まるで海外旅行しているみたいだ。

俺は美しい大理石でできた女神像へと近づき、エステルに聞いた。

「これが君たちの神様？」

「そうアース！ この世界を作られた偉大なる女神様、ヴィーナ様アース！」

近くから見上げると、石像は非常に美しく精緻に作られており、ほれぼれとする……。

が、この顔、どこかで見たことがある……。整った小顔でシャープなギリシヤ鼻……。

美奈先輩だ！

そう、これは俺に飲み会で鏡の通り抜け方を教えてくれた美人の先輩、美奈先輩じゃないか！

サークルで一緒にダンスして踊っていた先輩がなぜ、異世界で女神様として祀まつられているのか？

「美奈先輩……。美奈……。ヴィーナ……。ん？」

『美奈』を音読みすると……『ピナ』！ 名前まで一緒じゃないか！
彼女がこの世界を作り、俺をいざなった……。

なぜ彼女はこの世界への来かたを知っているのか、と思っていたが、知っていて当然なのだ。この世界は彼女が作ったものだったのだから。

なぜそんなことができるのか、なぜ俺を送り込んだのか、一体この世界は何なんだ？

俺は思わずめまいがした。

ふう……。

俺は大きく息をつく。

何だか自分の意志とは関わりのない、大きな流れにほんろう翻弄されている気がした。先輩には話を聞きにいかないなどと思った。

振り返ると、エステルが席について机に突っ伏している。

「おい、どうしたんだ？」

俺が駆け寄ると、

「きぼちわるいですう……」

と、青い顔をしている。飲み過ぎだ。

「あー、だから言わんこっちゃない」

「なんか出そうですう……。うおうう」

えすぎでした、ヤバイ。

「トイレ！ トイレ！」

俺は教会内を見回すが、どこがトイレか分からない。

仕方ないので、鏡を取り出し、エステルの頭からかぶせて俺の部屋へと転送させた。

そして、教会の奥の物置みたいな所に鏡を立てかけ、俺も急いで部屋へと戻った。

床で動けなくなっているエステルを、トイレまで運んで背中をなでてやった。

「うおおお！ うええ……」

ビチャビチャと便器に吐くエステル。

なんと世話のかかる奴だろうか。クラウドディアの言うこと聞いた

方が良かったかもしれない、と少し後悔した。

その後、水を飲ませてベッドに横たえる。

エステルはハアハアと言いながら苦しそうにしている。

しかし、俺には解毒も治療も使えない。申し訳ないが自分で回復していつてもらうしかない。

と、なると……。

今日も俺は床で寝るの？ トホホ……。

2—2. チョコチャンクスコーン

「ソータ様！ 申し訳ごいけません！」
寝てると耳元で大きな声がする……。

あー、またエステルだな……。

「いいから、寝かせて。眠いんだから……」

俺は毛布をかぶる。

「ダメです！ ベッドで寝てください！」

「いいから寝かせて……」

と、言っつて、昨日のトラブルを思い出した。

またエステルと密着する事になったら……、いいか……。

いやダメだ！

俺はムクリと起き上がり、無言でベッドに転がった。

しかし、ベッドに染み付いたエステルの甘い香りにたつぷりと包まれ、寝るどころじゃなくなってしまった。健全な成年男子にはキツイ状況だ。

毛布のすき間からのぞくと、エステルが正座して申し訳なさそうな顔でジツとこっちを見ている……。

「エステル……。シャワーでも浴びてきなさい」

俺はエステルを追い払う。

「ソータ様……。私、昨日の記憶が無いのですが……。何か粗相そそうを……して……。ないでしょう……。か？」

「ん？ 気にしないでいいよ」

俺は適当に流す。

「え？ 私、何したんですか!? まさか、はしたない事を……」

エステルが青い顔して言う。

「単に酔ってトイレで吐いてただけだから大丈夫」

「えっ!? もう……。お嫁にいけないですう……」

エステルはそう言っつて崩れた。

「何言っつてんの、良くあることだよ。エステルほど可愛ければ誰とでも結婚できるよ」

俺はフォローする。

「えっ？」

エステルはキラキラと光る目で俺を見て、

「も、もう一度……」

「ん？ 可愛いから結婚はできるんじゃないかって……こと？」

「か、可愛い……ですか？」

「うん、まあ、可愛い……と思うよ」

言つてて俺が恥ずかしくなってくる。

「うふふ……。あ、でもクラウディアさんが……いいですよね？」

そう言つてチラツと俺を見た。

「彼女は大人の美人さんだからなあ……。でもエステルもあと何年かしたらクラウディアみたいになるんじゃないかな？」

「そ、そうですか……」

なぜか、しよげるエステル。

何かマズいことを言つてしまったのだろうか……？

◇

すっかり目も覚めてしまったのでスタバに朝食を食べに行くことにした。

人気の少ない朝の街を二人で歩く。

「ちよつと寒いですう」

そう言いながらエステルは俺の腕にしがみついた。ほんのりとエステルの匂いがあがってくる。

俺はちよつとドギマギしながら、

「そ、そんなに寒いかな？」

と、言つと、

「寒いですっ！」

と、言つて俺を見あげてニコツと笑つた。

こんな所を大学の友達に見られたら恥ずかしいな、と思いつつ、まるで恋人のようなやりとりについてニヤけてしまっている自分がいた。

「それにしても高い建物ばかりですう」

エステルはキョロキョロする。

「うちの世界には魔法はないけど、その分科学が発達してるんだよ」「科学?」

「あー、この世界が何でできてるかとか、どうすると便利な物が作れるかとかだね」

「え? この世界って何でできてるんですか?」

「素粒子……かな?」

「粒子……? 小さな粒……ですか?」

「粒って言っても、波なんだけどね」

「波? もう! 何言ってるか分かんないです!」

「うん、俺も良く分からん」

そう言って苦笑した。



スタバの大きなガラスドアを押し開ける。

「いらっしやいませー」

という、声がかかり、エステルは

「うわあ、綺麗〜」

と、言いながらガラスのショーウィンドウに駆け寄った。

真っ赤なストロベリータルトや緑の抹茶のスコーンに、オレンジのレアチーズケーキがずらりと並ぶ。

「みんなおいしそう!」

と、エステルは目を輝かせて言った。

「好きな選びな。コーヒーでいい?」

「じゃあ、これ! じゃなくて……、こっち……。うーん、やっぱりこれ! それとジュースがいいですう……」

エステルがちよつと恥ずかしそうに言う。

俺はポンポンとエステルの頭を叩くと、チョコチャンクスコーンとコーヒーを選び、エステルのと一緒にお姉さんに伝えた。

2—3. ウサギ爆笑

窓際に席を取った。

窓の外には国道15号線が通り、プリウスに黒塗りのハイヤーに、トラックにクレーン車にバス……、いろんな車がひっきりなしに走っている。

エステルはその車たちを一生懸命目で追って、

「うわあ……」

と、感嘆の声を上げていた。

俺はそんな無邪気なエステルの横顔をボーッと見ながらコーヒースをすすする。

可愛いよなあ……。

ただ、異世界人を気軽に連れ出しちゃったけど、良かったのだろうか？

俺はそんなことを思いながらスコーンをかじった。熱で少し溶けたチョコの甘みがじわつと心を癒す。

俺はスマホを取り出し、美奈先輩にメッセージを送った。

『鏡の向こうに行けちゃったんですけど、俺はどうしたらいいですかね？ 女神様、アドバイスをお願いします』

ピロン！

すぐにスタンプの返信があった。

見ると、可愛いウサギが爆笑している絵だった。

「はあ!」

これは一体どういう事だろうか？

エステルに、『君たちが祀ってる女神様からこんなスタンプが来たぞ』と、見せてやりたい衝動に駆られる。君たちの信奉する女神様ってこんなだけいいんか？ と小一時間問い詰めた気分だ。

続いてもう一つスタンプが来た。今度はウサギがウインクしながらサムアップしている絵だ。このまま頑張れって事だろうか……。女神様ぎつくりとし過ぎじゃないかな？ せめて言葉にして欲しいんだが……。

そもそも異世界は魔王による魔物の侵攻で存続の危機にあるわけで、魔王対策は女神様の仕事だろう。

『魔王退治しないと人類滅んじゃうらしいですよ？　女神様お願いします』

と、送ってみる。

するとすぐにスタンプが帰ってきた。

ウサギが『え？　聞こえない』ととぼけてる絵だ。

何だこれは？　俺は思わずバンッとテーブルを叩いてしまった。

エステルがビクツツとして、おびえたような眼でこつちを見る。

「あ、ゴメンね」

俺はつい感情的になってしまったのを反省した。

「何か……あつたですか？」

エステルが心配そうに聞いてくる。

俺は大きく息をつき、

「女神様に魔王退治をお願いしたら断られた……」

と言つて、軽く首を振つた。

「え!?　ソータ様は女神様の声聞けるですか？　それはビショップ司教様レベ

ルでもなかなかできないですよ！　さすがソータ様……」

エステルは手を合わせてキラキラした目で俺を見る。

「あ、いや、そんな大したものじゃないんだけど……」

「すごい事ですよ！　でも、なんで助けたくないんですかねえ……」

エステルは首をかしげる。

「助けられない事情があるか……、助けるのが面倒くさいか……」

「面倒くさい!?　ソータ様！　それは女神様に失礼です！」

まじめに怒り出すエステル。

「あー、ゴメンゴメン」

俺は謝つたが、あの先輩の性格からすると、『面倒くさい』つてのが一番ありがちなんだよなあ……。

と、この時、別の可能性が思い浮かんだ。『もう対策済み』だ。つまり、俺を送り込んだからもうOKと思ってる可能性だ。そう考えると全てつじつまが合う。なんと、俺に丸投げしてるんだあの人！

魔王を倒すのが面倒になった女神様は、飲み会の席で適当な若者をそそのかしてチート武器を与えて丸投げ……。これが一番しつくりくる。

うーん、これはどうしたらいいか？

抗議してボイコットしてやろうか……。でも、そうしたら金貨没収、エステルともお別れ……。また就活地獄に逆戻りだ。本当にそれでいいのだろうか？

異世界は思ったより魅力的な世界だし、もらったチートもすさまじい。それに……。エステルともう会えなくなるのは……。寂しい……。かも？

しかし……。先輩の思惑通りに使われるのもちよつと癪しゃくに障る。なんとかアツと言わせる方法はないものか……。

2-4. 最強のパーカー

俺がウンウンと思案に暮れていると、

「今日はどうするですか？」

ニコニコしながらエステルが聞いてくる。

ハムエッグホットサンドを両手で持って、頬張る様子はまるで子リスである。

俺はその様子に癒されて、つい笑みがこぼれる。

くだらないことを必死に考えるのがバカらしくなった。

この子と一緒に世界を救ってやればいいんだろ？ 女神様。いいじゃないか、やってやるよ。俺は異世界で英雄となって、たっぷり報酬ももらっちゃうぞ！

俺はこぶしにギョツと力を込めて気合を入れた。



「レベルを上げたいと思うんだ」

俺はエステルを見て言った。

「レベルですか？」

「俺もエステルもレベル低いから、殺虫剤が上手く決まらなかった時に命の危険があるじゃないか。レベル高かったら回避できたりするんだろ？」

「うーん、そうですね。防御力や回避力が上がれば危険は減りますね」

「なら、当面はレベル上げを頑張ってみようと思うんだ」

「わかりました！」

ニコリと笑うエステル。

「じゃあ、今日はダンジョン攻略の準備をしっかりとって、それから潜ってみよう。地図とかも買わないとね」

「はい！ 頑張るです！」

両手のこぶしを握ってブンブンと振るエステル。やる気満々である。

「まずは、服どうしようか？」

「服？」

首をかしげるエステル。

「ダンジョン潜るのに俺のパーカーじゃマズいだろ」

「えー、これでいいですう」

「ダメダメ！ 防御力高いのにしなきゃ！」

「え？ この服、今までで一番防御力高いですよ？」

「は？」

俺は驚いた。なぜユニクロで買った3,980円のパーカーの防御力がそんなに高いのか？

「ソータ様のエキスがしみついているからですよ！」

そう言っつてエステルは、そでの匂いをクンクンと嗅いだ。

「いや、ちよつと、そういうの困るな……」

一体異世界の神は何を考えているのか？ 先輩、頼みますよ。俺は天を仰いだ。

◇

自宅に戻ると、家の前に段ボールが積み上げてあった。昨日Amazonで発注しておいた殺虫剤が届いたようだ。くん煙式殺虫剤『バルザン』と最強の殺虫剤『ハチ・アブ・マグナムZ』を百個ずつ。でも、十万匹の魔物が襲来したらこれじゃ全然足りないのだ。千個ずつくらい用意しないとならないが、そんな家に入りきらない。異世界に拠点を借りないとまずそうだ。

◇

装備を整えて鏡に潜ると、教会の倉庫に出た。

「えっ!?.. なんで教会に!?!」

驚くエステル。

「エステルは昨日ここで上機嫌だったんだよ」

「ああ……、なんて罰当たりな事を……」

エステルはしよげるが、美奈先輩がそんなこと気にするとはとても思えない。

「大丈夫、女神様にはちゃんとフォローしておくから」

俺はそう言っつて元気づける。

「ソータ様……、すごいです……」

エステルは手を合わせてキラキラとした目で俺を見る。

俺は尊敬させたままでいいのか、ちよつと悩んだ。

俺はサークルの先輩によつて送り込まれた就活生であり、同時に女神によつて選ばれたこの世界を救う救世主である。

尊敬のまなざしは自尊心をくすぐるが……、ちよつと後ろめたい。いつか時が来たらエステルに全部話そうと思った。そして、どんなに持ち上げられても、ただの就活生であることは常に忘れないようにしよう。

2-5. ダンジョン地図

まずは魔道具屋に行った。日当たりの悪い裏通りをしばらく行くと、出窓に年季の入ったランプや不思議な人形の飾られた店がある。中は薄暗がりでも良く見えない。一人ではなかなか入れないお店だ。

エステルがドアを開ける。

カラン、カラン

「こんにちはあ」

そう言いながらエステルは入っていき、俺も続く。

店の中はアジア雑貨のお店のようで、良く分からない物が所狭しと陳列されていた。右手には棚があり、いろんな形をした魔法の杖がずらりと並んでいた。何の気なしに値札を見ると、高い物では金貨百枚を超えるものがあり、ちよつとビビる。

「おや、エステルちゃん、今日はどうしたんだい？」

奥のカウンターのおばさんが、メガネをクイツとあげて声をかける。

「この杖の買取りと、あと、ダンジョンの地図とポーションをください
い」

「はいはい、いい杖が見つかったのね」

「少しだけですけどね」

エステルはちよつと恥ずかしそうに言った。

「地図は何階の？」

おばさんが聞くと、エステルは俺の方を見る。

「出来たら全部欲しいんですが」

俺が答える。

「全部!? 百階までって事かい?」

おばさんは驚く。

「あれ? マズい……ですか……?」

「八十階から先はなかなか更新されないから、あまり役に立たないう
えに高額よ?」

「高額……というと?」

「十階ごとに一冊となっていて、八十台は銀貨五枚、九十台は金貨一枚ね」

「役に立たないというところ……、ダンジョンがどんどん変わっていつちやうからと言う事ですか？」

「そうよ？ それに……、悪いけどあなた達で八十台は……。見たところ三階とかが適正じゃないかしら……」

お婆さんは渋い顔をする。

「大丈夫です！ ソータ様は双頭のワイバーンを瞬殺できるんです！」

エステルがニツコリと笑いながら言う。

「えっ!? 一人で倒したのかい?」

驚いて俺を凝視するお婆さん。

「いや、まあ、ちよつと特殊な方法で倒せるんです」

「こりやまた驚いた……。ワイバーンと言うと六十階ね、七十階は筋肉ムキムキのミノタウロス、八十階はワシとライオンのキメラ、グリフォンよ、勝てる?」

お婆さんは興味津々に聞いてくる。

「多分余裕かと……」

俺はニヤツと笑う。

「ふへー……!」

お婆さんは言葉を失う……。

「えへん!」

エステルが自分のことのように胸を張る。

「もしかして……、あなたが稀人かい?」

お婆さんが俺を見つめながら聞いてくる。

「あー、違います。そうだったら良かったんですけどね」

俺はそう言つて苦笑いする。

「ふうん……」

「それより、これは何ですか?」

話題を変えるべく、ショーウィンドウの中に丁寧に並べられた本を指さした。

「これは魔導書よ。魔法を覚えられるわ」

「え？ これ使えば誰でも魔法を使えるんですか？」

「知力が一定以上あればね」

「空飛ぶ魔法とかもあるんですか？」

「これね。知力が30以上なら覚えられるわ」

おばさんは青い表紙の魔導書を指さす。その六芒星^{ほっ}をあしらった不思議な模様が描かれた重厚な書籍に俺は魅せられた。

そんな俺を見てエステルが言う。

「魔法は憶えても使いこなすには修練が要るですよ？」

「修練？」

「ちよつと浮き上がる事は誰にでもできますが、自由自在に飛ぶには凄い練習が要るんです」

なるほど、そんなに簡単な話じゃないらしい。

「分かりました。それじゃ今日は八十階までの地図と、あとポーションを一式ください」



その後、武具屋と防具屋にも行ったが、やはり物干しざおとユニクロの服や防刃ベストの方が優秀だった。日本の物は異様に高いパラメーターを付与されている。むしろ、ユニクロの服を仕入れて売ったら儲かるんじゃないかと思った。

左腕に付ける丸い盾だけ買って装備してみる。殺虫剤をかいくぐられた時の一撃を回避するのに使えそうだった。

さて、これで準備万端。いよいよ本格的にダンジョン攻略だ！

2—6. ドジっ子前途多難

ダンジョンの入り口は昨日と同じようににぎわっていた。

地図を広げ、エステルと相談をしていると、若い男に声をかけられた。

「おい！ エステル！」

腰に剣を差した皮よろいの男、歳は高校生くらいだろうか？ 装備はまだピカピカで駆け出しの冒険者らしい。

「あつ！ この前はごめんなさいでした……」

頭を下げて謝るエステル。どうやら以前のエステルのパーティ仲間のような。

「お前が勝手にワナに落ちて、俺たち帰らなきゃならなくなつたんだぞ！」

若い男は語気強くなじる。

「ごめんなさい……」

「このポンコツの出来損ないめ！ 二度とお前とは組まないからな！」

エステルは小さくなり、今にも泣きそうである。

「そのくらいにしてやってくれ。彼女に悪意があつたわけではないし」

俺は彼女と男の間に入って言った。

「なんだ？ オッサン？」

男は俺をにらんで言う。

「エステルは俺とのパーティではよくやってきている。侮辱するのは止めてもらいたい」

俺は淡々と言った。

「ポンコツにポンコツって言って何が悪いんだよ！」

エステルは俺の腕にしがみつき、震えている。

就活の面接で何度も否定され、何十通もお祈りメールをもらつてきた俺には自分を否定される言葉の痛さは良く分かる。

「足りないところはあるかもしれない。でも、悪意が無い者を責める

のは筋が違うと思うよ」

俺は男の目をジツとにらんで言った。

「なんだ？ このオッサン。シヨボい装備でイツチヨ前に！」

男は俺の身なりを一瞥すると、あざけるように言った。男の仲間もゲラゲラと笑う。

「冒険者は倒した魔物の成果で語るものだ。見た目で判断しない方がいい」

「偉そうにしやがって！」

男は俺をドンと押し、その拍子に銅の認識票が胸元でチラリと顔を出す。

それを見た仲間の黒いローブを着た女の子は焦った。

「ちよつと！ ダメよ！」

そう言っ若い男を引つ張り、

「この人Cランクよ！」

小声で男に告げる。魔導士だろうか？

「し、Cランク!?!」

男は目を白黒とさせた。

彼女は、頭を下げ、

「ご迷惑おかけしました！」

と言うと、みんなを連れてそそくさと立ち去って行く。

認識票は最初から見えるところに出しておくべきだった。

エステルがしよげて、

「ごめんなさい……」

と、頭を下げてくるが、どう考えてもあいつらの方が問題だ。

「気にしなくていいよ」

俺はそう言っ、エステルの頭をポンポンと叩いた。



俺たちはダンジョンへと入っっていった。まずは地下一階。

エステルはいい所を見せようと張り切っている。

「ここは何度も来ていますからね！ 任せてください！」

そう言っ、胸を張る。

「こっちから行くと階段に近いですよ！」

エステルは俺の手を引いて細い洞窟へと入っていく。

「え!? こんなところ大丈夫なの?」

「ここは地図にも載っていない裏ルートなんです」

そう言つてズンズンと進むが……

カチツ!

どこかで聞いた音がして床がパカツと開いた。

「ひええ!」「うわあ!」

いきなり落とし穴にはまり、落つこちていく二人。ホーリークツシヨンを使つて落ちる速度は落としたが、早くも計画が狂つてしまつた。

「ご、ごめんなさい……」

ゆつくりと下降しながら、しよげるエステル。

「うん……、まあ、気を付けよう」

俺は額に手を当て、前途多難だと気が重くなる。

あの若い男が怒つていた気持ちも少し分かった気がした。

さて、どこに着くのだろうか……。

俺は殺虫剤を軽くプシュッと吹いて臨戦態勢をとる。



落ちた先は広間で、ゴブリンが三匹いた。俺たちを見つけると、

「グルグルグル!」「グギャ——!」

と、叫びながら襲いかかってくる。

俺は落ち着いてプシュッと殺虫剤を噴霧し、瞬殺した。

このくらいだともう機械作業的に処理できるようになっている。

「さて、ここはどこかなあ?」

俺は洞窟の繋がり方などを確かめて、地図の中を探していく。

「きつと十八階辺りじゃないかと……」

「十八階ね……」

地図をずっと追っていくと、確かに似たような広間を見つけた。

「階段はこっちの方だ。行ってみよう」

俺はそう言つて歩き始める。

「はい……」

エステルは少し申し訳なさそうに答える。

「そんな落ち込まないで。落ちたおかげで随分ショートカットにはなっただじゃないか」

「そ、そうですよね！」

「でも、洞窟内ではむやみに駆けないこと。分かったね？」

「は、はい……」

ダンジョンでは些細なドジが命を奪うのだ。俺はくぎを刺しておいた。

2-7. 六十一番の彼女

地図を見ながら慎重に洞窟を進むと、スケルトン、コボルト、トレントなどが次々と出てくるので、丁寧に殺虫剤で駆除していく。階段に着くころには結構な量の魔石がたまっていた。

「結構魔物多いねえ」

「そうですねえ。でもソータ様が瞬殺してくれるので楽々ですよ！」

エステルがうれしそうに言う。

この辺りだと特に苦労せずに進めるようだが、レベルはあまり上がっていない。やはりもつと奥へと行く必要があるようだ。

「ちよつと休憩をしよう」

俺はそう言っただけで鏡を出して、一旦自宅へと戻った。

「ふう、疲れたですよ」

エステルはそう言うのとベッドにダイブした。もうすっかり俺の部屋になじんでしまっている。

俺はお湯を沸かしてコーヒーを入れた。

「エステルはジュース？」

聞いてみたが返事がない。

どうしたのかと思って見に行くと、スースーと寝息を立てて熟睡している。

こんなに無防備でいいのかね？

俺はコーヒーを飲みながら可愛いエステルの寝顔を眺め、ちよつと心配になる。

その時、エステルのうなじの所に薄く小さな数字が入っている事に気が付いた。

「061? なんだろう……?」

普段は髪の毛に覆われていて気が付かなかったが、明らかに数字である。女の子がこんな所に入れ墨なんて入れるかな? それとも異世界の風習だろうか……?

今度きいてみようか……、いや、聞いちゃマズいのか?

俺はちよつと悩んだが、女の子の身体について何か聞くのは止めて

おこうと思った。

◇
棚からクツキーを出し、ポリポリとかじりながら地図を眺める。十階の次は十九階、そして二十階はボス部屋……ガールが出るらしい。確か、石でできた猛禽類もうきんの魔物……。そんなのに殺虫剤は効くのだろうか？

まあ、効かなかつたら鏡に逃げればいいか……。俺も座布団を枕に床にゴロンと転がった。そう言えばしばらくベッドで寝てないじゃないか。寝袋でも買おうかな……。俺はそんな事を考えながら寝入っていった。

◇
「ソータ様！ 申し訳ございません！」

耳元で大きな声がする……。

さすがに慣れてきた。

「いいから、寝かせて。眠いの……」

俺は毛布をかぶる。

「ソータ様あ……」

エステルが毛布を引っ張る。

「分かったよ」

俺はそう言って身体を起こし、ベッドに転がろうとしたが……。前回、エステルの匂いに包まれて眠れなかったことを思い出した。

お金も稼げるようになっただし、広い家に移るかなあ……。

俺はそんなことを思いながら大きくあくびをする。

「あれ？ 寝ないですか？」

エステルは俺の顔をのぞきこむ。

「きみはもう少し『自分は可愛い女の子なんだ』という自覚を持つべきだと思うよ」

「か、可愛いだなんて……。そ、そんな……」

赤くなっとうつむくエステル。

どうも趣旨が伝わっていないようだ。面倒くさくなり、飲みかけの冷たくなったコーヒーをグツとのんだ。

パンとサラダで簡単に昼食を摂ると、エステルは、

「少し寝たからもう元気いっぱいですう！」

と、両手のこぶしを握った。

「じゃあ、行くか！」

俺たちは十八階に隠しておいた鏡からそつと辺りをうかがうと、ダンジョンに再エントリした。

まずは階段で十九階へと降り、地図を見ながらルートを確認した。

二十階への階段を指して慎重に進んでいくと、向こうの方から戦闘音が聞こえてくるた。誰かが戦っているようだ。

邪魔になっても困るし、避けた方が良くかと思っていたら、

「キャ————！」

という、悲鳴が上がった。

俺はエステルと顔を見合わせ、うなずくと、悲鳴の方へと急いだ。タツタツタツタ！

駆ける足音が響き、誰かが走ってくる。

誰だと思ったら、朝にエステルを罵倒していた剣士だった。

「あれ？ お前、仲間は？」

俺が聞くと、

「うるせえ！」

と、叫んで駆け抜けて行った。

「おい、待てよ！」

俺が叫ぶのも聞かず、逃げて行ってしまった。

「いやああああ！」「ぎやああああ！」

悲痛な叫びが聞こえてくる。魔術師と僧侶の女の子たちではないだろうか？

孕み袋にされてしまう。俺たちは急いで走った。

2—8. レストインピース

しばらく行くと、灯かりの点る部屋が見えてきて、

「ギャツギャツギャー!」「ギユキヤア!」

というゴ布林たちの歓喜の声が聞こえる。

俺は殺虫剤を準備すると部屋をのぞいた。

そこには二人の女の子たちが服を破られ、綺麗な肌をさらしながらゴ布林たちに囲まれ、組み敷かれていた。

「お前ら離れろ!」

俺はそう叫びながら殺虫剤を噴霧した。

一瞬こちらを見たゴ布林たちは、

「ギユアア!」「グキユウ!」

と、口々に断末魔の悲鳴を上げながら溶け落ちて行った。

残ったのは力なく横たわる二人の女の子。それぞれ豊満な乳房が汚され、美しかった顔も涙でぐちゃぐちゃになり、赤く腫れあがっていた。

一体なぜこんな事になってしまったのか……。俺が言葉を失っていると、エステルはテツテツと駆け寄って治癒魔法を唱え、彼女たちを治していった。

ふと、入り口の脇を見ると、男がスタスタにあちこち引き裂かれて転がっていた。床にはおびただしい量の血が溜まっている。

「ええっ!?!」

俺は全身の血の気が引いた。装備を見るに、盾役の男ではないだろうか?

今朝見た時は生意気に笑っていたあの男が、こんな原形をとどめないまでの肉塊にされるなんて……。俺はブワツと冷や汗が噴き出し、思わず目をぎゅつとつぶった。

そうなのだ、ダンジョンに潜るといふ事はこういう事なのだ。いつ殺されてもおかしくない危険な所……。

そうだ、そうだったよ……。

ムワツと漂ってくるすえた死臭……。俺は吐き気に襲われ、腰をか

がめながらヨロヨロとその場を離れた。頭では分かっている、こうやって失敗した者の末路を目の当たりにすると動揺が止まらない。明日、俺がこうなってるかもしれないのだ。改めて俺は現実の厳しさに打ちのめされた。

エステルは変わり果てた男の姿を見つけると、無言で手を合わせしばし祈っていた。そして、

「レストインピース！」

そう叫ぶと死体は淡い光に包まれた。

俺も手を合わせ、冥福を祈る。

やがて光の粒が死体から蛍のようにどんと飛び去って行き、最後には装備品だけが残った。

俺は認識票を拾う。陶器でできた認識票には名前と番号が彫られていた。彼の命は失われ、認識票は遺品へと変わってしまった。

俺は生意気だった若者を思い出し、目をつぶって大きく息をついた。

◇

俺は鏡を出すと、涙の止まらない二人を部屋に連れて行った。そして、エステルに身体を拭いてもらい、ベッドに寝かせる。

しばらく、俺の部屋には二人の鳴咽おえつが響いた。

落ち着くのを待って、俺は二人に紅茶を入れ、飲んでもらった。

ぽつぽつと話し始めた彼女たちの話を総合すると、あの部屋はモンスターハウスで、リーダーの剣士の男が宝欲しさに無理して開けてしまったそうだ。最初は盾役も頑張って上手くいっていたのだが、いかにせん敵の数が多く、盾役が押し倒されてしまった。それを見た剣士は一目散に逃げてしまい、一気に崩壊してしまったとのことだ。僧侶がホーリーシールドを出していたので、剣士が頑張ればまだ目があったのだが、男は無責任にも走り去ってしまったらしい。

そして、女の子たちは朝の無礼なふるまいを口々に詫びた。

「ドジなのは本当ですから、仕方ないですよ」

エステルは優しく答える。

俺は彼女たちに拾った認識票を渡し、彼のためにしばらくみんなで

黙とうをささげた。

彼は田舎から出てきた若者で、身よりは街には居ないので、拾った手甲と剣は遺品として、また、宝箱にあった金貨三枚は遺産として田舎の家族に届けてあげることにした。

それにしても剣士はどこに行ってしまったのか？ 十九階から一人で帰れるのだろうか？

2—9. 突然のモテ期

彼女たちを街に送り届けないとならない。十九階から行こうとすると、二十階のボスを倒してポータルで入り口に飛ぶのが手っ取り早そうだ。

四人で十九階の階段を下りると、デカイ金属でできた扉があった。どうやらこれがボス部屋らしい。

扉を開け、中に入ると体育館のような広大な広間が広がっていた。ドアが自動的にギギギーっと閉まり、魔法のランプがポツポツと中央部を照らしだす。

何が起こるのかと思っていたら、部屋の中央部に巨大な魔法陣が展開し、光を放った。

俺はすかさず魔法陣の中心に向けて殺虫剤を噴霧する。

プシュ——。

すると、一瞬何かが出てきたようだが、コロんと魔石が転がった。

そして、魔法陣もランプも消え、出口の扉がギギギーっと開く。

「あれ？ ボス……は？」

「ガーゴイルが出るはずなのに……」

女の子たちは口々に不思議がる。

「もう、討伐完了だよ。お疲れ様！」

俺はニヤツと笑った。

「えっ!? どういうことですか?」

女の子たちは駆け寄ってくると、俺が拾った紫色に輝く魔石を見た。

「すごいー! すごーいー!」

「さすがCランクですねっ!」

そう言いながら女の子たちは俺の腕にしがみついた。

なんだこのモテ期は!?

俺は両腕に押しつけられた豊満な胸の柔らかい温かさに思わず心臓が高鳴った。

「いやあ、それほどでも……」

ついニヤけてしまう俺。

見ると、エステルが寂しそうに俺をジーツと見ている。

俺はハツとして、

「は、早く帰りましょうー!」

そう言つてポータルへと歩き出した。

無事地上に戻り、ギルドへ向けて一緒に歩く。

「ソータさんはなんでそんなに強いんですかあ?」

「その缶は何なんですかあ?」

「あの部屋は何だったんですかあ?」

女の子たちが興味津々で次々と聞いてくる。

いちいち胸を押しつけながら聞いてくるのは何なんだろうか?

困惑しながらもついニヤけてしまう。

これ以上秘密を知る人を増やしてもいけないので、

「それは秘密、もっと仲良くなってからね」

とはぐらかす。

「えーっ……、じゃあ、今晚、一緒に飲みませんかあ?」

魔術師の女の子は上目遣いに聞いてくる。

「いやいや、私と行きましょうよ! いいお店知ってるんです……!」

僧侶の子も実に積極的だ。

二人とも美人だし、エステルより少し年上な分、色香も凄い。

俺は生まれて初めてのモチ期に顔が緩みっぱなしである。

でも、彼女たちも俺も本気で浮かれている訳ではない。あっさりとしわれた冒険者の命を目の前にして、はしゃいでいないと心がどうにかなりそうだったのだ。それだけ彼の死は暗い影を俺たちの心に落としていた。

ふと、後ろを振り返ると、エステルは普段通りにニコツと笑った。もしかしたらエステルのの方が本当は大人なのかもしれない。



ギルドに着くと、受付嬢に事の顛末を説明し、遺品と金貨をカウンターに並べた。受付嬢は涙を浮かべ、報告をうなずきながら聞くと、ひどく気落ちしながらも事務手続きを淡々とこなしていった。

剣士の男は生還してきたら要注意人物として告知するそうだ。背伸びしたくなるのは分かるが掛け金が一つしかない命である以上、身の丈を超えたことには慎重にならなくてはならないし、仲間を捨てて一人逃げ去ったというのも問題だった。

ただ、これは俺も他人事ではないと思う。極限状態に追い込まれた時に自分だったらちゃんど適切に動けるか？ 絶対背伸びはしないか？ と考えると、安易に大丈夫とも言いきれない。冒険とは安全だけ追っている成果にならないし、不測の事態は必ずやってくる。適切な判断を続ける事は、思うよりもずっと複雑で難しく思えた。

一通り手続きが終わると、俺は魔石を換金する。今日は金貨一枚ちよつとにしかならなかった。がっかりして帰ろうとすると、

「あ、ソータさんはマスターからお話があるので、マスターの部屋へ行っていただけですか？」

と、受付嬢に引き留められた。

嫌な予感がする……。

2-10. 十万匹の魔物

俺はエステルと一緒にマスターの部屋へ行き、ソファアーに座る。

「ソータ君、忙しいところ悪いね」

「いえ、何かありましたか？」

マスターは目をつぶり、大きく息をつくと言った。

「教会から連絡があつて、女神様より神託が下ったそうだ」

「女神様はなんて？」

「三日後に魔物の大侵攻がある。その数、十万。ギルドのCランクの新人に頼れ」だそうだ……」

「ブフツ！」

俺は思わず嘔き出してしまった。先輩、なんとという無茶振りを……。

俺は頭を抱えた。

「君は女神様にも注目されているようだね……」

「あー、そうかもしれない……。しかし、十万匹って一人の人間がどうこうできるレベルを超えていますよね？」

「そうは思うんだが、女神様直々の推薦だからね。ギルドとしてもソータ君に頼らざるを得んという訳なんだ」

俺はエステルの方を見た。

「ソータ様あ……」

エステルは不安げに俺を見る。

「分かりました。三日後ですね。何ができるかちよつと考えてみます」

「頼んだよ。この街の命運は君にかかっているのだ」

俺は目をつぶって大きく息をつき……、

「分かりました！ エステル、行くぞー！」

そう言っただけで立ち上がった。

「何か手伝えることがあつたら言ってくれ」

マスターは俺の目をジッと見る。

俺はちよつと考えて言っただけ。

「私の攻撃はこの薬剤を使います。十万匹であれば膨大な量の薬剤が必要になります。調達の費用をお願いできますか?」

「金の事なら心配しなくていい」

マスターはニコツと笑って言った。

なんて頼もしい言葉だろう。

「ありがとうございます」

俺も笑顔で答え、部屋を後にした。

◇

「エステル、三日後だつてどうする?」

「どうするつて、殺虫剤でプシューつとやっちゃいましょうよ!」

「あのなあ、殺虫剤一缶振りまいて五十匹倒せるとするじゃん? 十万匹倒すのに何缶要ると思う?」

「ええ? うーん……、たくさん……」

エステルはパンクしてしまった。

「二千缶だよ」

俺は肩をすくめて言った。

「に、二千!」

目をパチクリするエステル。

数は暴力だ。一万匹くらいなら気合で何とかできるかもしれないが、十万匹は想像を絶する。単に殺虫剤振りまくだけでは解決しないだろう。

先輩は俺にどうしろつて言うんだろうな……。

「うーん……」

俺は腕を組んでうなる。しかし、そう簡単に解決策など見つからない。

「仕方ない、作戦会議でもするか。エステルの部屋は使える?」

俺が聞くと、

「ダ、ダ、ダメです!」

そう言つて真っ赤になって首をブンブンと振った。

「いいじゃないか、いつも俺の部屋ばかりズルいぞ!」

「レ、レディの部屋は秘密がっぱいなんです!」

どうも本気でダメらしい。しかし、その辺に鏡を置いて日本に戻るわけにもいかない。拠点が必要だ。

すると、目の前に宿屋の木製の看板が見える。

「あー、じゃ、ここに部屋でも借りるか?」

「宿屋ですか……、いいですよ?」

エステルは看板を見ながら答えた。

俺はドアを開け、カウンターのおばさんに声をかける。

「すみませーん、一部屋借りたいんですが……」

おばさんは俺とエステルをチラツと見ると、

「休憩かしら?」

と、言った。一瞬戸惑ったが、ラブホテル的な使い方を聞かれたという事に気が付いた。

「ち、違います!」

あわてて答える。

「あ、お泊りね。何泊かしら?」

「三泊だといくらですか?」

「銀貨三枚ね。食事つきだと四枚よ」

「うーん、じゃ、食事付きで三泊お願いします」

「分かったわ、じゃ、ついてきて」

おばさんはニコツと笑うと階段を上り始めた。

ついていくと二階の奥の部屋に案内される。中を見ると、ダブルベッドにテーブルが一つある素朴な部屋だった。さすがにダブルはマズいので、

「ツインの部屋はないですか?」

と、聞いてみる。

「ごめんなさい、今だとダブルしかないわ」

おばさんは申し訳なさそうに答える。

するとエステルは、ダブルベッドにいきなりダイブして、

「うわあ、フカフカですう!」

うれしそうに笑った。

俺は一瞬どうしようかと思ったが、よく考えたら俺は自分のベッド

で寝ればいいだけだった。

「分かりました。ではここでお願いします」

おぼさんはニコツと笑うと、

「では、おくつろぎください。あっ、あまり大きな声出さないでね。防音はそんなに良くないから……」

と、ちよつと言いにくそうにして出ていった。

「大きな声？ 誰が出すですか？」

エステルは不思議そうに俺に聞く。

「エステルが出すと思われているんだよ……」

俺はちよつと赤面して答えた。

「え？ なんで私が？」

「何でもいいの！ じゃ、俺は自分の部屋行ってる。エステルは一回自宅帰った方がいい？」

説明するのも恥ずかしいので俺は話題を変えた。

「それじゃ、一回帰って、またソータ様のお部屋に行くです！」

エステルはそう言ってニコツと笑った。

2—11. 茶髪の女神様

部屋に戻ると俺はベッドに横たわり、スマホで殺虫剤について調べまくった。十万匹の魔物を倒すのに有効な殺虫剤を見つけないとならないのだ。

俺一人で噴射し続けても十万匹は無理だ。くん煙式殺虫剤をズラツと並べて一斉噴射とかじゃないとキツそうだ。それでも風向きが悪かったら効かないし、噴射も一分くらいしかもたない。何度も配置しなおさないとならない。

悩んでいたら、普通のくん煙式殺虫剤十六個分の薬剤が出る業務用の製品を見つけた。これはすごい。きつと魔物を圧倒してくれるだろう。そして、これを束ねて時間差で点火して行ってやればいい事に気が付いた。導火線に長さの違う線香をつけて、最初に一斉に点火してやれば次々と時間差で噴き出すに違いない。

百個束ねたものを東西南北の各城門に設置して、火をつければ百分間ていどは城門を守れるだろう。その間に魔物の密集している所に殺虫剤を放り投げて行ったり、飛行魔法を使える人に十個くらい束ねたものを持って飛んでもらえば、そこそこ減らせるに違いない。

ちよつと高いが、殺虫剤代はギルドから出してもらえばいい。後はそんなにまとまった数をどう調達するかだな……。

俺は問屋さんに次々と電話していった。どこも一見さんお断りという感じで断られたが、最後に現金一括なら卸してもいいという所が見つかった。行ける！ 行けるぞ！

盛り上がっていると、

「おじやましますう」

と、声がする。エステルだ。

「はい、どうぞー！」

答えるとエステルが入ってきた。

胸の所に編み紐のついたピンクのワンピースを着て、金髪はきれいに編み上げ、花の髪飾りを付けている。さつきとはうって変わって綺麗になったエステルにドキツとする。

「あ、あれ、エステル、随分と綺麗に……なったな」

「うふふ、ありがとうございます」

頬を赤らめるエステル。

「そろそろ……、夕飯の時間かなって思っ……」

さっきの女の子たちに対抗しているらしい。

「あ、そうだね。じゃ、何食べようか？」

「こっちのレストランがいいな……」

エステルは恥ずかしそうにうつむく。クラウディアに乱入された件もあって相当警戒しているようだ。

「分かった。じゃあ、イタリアンでも予約するか……」

俺はネットで近所のイタリアンを探し、評価の高い所から適当に選んで予約した。



運河に沿ってしばらく歩き、こぎつぱりとした小さなイタリアンレストランを見つけた。ガラス窓から中を見ると、立派なピザ釜には炎が上がっている。これは期待できそうだ。

窓際の席に案内してもらって、とりあえずスパークリングワインを頼み、それから適当に前菜とサラダと肉料理、ピザを頼んだ。

「それで魔物退治の方法は見つかったですか？」

「ああ、何とかなるかもしれない。バルザンってあったら、モンスターハウスに放り込んだ奴。あれを束ねて時間差で噴出させて、それをみんなに持ってもらうかと思っ……」

「なるほどですうー！」

エステルは目を輝かせた。

丁度来たワインで、乾杯する。

「それでは魔物討伐の成功を祈って！ カンパーイー！」「かんぱーい！」

一口含むと、シユワシユワとした泡の中からホワイトフラワーの香りがし、後から野生のベリーのアロマが出現してくる。凄いワインだ……。俺は世界を救えそうな手ごたえに充実感を感じ、ワインの酔いに心地よく揺られた。

俺たちは次々と出てくる美味しい料理に舌鼓をうちながら、殺虫剤の準備をどうやるかを雑談交えて楽しく盛り上がっていた。

「ぎやははよー！」

奥の団体さんがさつきから異常ににぎやかである。

どんな団体かと思いい、ワインを飲みながらそつと様子をうかがって、ワイングラスを持つ手が止まった。

「えっ!?!」

美奈先輩だ……。ソバージュのかかったセミロングの茶髪を手でさらつと流し、仲間と笑っている。透き通るような白い肌にパツチリとした琥珀色の瞳、そのドキツとするほどの美しさは見間違いない。

異世界を作り、俺を誘った超越的な神様が目の前でワイン飲んで笑っているのだ。俺は啞然として、言葉を失った。

2—12. 魔王によろしく

「ど、どうしたんですか?」

エステルが聞いてくる。

俺はどう説明したのか返答に窮した。彼女の信奉してる女神様がそこで楽しそうに笑ってる。そんなこと、どう説明したらいいんだろう?

俺がどうしようかと悩んでいたら、美奈先輩がこっちに気が付いてニヤツと笑った。

そして、ワイングラスを持ってやってくる。

「あら、ソータ君、楽しんでる?」

上目づかいに笑顔で声をかけてくる先輩。いつもに増して美しく見える。

「命がけで必死なんですけど?」

そう言いながら、俺は差し出されたワイングラスにチン! と合わせた。

「あ、あのー、この方は?」

エステルが不安げに聞いてくる。

「エステルもよく知ってる人だよ。教会に像があつたら?」

エステルは怪訝けげんそうな顔をして先輩を見る……。

先輩はニツコリと素敵な笑顔でエステルを見る。

「あっ!」

エステルは声を出して固まった。

「いつもお祈りありがとうね、乾杯!」

先輩はそう言ってエステルのグラスにチン! とグラスを合わせた。

「ヴィ、ヴィーナ様……」

エステルは真ん丸に目を見開いて言葉が続かない。

「あの世界は先輩が作ったんですか?」

「そうよ? いい星でしょ?」

先輩は当たり前のようにニツコリとして言う。

「なぜ……、女子大生なんてやってたんですか？」

「ひ・み・つ……。あなたが活躍したら……教えてあげるかも……。ね？」

そうやって先輩はいたずらっ子の笑みを浮かべた。女神様には女神様の事情があるという事だろうが……。理由など全く見当もつかない。

「魔物十万匹って一人じゃ無理ですよ。先輩がエイツで倒してくださいよ」

俺は素直にお願いする。

「うーん、あの星、そう単純な話じゃないのよね」

そうやって先輩は渋い顔をして首をひねる。

「え？ 魔物倒すだけじゃ解決しないってこと……ですか？」

「ちよつと魔王と相談してくれる？」

いきなりな無茶振りの依頼に俺はビビる。

「そ、相談なんて、できるんですか？」

「会えばわかるわ。魔王の居場所は後で送っておくね。じゃ、世界を救ってねっ！ チャオ！」

そうやって先輩はウインクをすると、仲間の席に戻っていった。

なんとも軽い世界救済の依頼である。俺はどう考えたらいいのか混乱した。

「一体どういふことなんだろう……。魔王に会って……」

「ソ、ソ、ソータ様！ め、め、女神様ですよ！」

エステルは身を乗り出し、俺の手を取って取り乱す。

「知ってるよ」

「え？ なんで女神様がレストランにいるんですか？」

「うーん、なんでなんだろうね？ 俺にも分からない」

「女神様ですよ！ 女神様！」

「分かってるよ」

エステルは壊れてしまったかのように混乱していた。僧侶としてずっと信奉してきた世界を作った偉大な女神様……。それは天上界の聖なる存在かと思つたら普通にレストランでワイン飲んで笑って

いる。エステルにはこれをどう理解したらいいか全く分からないよ
うだった。

まあ、俺にも分からないんだが。



やがて団体さんはドヤドヤと帰っていく。

先輩はこつちを見ると、

「じゃあね！ 魔王よろしくう！」

と言って、俺に投げキッスをして出て行った。

見ると、メンバーはキリストの肖像画に似た男性や、筋肉ムキムキ
の白人男性、水色の髪をした女の子など、みんなただ者ではないオー
ラを出している。

俺が目で追っていると、女の子がチラッとこちらを見た。その瞬
間、俺に衝撃が走った。すべてを見透かされたような悪寒に貫かれた
のだ。

「ひっ！」

女の子はニヤツと笑う。

生まれてから21年間のすべての記憶や、心の奥底の欲望や邪よこしまな考
えまで一切合切全て読み取られたような気がして、俺はブルッと震え
た。

そして、その時俺は気が付いた。この人たち、歩くふりだけして歩
いていない、少し浮いて飛んでいるのだ。美奈先輩だけが特別ではな
く、みんな神様……、なのでは？

2—13. 神様の中の神様

俺は彼らを見送り、席を立つと、会計に残っていたアラサーの男性に声をかけた。

「すみません、美奈さんの後輩なんですけど、もしかして美奈さんのベンチャーの方ですか？」

「え？ ああ、そうですね。AIベンチャーですね」

彼は落ち着いた口ぶりで答えた。特段神様っぽい雰囲気は感じない。普通の人間のように見える。

「AI!? 神様……とか宗教関係ではないんですか？」

「あはは、AIと神様は不可分だからね」

そう言つて男性は笑った。俺は何を言つてるのか全く理解できなかった。神とAI、美奈先輩とAIにどんな関係があるんだろうか？

「美奈ちゃんに……、何か頼まりましたか？」

男性は俺の目を見て、申し訳なきように聞く。

「じゅ、十万匹の魔物倒して世界救つてくれ……」

俺はこんな事言つていいのか戸惑いながら言った。

「ええっ!? そりゃ大変だ……。でも、美奈ちゃんが言ううからには何か勝算があるんだよ。ああ見えて世話好きだから」

そう言つて男性はニツコリと笑った。

「誠まこと——！ 二次会行くわよ、二次会！」

店の外から美奈先輩の声が響く。

「はいはい！」

男性はそう答えると、

「君とはまた会う事になりそうだな。グッドラック！」

そう言つてサムアップをして、出て行った。

「リーダー！ レッツゴー！」

ムキムキの白人が男性に叫ぶ。

「リーダー!?!」

俺は驚いた。ただの人間だと思つていた穏やかな男性が、なんと神様たちのリーダーだったのだ。神様の中の神様、あの男性が……？

呆然としながら後姿を追っていると……、いきなり消えた。

美奈先輩もみんなも全員一瞬で消えたのだ。そして、その異常な事態に街の人は誰も不自然に思っていないようだった。

俺はあつけにとられて動けなくなった。今まで異世界で魔法などの不思議なことが起こるのはなんとなく受け入れていたのだが、日本で当たり前のように瞬間移動が使われていたのだ。彼らにとっては日本も自在に操れるフィールドの一つに過ぎない、という事だろうか？

俺はしばらく放心状態で立ちすくんでいた。

◇

帰り道、エステルは上機嫌だった。

「えへへ、女神様に会っちゃったですう」

そう言つてスキップをして、クルツと回つて可愛くニツコリと笑つた。

俺はと言うと、人間離れした彼らの存在をどう考えたらいいのか途方に暮れていた。

異世界を作った先輩に、ワープして消えたAIベンチャーの人たち、神はAIと不可分だというリーダー……。

全く想像が及ばない世界に、俺はため息をついた。

「ソータ様、二次会やるです！ 二次会！」

そう言いながら、うつむく俺を下からのぞきこむエステル。

「うーん、じゃあコンビニで買ってくか……。飲み過ぎはダメだぞ」

「やったあー！」

はしやぐエステル。

◇

部屋に戻り、鏡を抜けて宿屋に行く。こつちの方が広いので飲むならこつちだろう。

ポテチの袋を開けて小さな丸テーブルに置き、缶ビールをプシュツと開けた。

エステルは梅酒のソーダ割を選んだが、缶の開け方が分からないようだった。

「こうやるんだよ」

そう言って開けてあげる。

「さすが！ ソータ様！」

缶を開けてほめられたのは、生まれて初めてかもしれない。

「カンパニー！」「かんぱーい」

まずは乾杯。ゴツつと缶をぶつける。

それにしても今日はいろいろあり過ぎた。もう頭が追いついていない。

俺はビールをゴクリと飲み、ホップの香りに浸りながら、ふうつと息をついた。

「明日はどうするですか？」

梅酒を片手に、エステルがニコニコしながら聞いてくる。

「ギルドに殺虫剤代を貰いに行つて、換金して、買い付けに行つて、線香使つて遅延発火のテストだな……」

「大変ですう……」

エステルが眉をひそめる。

「魔王と話がつけば戦わずに済みそうなんだけどね、一応準備は進めない」と

「魔王さん止めてくれるですかねえ？」

「女神様の口ぶりじゃ止めてくれそうだったけどねえ」

戦闘は何とか避けたい。殺虫剤がうまく機能したとしても十万匹相手では犠牲は出てしまうからだ。

しかし、俺が十万匹の進行を食い止められると知ったら、魔王は俺を殺そうとするんじゃないだろうか？ のこのこ会いになんて行つて大丈夫なんだろうか？

先輩ももう少しその辺教えて欲しいよなあ。本当に『世話好き』なのかね？

2—14. ネオ・エステル

「ソータ様はなぜ女神様と仲良しですか？」

エステルは首をかしげて聞いてくる。

「女神様は大学のダンスサークルの先輩なんだよね……」

俺は自分で説明しながら、説明になってない気がして思わず額に手を当てる。

「女神様と一緒に踊ってたですか？」

「そうそう」

「えっ!? 見せてください!」

エステルの目がキラツと輝いた。

「うーん、そんな見せる程上手くないけどなあ……」

「ぜひぜひ〜!」

「しようがないなあ」

酔いも手伝って俺は久しぶりに踊ってみる。

テールをずらして、スマホから音楽を流し、リズムカルに軽く腰を落としながら、足を開いて右行って左行って、手はクラップ。

「すごい、すごい!」

喜ぶエステル。

調子に乗ってリズムカルに左右に重心を移しながら、足をシュツシュと伸ばし、肩を回しながら腕を回し、収める、再度回して、収める。

「ふう、こんな感じ」

「すごい! 女神様のダンス、私にも教えてください!」

キラキラとした瞳で俺を見つめるエステル。そんな目をされると断れない。俺はベッドに座って言った。

「じゃ、そこに立って」

「こうですか?」

「そこで腰を落として足開いて右」

「こう?」

「そして、一回戻って今度左」

「ごうですか？」

「上手いじゃないか。じゃ、それを連続でやってごらん」

俺は音楽を流して手拍子を打った。

「じゃあいくよ、3、2、1、ゴー」

頑張つて踊るエステル。

「はい、いっちにーいっちにー」

しかし、そのうちに頭が混乱してきて足を引っかけ、倒れ込む。

「キヤーー!」「うわあ!」

エステルはベッドの俺の方へと倒れる。慌てて身体を受け止める俺。

そして、勢い余つてベッドの上で重なってしまう二人。

はあはあとエステルの甘い吐息が耳元で聞こえる。

ふんわりと漂つてくるエステルの甘酸っぱい香り……。

「だ、大丈夫?」

俺はドキドキしながら聞いた。

部屋の中にはスマホからの音楽が流れ続けていた。

「ソータ様……?」

「ど、どうした?」

柔らかいエステルの身体から、温かい体温が伝わってくる。

「私……、ソータ様のおそばに居て……いいんでしょうか?」

いつになく低い声で深刻そうに言うエステル。

「えっ?」

エステルはゆっくりと体を起こすと、

「私、こんなにドジで、ソータ様の足を引っ張るかもしれないです」

暗い顔でそう言った。

「何言ってるんだ、エステルは十分に役に立ってるよ」

「そうでしょうか……? 私恐いんです」

「え? 何が?」

「いざという時にドジ踏んで、多くの人に犠牲が出ちゃったりするんじゃないか、って思うんです」

そう言つて、涙をポトリと落とした。

「あれ？ それ、どうしたの？」

「今日から私は変わったのです！ ネオ・エステルとお呼びください！」

エステルなりに変わろうとしているらしい。でも、こういうのって長続きしないんだよね。

「はいはい、ネオテルちゃん。着替えるから先行つてて」

「ネオテルじゃないです！ ネオ・エステルですう！」

「分かったから。それとも何？ 着替え見たいの？」

俺はそう言つてニヤツと笑つた。

「いや、そ、そういう訳じゃ……。じゃあ食堂行つてるです！」

そう言つて真っ赤になつて出て行つた。

3章 世界をかけた死闘

3—1.

戦闘準備

その日、俺は淡々と作業をこなしていった。ギルドマスターとかけあい、金貨を出してもらって、その金貨を買い取ってもらい、そして卸売問屋に殺虫剤の買い付けに行った。

在庫にあった千個全てを買い取り、倉庫で人目につかないように気をつけながら、床に置いた鏡に放り込んでいく。何しろ殺虫剤は全部で五百キログラム、到底運べないのだ。

鏡に放り込んだ殺虫剤は、宿屋に立てかけておいた鏡からポーンと飛び出してきたベッドの上に転がる。ネオ・エステルはそれを拾って箱の中に入れていく。百個くらい送った後に様子を見たら、

「まだまだ行けるですよー！」

と、ネオ・エステルは笑っていた。

だが、五百個を超えた辺りから疲労が目立ち始め、ただのエステルに戻っていた。仕方ないのでペースを落とし、途中、手伝いながらなんとか千個全部異世界へと運び込めた。これで普通の殺虫剤一万六千個分に相当する。十万匹叩く上ではそこそこ頼れそうだな。

俺は五百キログラムの頼もしい殺虫剤の箱の山を見て、グツとこぶしを握った。



夕方、コンビニで買ってきたクリームブリュレとコーヒーで休憩を入れる。

「どうだ、ネオ・エステル、美味いだろ？」

俺が聞くと、

「もう、ネオは止めたんですう」

そう言っつてうつむいた。

「あれ？ どうしたの？」

「一時的に気合入れるだけじゃ足りないんだなって、思ったんですう」

「おお、いいじゃないか。それを気づけただけで、もうネオ・エステルだよ」

「えっ?」

「そういう気付きを積み重ねて成長していく事が大切じゃないか、つて最近思うんだ。偉そうに言ってるけど、俺自身勉強させられてるよ」

そう言つて微笑みながらエステルを見た。

「うふふ……、ソータ様、ありがとですう」

エステルはそう言つて、クリームブリュレをすくつて食べ、顔を揺らし、幸せそうに微笑んだ。

◇

続いて線香を使った遅延発火殺虫剤のテストである。殺虫剤の缶を三つ束ね、それぞれに長さの違う線香をさして時間差発火で長時間煙を出し続ける。他の人が使つても効けば成功である。理屈は分からないが、俺が着火すれば誰が持つても効くに違いない。

鏡を一旦リセットして、俺たちは最初にエステルに出会つた位置からダンジョンにエントリーする。

慎重に進み、広間を見たらゴブリンが五匹いた。彼らでテストをしたいと思う。

俺は長さを変えた線香に火を付け、束ねた殺虫剤の点火口にさしていく。さて、上手くいきますかどうか。

線香が順調に燃えていくのを確認し、俺はエステルに持たせた。

「煙が出てきたらゴブリンに向けてね」

「分かりました！、ドキドキしますう」

エステルは緊張して頬が紅潮している。俺は上手くいかなかった時のために、ハチ・アブ・マグナムZを装備してガチャツとロツクを外した。

やがて最初の缶に火が入り、ボシュー！ とすごい勢いで殺虫剤が噴き出してきた。さすがに十六倍の薬剤の入つた業務用、煙の濃度が段違いにすごい。

「エステル！ GO！」

俺の掛け声でエステルがテツテツと駆けていく。俺は後を追つた。

気が付いたゴブリンたちが、

「ギャツギャツギヤ！」「グウゴオ——！」

と、喚きながらこつちに駆けだして……、「ギャウツ！」と断末魔の悲鳴をあげながら魔石になっていった。

「やった！ 成功だ！」

「やったあ！」

俺たちは見つめ合って喜んだ。

そのうちに殺虫剤の噴霧が止まり、次の殺虫剤に火が入った。

ボシユー！

噴き出す強烈な薬剤。

「ちよつとこれ、止められないですか？」

「あー、一度火がついたら無理だなあ……」

「ちよつと煙いですう」

「困ったな、部屋に戻るか」

「あつ、ちようど魔物が出ました！」

エステルはそう叫ぶと、殺虫剤を持って向こうの洞窟へと駆けていく。

「あつ、走つちやダメだつて！」

俺は急いで追いかける。

カチツ！

「きやあ！」

落とし穴が開き、エステルが落ちて行く。

「エステル——！」

俺は真っ青になった。

3—2. ドジっ子大ピンチ

「いやあああー！」

穴をのぞくと、ホーリークッションをかけたエステルがぼうつと淡く光をまといつつ、ゆっくりと落ちながらこつちを向いて叫んでる。大変にマズい事態になった。エステル一人で行かせるわけにはいかないが、俺が飛び込んだらホーリークッションで受け止めきれぬだろうか……？

「ソータ様あー！ 来てくださーい！」

悲痛な叫びがあがる。

俺は逡巡したが、エステルを失う訳にはいかない。意を決して穴に飛び込んだ。

ヒューー！ と風を切りながら、あっという間に加速しながら落ちて行く俺。

エステルは俺に向けてホーリークッションをかける。だが、減速はしてもすごい速度の俺はそう簡単に止まらない。あっという間にエステルを追い抜いていく。

ヤバい！

俺は必死にエステルをつかんだ。

ガシツとつかんだ先は足首。

「ぎゃあー！」

エステルは一気に引つ張られ、二人してしばらく落ちていたが、やがて減速して何とか転落せずに済んだ。

「危なかったあ……」

俺はホツと胸をなでおろす。

「ダンジョンは走っちゃダメ！」

エステルの足につかまりながら、俺は怒った。

「だって、こないだまでこんな落とし穴なかったですう……」

言い訳してしよぼくれるエステル。

「これからは絶対に走らないこと！」

「はあい……」

それにしてもこの穴はどこに繋がっているのだろうか……、前回は六十階のボス部屋だったから、その辺りの階層に違いない。相当魔物は強いだろう。俺は嫌な予感がしたので、鏡で帰ることにした。

「エステル、鏡出して！ 帰ろう！」

「は、はい！」

エステルは急いで背負っていた鏡を下ろすが……、

「ぎゃあ！」

手を滑らせて鏡が落ちて行く。

「うわっ！」

俺は手を伸ばして一瞬つかんだが、鏡は重い。俺の手をすり抜けて、鏡は真つ逆さまに落ちて行く。

「ああああ！」「いやあああ！」

しばらくして、ガーン！ という衝撃音がして鏡がフロアに激突した。

あまりの事に、俺は言葉を失った。

鏡が壊れたらもう二度と日本には戻れない。俺は目の前が真つ暗になった。

「ごめんなさいですう……。うつつうつつ……」

上でエステルが泣いている。

エステルがミスしたら俺の責任、そうは言ったがこれはあんまりじゃないかなあ……。俺は何も言うことができず、ただ、うなだれていた。

やがて、フロアが見えてきたが、そこにはうじやうじやと魔物の影がうごめいていた。モンスターハウスだ。俺はハチ・アブ・マグナムZのロックを外し、噴射を始める。

「ギャウツ！」「グギャア！」

次々と溶けていく魔物たち。

やがて、フロアに降りると、俺は残りの魔物たちに向けて噴射を続けた。

この時、カン！ と俺の左腕の丸盾に何か当たった。見ると、矢が転がっている。

矢で射られているのだ。

「エステル！ 弓矢だ！ 気をつけろ！」

そう言っただけで辺りを見回すと、遠くで弓を引いている魔物が二匹見えた。残念ながら殺虫剤が届く距離ではない。

「きゃあ！」

エステルが叫んで倒れた。

「エステル——！」

見ると、矢が太ももに刺さっている。これはマズい。

俺はエステルを物陰に運び、辺りを見回した。他の魔物は倒し終わったようだった。

しかし、弓矢の魔物は相変わらず射程外から淡々と矢を射ってくる。矢はマズい。当たり所が悪ければ死んでしまう。

俺はゆっくりと深呼吸を繰り返し、

「セイツ！」

と、掛け声とともに盾を前にし、弓矢の魔物に向かって駆けだした。魔物は小人で頭の上に光るものを乗せ、可愛い顔しながら弓を巧みに使って矢を射ってくる。

俺はカン！ カン！ と盾で矢をはじきながら接近する。射程距離に入ると横にステップして殺虫剤を噴射し、弓の魔物に浴びせた。

「グギャツ！」「グウウ！」

と、悲鳴をあげ、溶けていく魔物たち。

俺は急いでエステルの方に戻る。エステルは太ももを抑えながら脂汗を流し、泣いている。

「うっうっうっ……、ソータ様あ……」

「大丈夫だからね」

そう言っただけで俺は矢の刺さっている所の服を裂いた。すると、真っ白な美しい太ももに矢がブツブツと刺さり、刺さったところは赤黒く変色していた。

俺はあまりにも生々しい惨状に思わず気が遠くなり、目をつぶった。こんなのどうしたらいいのか？

俺は混乱して動けなくなり、手が震えた。

3—3. 立ち昇る死の香り

「ソータ様あ……」

エステルは荒い息をしながら痛みを耐えつつ俺に訴える。

矢は抜かねばならないが、矢じりが残ってはマズい。つまり、切り裂いて取り除かねばならない……、が、切るの？ 俺が？

俺は思わずクラクラした。

しかし、これは一刻を争う。俺は落ちて転がっている鏡を拾い、段ボールケースから引き出した。

木製の枠の左上の角は粉碎され、枠も外れかけていたが鏡面は無事だった。試しに潜ってみたら俺の部屋に繋がっている。大丈夫なようだ。

俺はエステルを抱き上げると部屋のベッドに横たえた。

そして、カッターナイフを取り出すと、殺菌用のアルコールで綺麗に拭いた。太ももも俺の両手もアルコールで全部消毒する。

「見るなよ、歯を食いしばれ！」

そうやって俺は矢の食いこんでいる太ももにカッターの刃先を当てた。

「ソータ様あ……」

苦しそうなエステルの声が響く。

カッターがカタカタと震えている。

俺は目をつぶって大きく深呼吸を何度も繰り返し、そして、

「行くぞー！」

そうやって、ザクツと刃を押し込んだ。

「ギャ——！！」

悲痛な叫びが耳をつんざく。

「頑張れ！」

嘔き出してくる真っ赤な血の中に指を入れ、矢じりを見つけ、俺は矢を引き抜いた。

「うわああああん！」

取り乱し号泣するエステル。

俺は傷口をタオルで縛り、

「矢は抜いた、ダンジョンに連れてくから治癒魔法を使い！」

そう言つて鏡をリセットすると、エステルを抱き上げ、ダンジョンへと連れて行つた。

苦しみながらエステルは必死に治癒魔法を唱えた。

「ヒ、ヒ、ヒール！」

エステルの身体がボウつと光り、傷口は回復しているように見えた。

俺は再度抱き上げてベッドに寝かせる。

しかし……、エステルはまだ苦しそうだ。

タオルを外して傷口を見ると、傷は縫合されていたが、赤黒い色が落ちていなかった。

毒……、かもしれない。

俺は急いで解毒のポーションをカバンから出してエステルに飲ませた。

しかし……、赤黒い色はどんどん大きくなり、太もも全体に広がり始めた。

「えっ!? なんぞだよー！」

俺はポーションを太ももにかけてみた……。

全然効果がない。

そして俺はここで大きな過ちに気が付いた。日本ではポーションは効かないのかもしれない……。

つまり、鏡の向こうで飲まさなければ効果は発揮しないのではないだろうか？

しかし、ポーションは全部使ってしまった。

「ヤバい！ どうしよう!?!」

俺は頭を抱えた。

今から魔道具屋に行くにはダンジョンをダッシュで抜けて駆けて……うまくやっても1時間くらいはかかりそうだ。

エステルを見ると太ももの赤黒い色はどんどんと広がり、下腹部まで変色してきている。とても1時間ももちそうにない。

詰んだ！ あの、昨日殺された盾の若者のおぞましい死体がフラツシユバックしてくる。

ど、ど、ど、どうしよう……。

俺はエステルを今失いつつある現実には目の前が真っ暗になった。

「ソ、ソータ様あ……」

もうろうとするエステルが、うなされてうわごとのようにつぶやく。

俺はエステルの手を両手でしっかりとにぎった。

「な、なに？ どうした？」

涙がポロポロと湧いてくる。

「ドジで……、ごめんなさい……」

くう……！ 俺は涙でぐちゃぐちゃになった。

違う、ドジなのは俺だ。貴重なポーシジョンをまぬけにも無駄にしまった。

ダンジョンで飲ませるだけだったのに、なぜ、気が付かなかったのか……。

「ゴメン、ゴメン！ ドジは俺の方だ！」

俺は叫んだ。

俺はどうしたらいい？

彼女を失う訳にはいらない。寝食を共にし、死線をかいくぐってきた大切な仲間。今エステルに死なれたら俺はどうにかなってしまう。

ダメだ、考えろ！ 考えろ！

何か手があるはずだ。

救急車を呼ぶ？ いや、こんなファンタジーな毒、現代医学で対応可能かどうかも怪しい。

こんな毒を治せるのは……、そうだ！ 先輩だ！ 先輩ならこんな毒一瞬で治せるに違いない。何としてでも頼み込んで治してもらえない。

俺はスマホを取り出すと、メッセンジャーから『通話』を選んでタップした。

3—4. 一生、一緒

トウルルル……、

俺は必死に祈った。

先輩！ 出て！ 頼む！

『ハイ！ ソータ！』

明るい声で先輩が出た。

「せ、先輩！ お願いがあります！」

『ダメよ』

いきなり拒否られる俺。

「えっ!？」

『女神はそう簡単に願いなんて聞けないわ』

冷たい声で突き放す先輩。

「えっ！ えっ！ 一生のお願いです！ 何でも言うこと聞きます！」

彼女を助けてください！」

俺は必死に叫んだ。

『何でも?』

「何でもです！」

『絶対?』

「二言はありません！」

『じゃあ、あなた、その子と結婚しなさい』

「はあっ!？」

俺はあまりに唐突な条件にあっけに取られた。

『できないの?』

「い、いや、そのお……。結婚って彼女の意志もあるわけで、私の一存

では……」

『昨日夢の中で聞いたら『結婚? そうなったら嬉しいですう』って

言ってたわよ』

「えっ? えっ?」

俺は言葉を失った。

『どうするの? するの? しないの? 切るわよ』

「ちよ、ちよつと待つてください！ 彼女まだ子供ですよ？」

『何言ってるの。彼女、あなたよりずいぶん年上よ』

「はあ!？」

俺は予想外の事態にうろたえた。見るからに十代半ばの女の子が俺より年上だなんて一体どういうことだろうか？

『どうすんの？ 私忙しいのよ』

「えっ、こういうのはじっくり考えないと……」

『その程度の相手ってことね。残念だわ。じゃあ……』

「ま、待つてください！ します！ 結婚……、いや、プロポーズ……します……」

『……。なんだか微妙に逃げようとしてない？』

「あ、いや、ちよつと心の準備があるので、ちよつと時間だけください」
『ふうん……、急いだほうがいいと思うんだけどな……。分かったわ。結婚式には呼んでね』

ガチャ！

そう言つて電話は切れた。

「えっ!? 先輩、せんぱーい！」

切られてしまつて啞然とする俺。

「エ、エステルは？」

俺はエステルのの方を見た。すると……、太ももは真つ白だった。

「や、やったあ！」

俺は急いでその白くすべすべとした太ももをなでてみる。温かく柔らかく、傷一つなく完治していた。さすが先輩、完璧な仕事だった。俺は思わずガッツポーズをした。

「良かったあ……」

俺はへなへなと床にへたり込んだ。

と、ここで、約束を思い出す。

プロポーズ……、するつて言っちゃった……。今さらなかったことには……できないよなあ。

俺はボーつとエステルの顔を眺めた。

スースーと穏やかに寝るエステル。

この子と結婚？ 俺が？ 彼女いない歴二十一年の俺がいきなり結婚？

俺は一体どうしてこうなったのか、ひどく混乱した。

もちろん、エステルは可愛いし、失いたくない大切な人だ。しかし、こんな簡単に一生を共にする伴侶はんりよを決めていいのだろうか？

俺はジーツとエステルの可愛い顔を眺める。サラサラとした綺麗な金髪に透き通るような白い肌。ちよつと低いけど、スツと鼻筋の通った形の良い鼻。プツクリとおいしそうな果実のような唇。

彼女が俺の嫁になる……。いいの？ 本当に？

俺はそつと頬をなでた。

「ソータ様あ……」

寝言を言うエステル。俺はドキツとした。

心の底からエステルへの愛おしい想いが噴き出してきて、俺は胸がキュツとなった。

俺は目をつぶり、彼女と共に暮らす生活を思い描く。それはきつと毎日イベント盛りだくさんのにぎやかな暮らしになりそうだった。俺の隣にいつもエステルがいる……。あれ？ 悪くない……。かも……。

エステルがいない暮らしとどっちがいいか？ 答えは明白だった。

そうだよ、俺はエステルと一緒にいたい。

「一生、一緒……。うん」

俺はそう言つて、彼女の頬にそつと頬ずりをする。

エステルのモチモチとした柔らかい頬が、俺の心に温かい灯りをともした。

先輩は、俺の人生をねじ曲げようとした訳じゃなかったのだ。自分の心の声に気が付かない間抜けな俺に呆れ、背中を押しただけだったのだ。さすが女神様。俺より俺の事知ってるんだ……。俺は先輩に心から感謝をした。

俺はそつとエステルの隣に潜り込み、添い寝をする。愛しい人の温もりを感じ、優しい香りに包まれながら寝入っていった。

3—5. 新たななる異世界

目が覚めるとすっかり暗くなっていた。

エステルはというと、まだぐっすりと寝ているようだ。

俺はコーヒーを入れ、飲みながらゆっくりと状況を整理する。

さて……、次は何するんだったかな……。

殺虫剤はうまく機能したから、線香の長さを調整したセットをいくつか作って、缶を束ねれば魔物の襲来に対する準備はいいだろう。

後は魔王と交渉……、そうだ、先輩に魔王の居場所を教えてもらわないと……。

俺はメツセンジャーで居場所の催促さいそくを送った。

えーとそれから……、

と、ここで、壊れた鏡が気になった。鏡は生命線だ。壊れたままにしておくわけにはいかない。

壊れた鏡の枠を見てみると、鏡の端が露出して見えている。ここが異世界への出入り口の境目……。

俺は興味が湧いてきて、鏡の端にカッターナイフの刃を当ててみる。すると、鏡面に当たってる部分は異世界へと送られ、当たってない所はそのまま前へと進み、切れてポトリと落ちた。

つまり、極めて鋭利な刃物状態になっていた。空間を裂いている訳だから理論上最強の刃物である。俺はゾツとした。

逆にこれを鏡面の内側からこじってみたらどうだろうか？

日本の空間と、異世界の空間の間にカッターの刃を立ててそのまま端に動かしてみる。ちょうど真ん中だったら刃はどっちの空間に出てくるのだろうか？

すると、刃はガツと硬い物に当たって止まってしまった。どちらかの空間に出てくるはずなのに止まっている。ここはともイレギュラーな匂いがする……。

俺はそのまま力を入れて刃をグリグリと動かした。すると、ベリベリっという感覚と共に刃が突き抜けた。突き抜けた先は、日本でも異世界でもなく、どこか別の空間へと突き抜けている。俺は驚いた。ど

うやら第三の空間に繋がってしまったのだ。

俺は丁寧にカッターの刃でこじっていき、切り口を広げていく。そしてそーっと手を入れると、どこかに手は消えた。いよいよ、面白いことになってきた。

俺はさらに切り口を大きくし、身体が入るくらいまでに広げた。これで、まっすぐ鏡に入ると異世界、斜め横へ行くと別の空間に行く鏡が出来上がった。

こんな事、先輩に知れたらまずいことになるかもしれない。

自分で見つけた新たな異世界、俺は静かに興奮していた。

◇

装備を整え、俺は新たな異世界へと入ってみることにした。

のぞき込むと……、そこは赤茶色の洞窟だった。ゆつくりと身体を通し、降り立つと、何とも気持ちの悪い雰囲気がある。これはどこかで見たような……、と、思い返すと、胃カメラだ。胃カメラの映像を見た時の雰囲気似ている。どこかの怪物の胃の中だったりしないかちよつと不安になった。

壁面を観察すると、ゴムのような弾力があり、ところどころに切れ目が入っている。切れ目を押し広げると、向こうには別の空間が広がっていた。多くが全く何もない暗闇であったが、森や空の上のような景色に繋がっている所もあった。

どうも、イレギュラーな空間の裂け目を回収しているような機能を持つところのようだ。つまり、計画にはない空間の裂け目があると、自動的にここに繋がっているようなのだ。であれば、何か有用なところに繋がっている切れ目があるかも知れない。

しばらく次々と切れ目をのぞいていったが、何一つ面白い物は見つからなかった。そもそも多くが何も無い暗闇なのだ。ちよつと押しみて暗いところのほとんどが外れと考えていいようだ。

俺は、ヘッドライトを消し、洞窟を暗闇にする。すると、明かりが漏れてくる切れ目がポツポツとあるのが分かる。

俺はそれらを一つずつ押し広げてチェックしていく。あるところはウユニ塩湖のような壮大な風景に繋がっていたし、別の所は広大な

麦畑だった。さらに次々と押し広げて見ていくと衝撃の光景を見つけた。なんと、無数の魔物が整然と並んでいる巨大な倉庫に繋がったのだ。

「はあ!?!」

俺は思わず声が出てしまい、急いで口を押さえた。

3—6. 百万匹の魔物

切れ目は倉庫の上方に開いていて、全体の概要が良く見えた。

そつと様子をうかがうと、手前の所にはゴブリンらしき魔物が一メートルおきに整列していて、それが二百メートル四方くらいに及んだ。つまり、四万匹である。そして、ゴブリンたちは全員微動だにせず静止している。

隣の区画にはコボルト、その奥にはオーク、トレント……と並び、何キロも先の奥の方には巨大な魔物が並んでいるのが見える。ワイバーンより大きい物すらいそう。ドラゴンだろうか？

数はパツと見える範囲だけで百万匹に達しそうだった。ここは魔王の秘密倉庫？　ここから街を襲撃する魔物たちを出しているのだろうか？　俺はどうしたらいいか混乱していた。

ガチャ！　ギギギー！

下の方でドアの開く音がした。

俺はそつと切れ目を少し戻し、聞き耳を立てる。

「マリアン様、次の侵攻の準備はバッチリです」

しゃがれた男性の声が響く。

「ほう、いいじゃない……。あれ？　ゴブリンはこんなに要らないって言わなかったっけ？」

若く張りのある女性の声だ。

「こ、これは失礼いたしました。半分には減らしておきます」

「しつかりしなさいよ！　それじゃ、後は手はず通りに王都とバンドウによろしくー！」

「ははっ、かしこまりました」

「また一步理想郷フェアリーランドに近づくのね」

女性は感慨深そうに言う。

「楽しみですぞいいます」

そう言つて、二人ともしばらくうれしそうに笑い合っていた。

やがて出て行ったようで、ガチャン！　と重厚なドアが閉められた。

きっと魔王の関係者だろう。ここに用意した魔物を王都とバンドウに十万匹ずつ送り込むつもりらしい。俺は決定的な拠点を探した当たった興奮で心臓が高鳴り、思わずガッツポーズをした。スマホで証拠写真も撮っておく。

それにしても理想郷とは何を指しているのだろうか？ 人類を滅ぼして何をやるうとしてしているのか……。俺は魔王の考えがさっぱり理解できなかった。

いや、そんな事後回しだ！ 急いでこいつらを処分しなくてはならない。

俺はダッシュで部屋に戻るとエステルを叩き起こした。

「エステル！ 出番だ！ お前の力を貸してくれ！」

「ソ、ソータ様……？ 何があつたですか？」

エステルは寝ぼけまなこをこすりながら起き上がる。

「世界を救う方法が見つかった！ 急いで宿屋の殺虫剤を取りにいこう！」

「わ、分かつたです！ エステル、頑張るです！」

エステルは半開きの眼でよろよろと立ち上がると、右手を挙げた。



俺たちは急いでダンジョンを抜け、宿屋へと走った。倉庫に誰もいないうちに魔物たちを倒してしまわないとならないのだ。時間との勝負である。

宿に着くと、スマホの写真を見せながら作戦を伝える。

エステルは殺虫剤を淡々と魔物倉庫のフロアに下ろす。俺はそれをリュックと袋に積めるだけ積んで、二十メートルおきに火をつけて置いていく。一個でどのくらいか倒せるか分からないので、倒せた範囲を見て次の置き方を検討する。こんな感じだ。

「分かつたですう！」

エステルは目を輝かせて殺虫剤をゴロゴロと赤茶の洞窟へ投げ始めた。

俺は殺虫剤を両手とリュックに満載して魔物倉庫のフロアに降りると早速殺虫剤に火をつけていった。

幸い、魔物は整然と区画で整理されているので、区画間の通路にど
んどんとおきながら走っていきける。

とは言え、魔物は百万匹。三キロくらい先までビツシリだ。それ
に、強い魔物は奥の方にあるので非常に骨が折れる。

また、途中で彼らが戻ってきたら計画は終わりにせざるを得ない。
一応ドアノブはヒモでグルグル巻きにしてあるが、そんなのすぐに突
破されるだろう。時間は限られている。

俺はダツシユで殺虫剤を置いていく。まず、一直線に三十個、六百
メートルほど置いてみた。そして、帰りながら魔物の退治具合を観察
する。

この密度で配置していくと、通路から五十メートルくらいの範囲の
魔物は倒せるらしい。で、あれば、二列で三キロ、百五十個ずつ配置
していけばほとんどの魔物を倒せる計算になる。

俺はエステルに『三百個お願い!』と頼み、また、殺虫剤を満載し
て配置へと走っていった。

3-7. ジョツキ爆散

魔物が倒れた後には当然魔石が転がっている。まさに魔石の畑状態だ。しかし、残念ながら拾っている暇はない。殺虫剤を配置し終わって、時間が余っていたら回収したい。

俺は淡々と殺虫剤を配置していったが、途中から異常に速く走れるようになってきていることに気が付いた。ステータスを見るとなんとレベルが七十になっていた。よく考えれば当たり前である。十分の一の魔物を倒しただけで十万匹の魔物を倒したことになるのだ。これは冒険者の十年間分くらいの経験値に相当するのではないだろうか？

さらに俺は奥の方のドラゴンの区画へ行った。そこにはアパートくらいのサイズの巨大な恐竜のような魔物がずらりと並んでいた。ワイバーンの二回りくらい大きい巨体はびっしりとウロコで覆われており、鋭い爪や恐ろしい牙が光っていた。そんなのが何十匹も並んでいるのだ。動かないと分かっているにもかかわらず近づくのは本能的に避けたくなる迫力がある。

隣には一つ目の巨人、サイクロプス。その奥にはドラゴンよりデカイ岩の巨人、ゴーレムの群れが鎮座していた。

俺はそれらの区画にも丁寧に殺虫剤を配置していく。

ドラゴンの魔石はきつと相当高額になると思っただので、これだけは集めておいた。

また、この奥の区画は経験値がめちゃくちゃ高いらしく、ステータスを見るとレベル百二十に上がっていた。

このくらいまで上がると運動能力の向上は顕著で、三キロくらいなら一分もかからず走れてしまう。

二時間くらい頑張っつて、ようやく三百個の殺虫剤を配置し終わった。

あちこちにまだ魔物は残っているが、ここまで叩いておけば侵攻は中止になるだろう。

と、この時、ガチャガチャ！ とドアノブが音を立てた。どうやら

戻ってきてしまったようだ。

魔石集めは諦め、急いで撤退する。



部屋に戻ると、俺はエステルとハイタッチをした。

「イエーイー！」やったですう！」

ニコニコと笑う可愛いエステル。

俺は我慢できずにそつとエステルに近づくとハグをした。

「ソータ様あ……」

エステルもうれしそうに俺のハグを受け入れてくれた。

甘酸っぱい優しい香りに包まれ、例えようなない幸せが俺を包んでいった。

このままベッドに押し倒してしまおうか……、一瞬欲望が頭をもたげる。しかし、まだ告白もしていないのだ。グツと我慢をする。

ちゃんとプロポーズしてから……。さて、どこでどうやって？

さすがにこんなホコリまみれのまま、自室でするようなものじゃないなと思う。ちゃんとタイミングは図ろう。

「今日はありがとう。ご飯食べに行こう」

と、ぎこちない笑顔で言った。

「うん、お腹すいたですう！」

屈託のない笑顔で笑うエステル。

いつになく笑顔が輝いて見えた。



エステルお勧めの近場のレストランへと移動する。ここは揚げ物が美味しいそうだ。

まずはお互いの健闘を祝って木製のジョッキで乾杯。

「カンパーイー！」かんぱーい！」

ジョッキをぶつけると……、

ドウガン！

派手な音がしてジョッキが爆発した……。

泡だらけになる二人……。

店員がタオルを持って飛んできた。

「ごめんなさい、何があったんでしよう？」

申し訳なさそうな店員に、俺はタオルで拭きながら言った。

「いや、ちよつと力加減を間違えただけです。ごめんなさい。おかわりください」

何があつたのか全く分からないエステルに、

「ステータスを見てごらん」

と、言った。

「ステータス……？ ひゃあ！」

驚くエステル。

「レ、レベル百二十……ですう」

エステルは困った顔をして俺を見る。

「Aランク冒険者、ネオ・エステルになったな」

「え？ 私、殺虫剤を下ろしてただけですよ？」

「殺虫剤を置いてただけの俺はレベル百五十だよ」

苦笑する俺。

見つめ合う二人。

そして……、

「くっくっく……」「ひゃっひゃっひゃ……」

お互い変な笑いが湧いてくる。段々おかしくなってきた、

「はっはっは！」「きゃはは！」

大きく笑った。

そこに新しいジョッキがやってくる。

「よし！ 俺たちスーパーAランクパーティーにカンパ―イ！」「かん

ぱーい！」

うれしくなってジョッキをぶつけた。

ドウガン！

また泡だらけである……。俺は自らの馬鹿さ加減にちよつと呆れたが、それより湧き上がるうれしさが勝っていた。

「はっはっはー！」「きゃははー！」

俺たちはお互いのずぶ濡れの様子を見てまた大笑いした。

俺は久しぶりに心の底から笑った。就活地獄の日々から打って変

わって、この数日に詰め込まれた、まるでオモチヤ箱みたいなイベン
トの数々……。うん、人生絶好調だ！

3—8. ダイヤモンドリング

ピロン！

その時、スマホが鳴った。新着メッセージだ。

ここは異世界、圏外である。電波など飛んでない。なのにメッセージが届く……。先輩だ。こんな事ができるのは彼女しかいない。

俺はタオルで顔を拭くと、スマホのロックを解除した。

『魔王の住所はこちら↓カルセーヌ通り233 明日朝十時に行く事。で、まだなの？』

俺は文末を見て思わず嘔き出した。

「ソータ様、どうしたですか？」

エステルがタオルで髪を拭きながら、首をかしげて俺を見つめる。先輩がどうやら楽しみにして監視しているらしい。趣味悪いなあ……。

「い、いや、大丈夫。ところでカルセーヌ通り233ってどの辺？」

「え？ ここがカルセーヌ通りですよ？ 233ならあの辺じゃないですかね？」

エステルは通りを指さす。

「マジか……」

俺は思わず額に手を当てる。魔王は近所にお住まいだった……。

俺は先輩に返事を返す。

『朝十時了解です。例の件は、指輪とかの準備が要るので……』

ピロン！

すぐに返事が返ってきた。

『右ポケットに用意しておいたわ。良かったら使ってね♡』

右ポケット!?

俺は急いで右ポケットに手をつ突っ込むと……、硬い物が入っていた。

まさか……。

俺はその四角い小さな箱をそーっと取り出し、机の下でひそかに確認する。

箱を開けると、そこには立派な指輪が入っており、大きなダイヤモンドがキラキラツツと光った。

俺は思わず天を仰ぐ。なんだこのイリユージョンは!?

着実に外堀を埋めてくる先輩。こんな急かされなくてもやりますよ。

「それ何ですか?」

エステルが机の下をのぞいて聞いてくる。

「あ——っ! 何でもない! 何でもないよ——!」

俺は冷や汗をかきながら、急いでポケットに突っ込んだ。

怪訝けげんそうな顔をするエステル。

「エ、エステルの将来の夢って何かな?」

急いで話題を変える。

「しよ、将来ですか? うーん、お嫁……さん、かな?」

真っ赤になって下を向くエステル。話題が変わっていない……。

折角だから、さりげなくリサーチを試みよう。

「ど、どういう人と結婚したいの?」

エステルはチラツツと俺を見て、

「昨日の夜に、女神様が夢に出たです。女神様は『あの人がいいんじゃないか』っておっしゃってくれたんです……」

と、恥ずかしそうに言った。

「あ、あの人って誰かなあ?」

心当たりある俺はドギマギして聞いた。

「そ、それは……。ひ、秘密ですっ!」

そう言っつて真っ赤になり、

「おトイレ行ってきます!」

と、言っつてテツテツと駆けて行った。

ピロン!

スマホが鳴った。

『そういうの、男らしくないと思うわ』

女神様からの突っ込みが入る。なんで見てるんだよ! 俺は思わず周りを見回してしまふ。

でも、確かにちよつとズルかった気がする。反省した。
『魔王の件が片付いたら言います』
そう返事をしておいた。



かなり酔っぱらって二人は宿屋に帰ってきた。

エステルはベッドにピョンと身を投げると、

「えへへ、幸せですう」

と、最高にうれしそうな顔をして言った。

「今日もいろいろあつたなあ……」

俺もエステルの隣にゴロンと転がって言った。

「ソータ様と出会ってから、驚くことばかりですう」

エステルはニコニコしながら俺を見て言う。

「それは俺も同じだよ」

そう言っ二人で見つめ合って、笑った。

そして、俺は酔いも手伝って、

「俺……、今晚……、ここで寝ていいかな？」

と、勇気を出して言った。

「いいですよー！」

うれしそうに言うエステル。

やった！俺は秘かにガッツポーズ、期待に胸がはちきれそうになった。

「じゃあ、私はソータ様の部屋のベッドで寝るですね！このベッド寝心地最高ですよ！」

そう、ニコニコして言った。

あれ……？　そういう意味じゃ……、ないんだけどな……。

「じゃあ、また明日！　おやすみですう！」

そう言っエステルは、ピョンとベッドから飛び降りると、鏡の中へと消えて行った。

「あ……」

俺は力なく手を伸ばし……、はあくつと大きく息をついた。

本当にあの人、俺より年上なんだろうか？

一瞬、スマホが鳴るんじゃないかと身構えたが、さすがにそんなことは無かった。

3—9. 秒間三百回の世界

「なんだよお……」

俺はやりきれない気持ちを抱えながら上着を脱ぎ、椅子の背に向けてポーンと放った。

その時、ふと違和感を感じた。

ランプの炎が優しく照らす中、飛んだ上着は何だかコマ送りのように、ギザギザな残像を残したのだ。

それは安物のLEDランプの時に感じるような、ほんの些細な事だったが、すごく気になった。

俺は手のひらをブンブンと振ってみる。すると、やはり、滑らかな残像とならない……。おかしい……。ランプの炎はアナログだ。像は必ず滑らかになるはずなのだ。

ハンドタオルを丸めて結び、壁に向けて投げてみた。ハンドタオルは点々と残像を残して飛ぶ。ざっと計算すると、三分の一秒ごとに像が生成されているようだった。

昨日まではこんな事なかったのに……。と思って気が付いた。レベルが150に上がって、動体視力が上がったのだ。普通の人じゃ全く気が付かない像の異常に、気がつくようになってしまったのだった。

と、なると……。この世界は三分の一秒ごとに像が生成されている仮想現実空間と言う事になる。言わばMMORPGのようなゲームの世界の中と言う事だ。俺はにわかには信じられなかった。美味しい料理、旨い酒、エステルの柔らかな頬に温かき、これら全部が仮想現実上のデータと言う事になる。つまり、エステルもただのゲームのキャラクターになってしまう。結婚を考えていたあの愛しい存在がただのゲームのキャラクター？ そんな馬鹿な……。

俺はゾツとして冷や汗がタラリと流れた。

思い返せば、魔法にしても殺虫剤にしても美奈先輩の起こす奇跡にしても、仮想現実空間であればいくらでも説明がつく。データを都合よく処理しているだけだからだ。

俺は手のひらをジツと眺めた。表面に刻まれた微細なしわ、指紋、

皮膚の中に巧妙に入り組んだ赤と青の血管たち……。その全てが動かせば微妙に形を変えながら柔らかく追隨ついでしていく。これが全部コンピューターが作り出したものだった？

一体だれが何のためにこんなシステムを組んだんだ？　そもそもそんな事できるのか？

と、ここで俺は嫌な事を思い出した。スマホだ。俺はスマホを取り出してロックを解除した。音楽を選ぶと当たり前のように鳴り出す。しかし、ここは仮想現実空間。三百分の一秒ごとに像が生成されている世界だ。なぜ、日本のスマホがそのまま動くのか？

そしてさらに嫌な事を思い出す。美奈先輩は日本の俺の部屋のエステルをそのまま治療していた。これはもしかして……。日本も仮想現実空間……。なのか？

いや待て！　そんな馬鹿な事があるか？　日本が三百分の一秒ごとに像が生成される世界だったらすすがに誰かが気づくだろう。高速度撮影カメラは幾らだつてあるし、いろんな観測装置があるんだから……。

俺は頭が混乱した。俺の生きてる世界ってどうなっているんだ？　素粒子が波で作りに上げてるって話じゃなかったのかよ？　科学者何やってんだよ！

その後もいろいろ考えてみたが、結論は出なかった。ただ、手を揺らせばいつまでも残像はギザギザのまま。この世界は仮想現実空間、それだけは間違いないかった。

その晩、俺はなかなか寝付けなかった。



「ソータ様！　朝ですう！　起きるですう！」

耳元で大声を出された。

「うっ？　もうちよつと……」

俺は毛布に潜り込む。

「ダメですよお！　食堂しまっっちゃうですう！」

エステルは毛布を引っ張る。

「寝かせてよお！」

俺はグンっと毛布を引つ張り返した。

「きゃあ！」

エステルが俺の上に倒れ込む。

「うわあ！」

重なる二人……。柔らかい重みが俺を押しつぶす。

この重みも仮想現実？ 俺は寝ぼけながらボーっと感じていた。

「起きるです……」

エステルが耳元でボソつという。

俺はエステルの優しい香りを胸いっぱい吸い込みながら考えた。

仮想現実かどうかなんて、どうでもいいのかもしれない……。仮

想現実でもなんでも幸せになれば勝ちなのだから。

3—10. 魔王の悩み

「ゴメン、起きるから先行ってて」

そう言っつてエステルを優しくゴロンと横に転がした。

「もう、ソータ様は世話が焼けるですう」

「ゴメンね、これからも毎朝起こしてくれる？」

俺はニツコリしながら聞いてみた。

「起こして欲しいです？」

エステルはキョトンとしながら聞いてくる。

「うん、ずっと……」

「ずっと……、ですか？ お嫁さんみたいですね」

エステルはニツコリと笑っつて言った。

「そういうの、嫌かな？」

俺はゆっくりと起き上がっつて聞いた。

「……。ずっと一緒なのはうれしいです……。ですが……」

エステルはうつむいて言った。

「何か問題が？」

「……。じ、実は……」

コンコンコン！

ドアがノックされる。

「朝食でーすー！」

おばさんが声をかけてきた。

「ハイー！」

エステルは返事をするど、

「先に行っつてるですー！」

そう言っつて出て行っつてしまった。

肝心のところが聞けなかった。エステルが気に病んでいゝことは何なんだろう？

先輩の話では、彼女は俺との結婚を望んでいゝと言う事だったのに。

望んでいゝても結婚は出来ないっつてこと？ 実は婚約者がいゝとか、

宗教上の制約があるとか……、なんだろうな？

これはプロポーズしても断られる可能性があるという事だ。いまさらそんな展開アリか？

「なんだよお……」

俺は額に手を当て、ベッドに背中からバタリと倒れ込んだ。なんだか急にエステルが遠い存在になってしまった気がした。

◇

結局、言い出す機会もなく、エステルの問題は謎のまま時間になり、俺たちは魔王の屋敷まで来ていた。

石造りの重厚な建物には233と書かれた小さくオシヤレな金属パネルが掲げられ、大きなドアがある。

俺は大きく深呼吸を繰り返すと、コン！ コン！ とドアに付けられたライオンのドアノッカーを叩く。

しばらくしてドアが開き、中から黒いスーツを着た男性が出てくる。

「いらつしやいませ。どうぞ……」

俺たちは男性の後について廊下を進む。

この世界の破滅をもくろむ魔王。一体どんな人なのだろうか？

なぜ、こんな所に一般人のように暮らしているのか？

謎だらけである。

男性は居室のドアの前で止まると、コンコンとドアをノックして、

「マスター、お客様がお見えです」

と言った。そして中の反応をみて、ドアを開け、

「どうぞお入りください」

と、俺たちを部屋へと案内した。

部屋に入って驚いた。そこには巨大なモニターが何枚も展開されており、数字、グラフ、世界各地の映像がびっしりと表示されていて、まるで証券トレーダーのデューリングルームのようだった。

「よく来たね、まあかけて」

Tシャツにジーンズ姿の大柄な白人男性がニコツと笑うと、ソファアを指さした。

魔王？ 彼が？ 俺はおどろおどろしい悪魔の化身のような存在を想像していたが、実際はアメリカのハッカーみたいな人だった。

俺たちは言われるがままに座ると、スーツの男性がうやうやしく紅茶を注いでくれた。

「魔王……様ですか？」

俺は聞いてみる。

「そう、僕は魔王。ソータ君だね。ヴィーナ様からよく話は聞いているよ。こちらが……ファイアンセかな？」

「ファイアンセ？」

エステルが首をかしげる。

「あー、彼女はパートナーです！ パーティー組んでるんです！」

俺は冷や汗を流しながら説明する。先輩はどんな説明してるんだ？ 非常に困る。

「あ、そうなんだ。ふむ」

俺は単刀直入に言った。

「魔物の襲来なんですけど、止めてもらうことはできますか？」

「あれね、私がやってるんじゃないんだよ」

魔王は肩をすくめて困ったような顔をする。

「え？ じゃ、誰が？」

「それが……、分からないんだ」

魔王は額に手を当てる。

3—11. 海王星の衝撃

「でも、魔物たちは魔王様が作り出しているんですよ？」

「そう、ダンジョンを作って魔物を配置するのは私の仕事だよ。これにより人々に意欲を与え、社会に活気を醸成するのさ。ああやってるんだ」

そう言っただけの巨大なモニタ群を指さす。

よく見ると、そこには多くのダンジョンデータといろんなステータスが並んでいた。

「魔物と宝箱を配置し、冒険者に魔石と宝を供給するのが僕の仕事。中には命を落とす冒険者も出てしまうが、魔物がダンジョンを抜け出して一般人を襲うようなことはしない。あくまでもフェアにやってきた」

「フェアでも死者や遺族からしたら納得できないと思いますが」

「うん、そうだね。恨んでもらうしかない。」

そう言っただけ魔王は肩をすくめて首を振る。そして、続けた。

「でも、登山家が雪山で命を落とすとしたとして、山を作った神様の問題だということかな？」

「いや、そうですが、人を殺さない魔物も作れますよね？」

「昔はそうだったよ。でも、それは結局テーマパークにしかならなかった」

「真剣勝負でないと価値がない……ってことですか？」

「人間の本质がそこにあるということだよ、ソータ君」

俺は悩んでしまった。確かに雪山に登らなければ遭難しないし、ダンジョンに潜らなければ魔物には殺されない。選択の結果ではある。しかし、惨殺死体はこの目で見てしまった俺は簡単には割り切れなかった。

「それより、魔物の群れなんだがね、あれは本当に私がやってるのではないんだ」

魔王はお手上げのポーズをする。

嘘をついているようにも見えないし、確かに俺たちに嘘をつくメ

リットも無いだろう。となると、あの魔物倉庫は何だったのか？

「ちよつとこれ見てください」

俺はスマホを差し出し、魔物倉庫で撮った写真を何枚か見せる。

「えっ!? なにこれ!？」

「昨日、とある空間でこれを見つけましたね、ほとんど倒しておきました」

魔王は驚愕の表情を浮かべながら、スマホを食い入るように見つめた。

「ちよつとこれ、メッセージャーで送ってくれる?」

そう言つて魔王は最新型の iPhone をポケットから出し、QRコードの画面を俺に差し出した。

俺は異世界の魔王が iPhone を使いこなしている様に違和感を覚えながらも、フレンドになつて写真を送つておいた。この部屋はアンテナが五本も立っていて電波バッチリなのだ。

魔王はジーツと写真を拡大しながら、ハアアつとため息をつく。

「これは……、ミネルバ様にすぐにご報告せねば……」

「ミネルバ様……?」

「この星の管理者だよ」

俺は管理者という言葉にゾクツとする感覚を覚えた。そこにはIT系の匂いが漂つていた。魔物を管理しているあの巨大なモニタ群からしてもここは現実世界ではないということだろうか……。

「管理者……? もしかして仮想現実空間を管理している方

……つてことですか?」

俺は恐る恐る聞いてみた。

すると、魔王はニヤツと笑つて言った。

「ほう、良く分かつてるね。そう、ここはコンピューターが作り出した仮想現実空間。ミネルバ様はこの管理を任されているのさ」

俺は思わず大きく息をついた。この世界はリアルな世界ではなかった。多分そうだろうとは思っていたが、実際にそうだと言われてしまうと心が追いついていかない。リアルでないつてことはゲームみたいなものということだ。エステルと必死に戦い、生き抜いてきた

全てがゲームだと言われてしまうのはやりきれなかった。

「秒間三百回くらい合レンダリング成されているようなので、そうかなと思っていたんですが……、やっぱりそうですか……」

「おお、良く気づいたね。正確には288Hzだよ。海王星にあるコンピュータが計算して秒間288回像を合レンダリング成しているのさ」

「海王星!? なぜそんなところに……」

俺は予想もなかった情報に驚かされた。太陽系最果ての星、海王星。それは図鑑でもちよこつとしか出てこないなじみの薄い星だ。なぜ、そんなところにコンピュータシステムを構築しているのだろうか……?」

「太陽系で一番寒い所だからじゃないかな? 熱はコンピュータシステムにとって最大の敵だからね」

「ここが仮想現実空間だというのは理解しました。でも、なぜ、iPhoneがそのまま動くんですか?」

「え? だって日本だって同じシステムで動いてるからね。iPhoneも仮想現実のデータだよ?」

俺は絶句した。

3—12. 六十万年の壮大な計画

やはりそうか……。俺は仮想現実空間に生まれ、二十一年間生きてきていたのだ。つまり、俺はゲームのキャラクターみたいな存在だった……。でも、日本は科学が発達している。288Hzだったら矛盾が観測されているはずだ。

「いやいや、日本には高速カメラだって、素粒子の加速器だって、288Hzでは矛盾が出る装置なんていくらだってあるじゃないですか！」

「ん？ そこだけシステムが検知して自動で周波数上げてるんだよ」

魔王は当たり前のようにニッコリと笑って言う。

「え？ 本当に？ でも、時間だけじゃない、量子効果だってコンピュータでは再現できないはずですよ？」

「量子って結局確率の話だからね。コンピュータで再現するのはそんなに難しくないよ。量子コンピュータには量子コンピュータそのままではめてやるだけだし」

「え……？」

俺は必死に仮想現実空間では不可能な理由を探した。しかし、いくら考えても矛盾は見つからない。確かに原理的にはコンピュータの規模さえ整えば実現可能だった。

「君たちの使ってるパソコンの計算速度がだいたい秒間で 5×10^{11} 乗回、日本ご自慢のスパコン富岳で 4×10^{17} の17乗回。そして、海王星にあるIDCのコンピュータは 5×10^{29} の29乗回。富岳の1兆個分だね。まあ、ちよつと想像を絶する規模だよ」

俺は愕然がくぜんとした。富岳が一兆個もあれば、それは確かにできてしまいかもしれない。人間一人動かすのに富岳10台分だ。ソフトの組み方次第でできないことは無いかも……。しかし……。

「そんな膨大なシステム、誰が何の目的で作ったんですか？」

「多様性のある文化・文明が欲しくて、海王星人が60万年かけて作ってたって聞いたな……」

魔王は宙を見ながら答える。

「60万年!」

俺は絶句した。そりやそうだよ。富岳一兆個分のコンピューターなんて百年や二百年じゃ作れっこないのだ。それにコンピューターは電気をもつごく食う。電源も用意しなくてはならない。途方もない時間かかるのは仕方ないだろう。

太陽系ができてから46億年と聞いたことがある。よく考えれば60万年といっても太陽系の歴史に比べたら一瞬だ。俺は宇宙の壮大なスケールと海王星人の執念に思わずため息をついた。

「この世界が仮想現実だと何か不都合でもあるのかい?」

魔王は淡々と聞いてくる。

「不都合?」

俺は悩んでしまった。21年のこの人生の中でリアルじゃなくて困った事……。何も思いつかなかった。しかし、俺はコンピューター上のデータ。データに価値なんてあるのだろうか?

「私が電子的存在だったとしたら、私って何なんでしょう? ゲームのキャラクター?」

「自分が何者かはコンピューターが定義するものではない。『我思う故に我あり』、実装環境が何であろうと、『思い』は宇宙に一つだけの珠玉の宝石であり、アイデンティティだ」

魔王は優しい目で言う。

「思うことそのものに価値があるってことですか?」

「そう、思いは神聖にして不可侵な君の世界だ。また同時に、君の思いは他の人の思いと有機的な関係を築きながらオリジナルな世界を紡ぎます。そしてその思いの集合の結果生まれる文化・文明が海王星人の求めるものなのだよ」

なるほど、高度に発達した科学力を持つ海王星人たちにとってもオリジナルな文化・文明を簡単に合成はできないってことだろう。そこで俺たちを生み出し、紡ぎださせている。それは大変に非効率かつ冗長に見えるけれども、それ以外方法が無いということなのだ。俺は生まれて初めてこの宇宙の理ことわりに触れ、感慨深く思った。

「おつといけない! ミネルバ様に連絡しないと……」

そう言つて魔王は iPhone で電話をかけた。

ここまで文明が発達してるのになぜ iPhone なのかはちよつと疑問だった。

緊急会議が開かれるとの事で、ミネルバの拠点へ行くことになった。

魔王は空中に指先で大きな円を描くと、大きなドアがポンつと現れた。

そして、魔王はドアをノックする。

「どうぞー」

若い女性の声が出て、魔王は中へ入り、俺たちを呼んだ。

3—13. 猫の人

ドアをくぐって、俺は驚いた。なんとそこには富士山がドーンと目の前にそびえ、足元には芦ノ湖が広がっていた。異世界なのになぜ？「は、箱根ですか!？」

思わず俺は声に出してしまふ。一面ガラス張りの広い部屋の景色は最高で、思わずため息が出てしまふ。しかし、日本の箱根であれば湖畔に多くの建物があるはずだが……、何も見当たらない。ここは異世界の箱根のようだ。日本と同じ地形データを使っているということ……なのだろう。俺は改めて仮想現実空間の奇妙さにクラツとした。

奥から頭が猫の人が出てきて言った。

「そうよ、箱根。いい景色でしょ?」

俺は一瞬どういふことかと混乱した。猫だ……猫の人だ……。

茶シロのスコティッシュフォールドで、オレンジ色の瞳……。そんな愛らしい猫が身長百六十センチくらいで立ち、アイボリーのワンピースを着て人の言葉を話したのだ。

俺が言葉を失っていると、エステルが、

「うわあ、猫の人ですう!」

と、うれしそうに彼女に近づいた。

「あなたがエステルさんね、こんにちは」

そう言つて猫の人は手を差し出してエステルと握手をする。手は毛におおわれてはいるが人間の手の形をしていた。

「ミネルバ様……ですか?」

俺が恐る恐る声をかけると、

「そうよ、ソータ君ね。初めまして」

そう言つて俺とも握手をしてニツコリと笑つた。さすが^{アドミニストレーター}管理者、もはや人間を超越している。

「もうすぐ大聖女のマリアンも来るわ」

ミネルバはニツコリとそう言つた。

「……。マリアン……?」

この名前は憶えがある。魔物倉庫で聞いた名前だ。この世界の
管理アドミニストレーター者すら原因が分からない魔物の侵攻だが、管理アドミニストレーター者グルー
プの中の人が悪事を働いていたのであればしつくりくる。

名前が同じだけという、そんな曖昧な事を話していいものか一瞬悩
んだが、多くの人命がかかっている話であり、何でも話しておこうと
思った。

「あのお……」

「何？」

ミネルバはクリツとした瞳を大きく開いた。実に可愛い。可愛す
ぎる……。猫は反則だ。

俺はちよつと目を背けて大きく息をついて言った。

「写真の魔物倉庫に若い女性が入ってきて、名前が『マリアン』だっ
たんです」

「えっ!？」

ミネルバは驚いて魔王と目を見合わせる。

「ひよつとすると……」

魔王は眉間みけんにしわを寄せる。

「もし、そうだとするならば……。いろいろ辻褄つじつまは合うわね……」
ミネルバも渋い顔をする。猫でも表情は良く分かる。

重い沈黙の時間が流れた。

「まあ、ちよつと座って」

ミネルバはそう言う俺とエステルに椅子をすすめ、空中からマグ
カップのコーヒーを出す俺たちの前に置いた。

俺は荒れることを予想し、鏡を足元に横に立てかけてスタンバつて
おいた。



ピロパロポロン!

電子音がして、ドアが現れた。

「どろぞー」

ミネルバは可愛い猫の声で叫んだ。

入ってきたのは豪華な純白の法衣に身を包んだ銀髪の女性だった。

スツと鼻筋の通った色白の美しい女性は高貴な気品をたたえ、その目は鋭く朱色に輝き、ただ者ではない雰囲気を漂わせている。

マリアンはにこやかに俺たちを見回して……、エステルを見つけると、

「あれ？ 六十一号!? なぜあんたがここにいるのよ？」

と、トゲのある声で言った。

エステルは、椅子から降りてひざまずくと、

「だ、大聖女様、ぐ、ぐ機嫌麗しく……」

と、震える声であいさつをする。

どう見ても尋常じゃない。教会関係でつながりがあるのだろうか、番号で呼ぶとはただ事ではない。それに六十一とはエステルのうなじに彫られた数字ではないか。この二人はどういう関係だろうか？

ミネルバはそれを見て、

「彼女は私が呼んだの。それより、これ、何なの？」

と言って、写真を空中に投影し、マリアンをにらんだ。

マリアンは写真を見て、一瞬驚愕の表情を浮かべると、エステルをにらみ、

「あんた！ 裏切ったわね！」

そう言ってひざまずいているエステルの頬をパン！ と張った。

3—14. ネオエンジェル六十一号

「何するんですか!」

俺はエステルを抱きかかえて後ろに下げ、マリアンをにらんだ。

「わ、私は何もしてないですう……」

エステルはか細い声で言った。

ミネルバは、

「暴力は止めなさい! あなたが魔物の侵攻をやってたのね。一体どういうこと?」

と、マリアンに迫りながら問い詰める。

マリアンも負けずにミネルバを冷たい目でにらみつけた。そして、「ふつ、はっはっは! あーあ、バレちゃった。そうよ、私が魔物を使って街を襲ってたのよ」

マリアンは余裕の表情でミネルバを見つめる。

「あなたの行為は海王治安法第32条に違反する重大な犯罪よ。なぜ、こんなことやったのよ!」

怒るミネルバ。

「ふんっ! あんたらのやり方が生ぬるくて見てらんなかったのよ。あなた、最近成果全くないじゃない。このままじゃこの星、消去処分よ? どうすんの?」

「ど、どうすんのかって、地道に改善策を話し合ってきたじゃない。何を今さら」

マリアンは肩をすくめて言った。

「あなた、人間という物を分かっていないわ。人間は欲望の生き物。金と権力にとりつかれた亡者なの。結果オッサンたちが利権を独占し、ガチガチな社会を作り上げた……。この星の若者見てみなさいよ、みんな老害たちに翼をもがれて苦しんでるわ」

「社会の安定のためには……」

「何が安定よ! 老人が何もせずに大金をせしめる社会が安定した社会? ふざけんじやないわよ!」

「それは貴族制の問題だから……」

「違う！ 全然違うわ！ その男の故郷、日本を見てみるといいわ。貴族なんていないのに老害がガチガチの利権社会を作って若者を潰してるわ。日本では大企業が貴族の代わりをしているのよ。要はシステムの問題じゃないの、人間の業ごうの問題だわ」

俺は反論しようとしたが……、大企業に入ろうと必死に就活を繰り返して俺には否定できなかった。

「なら、どうするのよ？」

ミネルバが言った。

「欲望に縛られない新人類ネオエンジェルに入れ替えるのよ。人を騙さない、嫉妬し

ない、損得勘定しない、独り占めしない、そういうオープンな感性を持った、いつまでも歳をとらないフレッシュな若者……、彼らに入れ替え、理想郷フェアリーランドを作るの」

マリアンはうれしそうに微笑んだ。

新人類ネオエンジェル？ まさか……、もしかして……、俺はエステルを見た。エ

ステルは俺の視線を感じると、ビクツとなって縮こまってしまった。

「そんな社会上手くいくわけないわ！」

ミネルバが叫ぶ。

「ソータ君……だっけ？ あなた、新人類ネオエンジェルと一緒にいたんでしょ？

どうだったのよ？」

マリアンはニヤツと笑って聞いてくる。

「エ、エステルの事か？」

俺は青い顔をして聞いた。

「名前なんて知らないわ、その娘、六十一号のことよ」

やはり……、俺は目の前が真っ暗になった。エステルは人間ではなかったのだ。優しく献身的でいつまでも子供な存在……、それは作られた新人類ネオエンジェルだった……。

「ソ、ソータ様、ち、違うの！」

エステルが俺にしがみつき、涙目で訴える。

俺はエステルを蒼白の顔でジツと見下ろした。なんて言ったらいいのかわかりませんが完全に言葉を失ってしまいました。

なるほど、確かに世界中エステルみたいな人だらけになったら、争

い事も揉め事もなくなってしまうだろう。それは一つ真理を突いてるなど思った。思ったが……、そんな社会など価値があるんだろうか？ 毎日三食スイーツしか食べないような社会って感じがして非常に抵抗を感じる。

「そんな社会、発展などしないわ。それに大量虐殺は違法。直ちにお前を拘束する！」

ミネルバはそう叫ぶと全身を光らせて、

「ホーリーバインド！」

と、叫んだ。放たれた光のロープがマリアンをグルグル巻きにしていく。

しかし、余裕の笑みを浮かべるマリアン。

直後、ハッ！ とマリアンが叫ぶと光のロープは飛び散って霧散し、逆に新たに生成されたロープであつという間にミネルバと魔王と俺をそれぞれしばった。

「うわあー」「な、なぜだ！」「ぐわあー！」

いきなり縛られ、バランスを崩し、尻もちをつく俺。

「ふふっ、あなた達の権能はすべて奪ったわ。事故死として処理しておくわね。さようなら」

マリアンはうれしそうにそう言うと、腕をデカイ窓ガラスに向けて振って光を放ち、窓ガラスを全部粉々に砕いた。そして、

「六十一号、行くわよ！」

そう言ってエステルの腕をつかむと、窓の外へと飛んだ。

「エステル！」

身動き取れない俺が叫ぶと、

「いやあああ！ ソータ様あ！」

悲痛な叫びが遠ざかっていく。

「ヤバイ！ 逃げないと！ あいつ撃ってくるわ！」

ミネルバが叫んだ。

「ダメだ、能力が全部ロックされてる！」

魔王は青くなつて言った。

俺は足で鏡を蹴り倒すと、

「ここに逃げてください！」

そう叫んで鏡に飛び込んだ。

直後、箱根は激しい閃光に覆われ、真っ白い繭のような衝撃波が箱根全体に大きく広がった。それはまさに地獄絵図であった。全ての樹木はなぎ倒され、芦ノ湖の水は吹き飛ばされ、全てが温泉地獄の^{おわくだに}大涌谷のような焦土と化した。そして、中から真紅のキノコ雲がモクモクと吹きあがっていく。

「はっはっは！ これで世界は私の物だわ！ 六十一号！ あなたも手伝うのよ、分かったわね？」

「ソ、ソ、ソ、ソータ様……、ああ！ ソータ様あ！ いやあああ！」
錯乱し、泣き叫ぶエステル。

「うるさいわね！ 記憶を消してあげるわ。あんな男、六十一号には要らないわ」

そう言つて、マリアンは逃げようともがくエステルの額に手を当てた……。

「やめてええええ！」

悲痛な叫びが、巨大クレーターのはるか上空で響いた。

3—15. 疑惑の海王星

俺は自宅で、鏡から飛び出してくる魔王を補助し、うまく着地させた。

続いて飛び出してきたのは……、黒髪の女性!?

褐色のオリエンタルな美人で、オレンジ色の瞳をしている。

「うわあー!」

女性は叫び、俺は頑張つて抱きかかえる。

すると、ゆるい衣服から豊満な胸がこぼれそうになる。

「え!?!」

思わず目が点になる俺。

「キャ——!」

女性は両手で胸を隠すと、涙目で俺をキツとにらみ、パシーン!と、平手打ちした。

その女性はミネルバだった。日本に来た時に変身の魔法が解け、猫から人間になってしまったのだった。猫の時は胸が無かったし、毛皮で覆われていたのでゆるい服を簡単に着ていただけだったのだ。

俺は頬をさすりながら、Tシャツを出して後ろを向きながら彼女に渡した。

「思わず叩いちやった……、ごめんなさいね」

謝りながらシャツを着るミネルバ。

「いえいえ、私も見ちゃいましたし……」

「え!?! 見えたの?」

「だ、大丈夫です! 見えそうになっただけです!」

俺は嘘でごまかした。



狭い部屋の中で小さな丸テーブルを広げ、作戦会議である。俺はコーヒーを入れてふるまった。

一つの世界の頂点たるリーダーがこんな小さなワンルームで世界を救う議論をしているなんて、とても違和感があった。

しかし、ミネルバを排除したマリアンは一気に計画を推し進めてく

るだろうし、さらわれたエステルも心配だ。一刻を争う。

「なぜマリアンは我々の権能を無効にできたのかしら?」

ミネルバはコーヒーを飲みながら魔王に聞く。

「OSレベルでハックしないとそんな事できませんが……、そんな事例ここ数千年一つもないですよ。不可能です」

「でも、やられちゃったわよ?」

ミネルバは口をとがらせて、不満げに言う。

「そうなんですよね……」

重苦しい空気が流れる。

俺は仮想現実空間がどうやって作られて、どう運用されているのか全く分からないので何とも言いようがない。ただ、ソフトウェア的に不可能な事をやられたとしたらハードウェアが問題なんじゃないかと思った。米中間でそれで揉めていたのを思い出したのだ。

「サーバーに……、仕掛けをされたってことは無いですか?」

俺は恐る恐る横から言う。

「えー!? そんなの海王星に行つて直接いじらないと不可能よ」

「行けないんですか?」

「行けはするけど……。あの子がハードウェアの知識なんてあるとは思えないんだけどな……」

iPhoneを巧みに叩いていた魔王が叫んだ。

「ミネルバ様! 海王星の渡航記録にリアンの名があります!」

「な、なんですって!? そんな話聞いてないわ……」

目を真ん丸く見開くミネルバ。

「海王星にはサーバーしかありません。本来ならわざわざ行く意味などないです」

魔王は肩をすくめる。どうやらサーバーに何らかの仕掛けをした線が濃厚だ。

「じゃ、今すぐ渡航申請出して! 魔王はバックアップ、ソータ君、きみはついてきて」

「了解」^{ラジャー}「わかりました!」

魔王はタカタカと器用にiPhoneを叩いた。

エステル、待ってるよ！ 俺が必ず迎えに行行ってやる。

◇

目が覚めると俺は寝台のようなベッドの上にあった。ゆっくりと体を起こすと……、全裸だ。服はどこにあるんだろう？

俺がキョロキョロしていると、

「ソータ君、行くわよ！」

そう言う声かしてカーテンがガツと開いた。

ミネルバは猫の身体に戻っていて、こちらを見る。

「うわあ！」「キャ——！」

「なんでまだ裸なのよ！」

「服がどこにあるか分からないんですよ！」

「もう！ 仕方ないわねえ……」

ミネルバが空中に現れたタッチパネルをパンパンと叩き、俺は自動的に服が装着された。

3—16. 一キロメートルの地球

「さあ！ 行くわよ！」

ミネルバはプリプリしながら金属の廊下をカッカツと歩いて行く。急いで追いかけると巨大な窓が見えてきて、外は真つ暗だった。ふと、窓から下を眺めて驚いた。なんとそこには巨大な碧い惑星が眼下に広がっていたのだ。

「うわあ！」

そのどこまでも澄みとおる青、圧倒的な巨大さに俺は圧倒された。

ミネルバはニヤツと笑い、

「ようこそ海王星へ！」

と、言った。

窓に張り付いて見ると、まっすぐに立ち上る天の川に、クロスするように巨大な環が十萬キロくらいのアーチを形作っていた。大いなる宇宙の芸術に俺は思わずため息を漏らす。

「はい！ 行くわよ！」

ミネルバはカッカツと先を急ぎ、

「あー、待ってくださいー！」

と、俺は追いかける。

俺たちが転送されたのは海王星の衛星軌道上の宇宙港^{スカイポート}。直径数キロメートルの巨大な観覧車のような環状の構造物だ。ここから海王星の内部に設置されたコンピューターへとシャトルで向かうらしい。

無重力の船着き場から六人乗りの小さなシャトルに乗ると、自動的にハッチが閉まり、エンジンがかかって、ゆっくりと加速し始めた。「なんでこんなところにサーバーがあるんですか？」

「冷たいからじゃないかしら？ 氷点下二百度らしいわよ」

「マイナス二百度!？」

俺は思わずブルつと体が震えた。全ての物が一瞬で凍り付く温度、そんなところへこれから行くらしいが……大丈夫なんだろうか……。

シャトルはどんどんと高度を落とし、徐々に真つ青な海王星が視野いっぱい迫ってくる。そして、大気圏突入。シャトルは真つ赤にな

りながらさらに高度を落とすしていく。

「なんだかすごいですね！　まるでSFですよ！」

俺が興奮していると、

「これが仮想現実空間だと言ったら信じる？」

と、ミネルバはニヤツと笑って言った。

「えっ!?　仮想現実空間というのはこれから向かうコンピューターが作ってるものですよ？　なぜここも仮想現実空間なんですか？」

俺は困惑して言った。

「ふふっ。今度女神様に聞いてみるといいわ」

ミネルバはそう言って、うれしそうに笑った。

60万年かけて作ったという海王星のサーバー群。それがあつた世界が仮想現実空間？　俺は彼女が何を言ってるのかわからなかった。

やがてシャトルはボシュツ！　という音を立てて濃い気体の層に突入した。気体はほぼ透明だったが、下の方を見ると青黒くどこまでも続く底なしの様相が見て取れた。本当に、こんな所にコンピューターなんてあるのだろうか？

俺の不安など無関係に、シャトルはその青黒い方へどんどんと潜っていく。

そのうち、真つ暗となり、ヘッドライトは雪が舞い散るような風景を照らしだしていた。

「そろそろ着くわよ」

ミネルバがそう言って、スマホで魔王と手順の確認をしている。

やがて見えてきた巨大な黒い構造物……デカイ。それは新宿の街がすっぽり入るくらいのサイズの巨大な直方体だった。そして、その直方体がまるで貨物列車のように次々と連なっていた。

「これがジグラー、これ一つで地球一つよ」

ミネルバが説明してくれる。

「あなたの日本がある地球は……、あれね」

やがて近づいてきたジグラー。継ぎ目があちこちにあり、その継ぎ目からは白い明かりがほのかに漏れている。ここにはスパコン富岳の一兆個に相当するコンピューターが収められている。

直径一万二千キロの巨大な青い惑星、地球。多くの生き物と八十億人の人が暮らすその星の実体がこの一キロメートルくらいの黒い箱だったなんて誰が信じるだろうか？ 実際に目にしてもまだピンとこないのだ。

俺はこの中で生まれ、この中で育ってきた……。頭では理解できるものの、どうも実感がわかない。それに、ジグラートは次々と連なっていて数えきれないほどある。一体何個の地球があるのだろうか？俺は圧倒され言葉を失っていた。

そして、シャトルは減速をはじめ、ジグラートの一つに近づいて行った。

3—17. 猫女猫女猫女!

同時刻、王都の大聖堂の塔にあるマリ안의執務室に動きがあった。

コンコンコン!

ドアがせわしなくノックされ、

「マリアン様、大変です!」

しゃがれた男性の声がする。

デスクで報告書をチェックしていたマリアンは、

「どうぞ!」

と言って、不機嫌に顔を上げた。

「ミネルバが海王星に居ます! どうやらうちの星のサーバーへ行くようです!」

「えっ!? あの猫女、生きてたの? それにサーバーって……。まさかバレたの?」

「た、多分そうではないかと……」

初老の男は言いにくそうに答えた。

「くっ……!」

マリアンはそう言って歯を食いしばる。

「ど、どうでしょう……?」

「猫女め——!!」

マリアンは真っ赤になって吠え、デスクを激しく叩いた。

「ひいっ……!」

男は後ずさる。

「猫女を止める方法は無いの?」

マリアンは男をにらみつけて聞いた。

「か、彼女はもう海王星に行ってしまったので、我々ではもう止められません!」

「ああ——! マズい! 不正の証拠が取られちゃうわ! 何とかならないの?」

マリアンは頭をかきむしりながら言う。サーバーへの不正は重罪

だ。証拠を押さえられたらマリアンは捕らえられ、死刑は免れない。まさに命のかかった大ピンチに陥ったのだ。

「げ、現地に行かないとハードウェアはいじれないです……」

男は冷や汗を垂らしながら答える。

ガンガンガン！

マリアンはデスクをこぶしで殴りつけ、そして落ち着きなく部屋の中をうろろうろしながら思索し、

「猫女猫女猫女猫女！ キ——ツ!!」

と、ヒステリーを上げ、花瓶をつかんで振り上げると床にたたきつけた。

パリーン！ という高い音が部屋に響く……。

そして、ハアハアハアと、マリアンの荒い息が静かに流れた。

男は目をつぶり、身体を固くして嵐の過ぎ去るのを待った。

「ねえ……、海王星にある船のリストを見せて頂戴」

「え？ ふ、船……ですか？ 分かりました……」

男はそう言うと言いとサイドデスク上に画面を展開した。そして、画面をクリックと操作していく……。

しばらくして、画面上には船の名前と種類と位置のリストが表示された。

「こ、これでよろしいですか？」

「ちよつと見せて！」

マリアンは画面の前まで行って必死にリストをにらんだ。そして、そのうちの一つを指さして、

「今すぐこいつを乗っ取って！」

と、命じた。

「えっ!? この貨物船ですか？ 船を乗っ取るのは重罪ですよ!?!」

「できるの!?! できないの!?!」

マリアンは目を血走らせながら喚いた。

「わ、分かりました。やってみます……」

男はマリアンに気おされ、画面を操作する。ハッキングツールを次々と立ち上げると貨物船の制御システムに攻撃をかけていった。

画面には膨大の量の文字が激しく流れていく。二人は何も言わずその画面を静かに眺めた。

しばらくして、ピポッ！ と、画面から音がして「SUCCESS」の文字が赤く表示される。

「成功しました。もう自由に動かせませんが……、どう……するんですか？」

「これをうちのジグラートにぶつけて」

「えっ!? 何言ってるんですか！ そんなことしたらこの星滅亡ですよ!?!」

「そうよ、ミネルバごとこの星を海王星深く沈めてやるのよ!」

マリアンは悪魔のような笑みを浮かべ、そう言い切った。

「く、狂ってる……」

男はおののくと急いで逃げますが……。

パーン!

マリアンは表情一つ変えることなく、指先を眩い光を放ち、男の背中を撃ち抜く。

「ぐはあ……」

男は胸に風穴があき、おびただしい量の血を振りまきながら床に倒れた。

そして、ピクピクつと痙攣しながら絶命する。

「今さら何逃げようとしてんのよ」

マリアンは冷たい表情で、男の亡骸を見下ろし、そう言った。

マリアンは画面を操作し、貨物船の目的地をジグラートに設定し、全速前進の指令を打ち込む。

「猫女、今度こそあの世に送ってやるわ」

瞳孔の開ききった目でマリアンはニヤツと笑った。

3—18. エステルの選択

システムからは、頻繁に警告のメッセージが出る。

『重大な被害が出るルートです！ 衝突回避しますか？ はい／いいえ』

マリアンはそのメッセージのたびに『いいえ』を押し続けたが、そんなことをやっついては逃げられない。

マリアンは男の死体を片付けると、エステルを呼んだ。

ほどなくして現れるエステル。

「はい、なんででしょうか？」

ちよつとビビリながら部屋に入ってくる。

「六十一号。ちよつと、この画面で『いいえ』を押し続けてくれる？」

マリアンにそう言われ、テツテツと画面の所まで来たエステルは警告文を読んで、

「これ、何ですか？」

と、聞いた。

「私を殺そうとする悪い奴に天誅てんちゆうを下してるのよ。『いいえ』を押し続けてて！」

「えっ!? そんな悪い人が!? わ、分かったです」

エステルは正義感に燃え、椅子に座ると、淡々と『いいえ』を選び続けた。

それを見るとマリアンは、急いで逃げ支度をし、どこかヘテレポトトして行ってしまった。

エステルは淡々と『いいえ』を押し続けた。マリアンはエステルの製造者。その命令は絶対だった。

しばらく押し続けていると、違うメッセージが表示された。

『ミネルバとソータ、二名に重大な命の危険があります。衝突回避しますか？ はい／いいえ』

「ソ、ソータ……？」

その文字を読んだとたん、エステルは動けなくなった。

理由は分からないが心が頑固としていうことを聞かない。

『いいえ』を押しそうとするがどうしても手が動かず、気が付くと、頬にツーツと涙が伝わってきた……。

「え!? どうしたですか、私?」

エステルは涙をぬぐい、困惑した。

ソータという聞いたことのない名前に、なぜこんなに動揺しているのか、エステルは全く分からなかった。

「ソータって誰なんです?」

涙声で取り乱すエステル。

しかし、マリ안의命令は絶対だ。押さねばならない。マリアンを殺そうとするこの悪者ソータに正義の鉄槌てつづいを食らわせねばならない。

エステルは何度か深呼吸をし、呼吸を整えると『いいえ』に指を伸ばした。ブルブルと震える指先……、押す、押さねばならない、エステルは力を振り絞って指を前に伸ばした。



ソータとミネルバを乗せたシャトルがジググラートに接舷せつげんした。

プシュー!

エアロックが開くと、中は無数のインジケーターがチラチラと明滅し、まるで満天の星空のようだった。

ミネルバが照明をつけると、中の様子が明らかになった。そこには交番くらいのサイズの円柱状のサーバーがずらーっと見渡す限り並んでいた。足元の金属の金網越しに下を見てもずらーっと下の方までサーバーの階層は続いている。トータルで言うところ三十階建くらい、各フロアの広さは新宿の街くらいだった。すごい量のサーバー群である。これがスパコン富岳一兆個分のコンピューターシステムらしい。確かにこれだけあれば星を一つシミュレーションすることも問題ないよなあ……と、思わずため息をついた。

入り口の脇たぐみに置おくらしいの板があり、ミネルバがしゃがんで説明してくれる。

「これがサーバーのブレードよ。これが円柱にズラツと刺さっているの」

ブレードには微細な模様がビツシリと施されたガラスで埋まっ

いて、何がどうなっているのかもわからない。

「これはすごいですね……」

俺はまるでアートのような美しいガラス工芸品に、感嘆の声を漏らす。

「ここに細工するというのは相当な事なのよ。多分、コネクタ付近に変な部品をつけているんじゃないかしら？」

「で、マリアンが細工したらしいサーバーはどれなんですか？」

俺はサーバー群を見回すが……あまりに膨大過ぎてしらみつぶしという訳にはいかない。

「魔王が候補を上げてくれてるわ。えーと、まずはF16064―095だつて。16階のF列ね。行きましょー！」

3—19. 届かぬ想い

二人は金属の階段をカンカンと言わせながら登っていった。「ちよつとこれ、大変じゃないですか?」

俺はハアハアと息を弾ませながら登っていく。

「海王星じゃ権能も使えないからねえ……。足で行くしかないわ」「もしかして……。女神様なら使えるんですか?」

「ふふふ、ご明察」

ミネルバはヒゲをピクピクつと動かして笑った。

「じゃあ、女神様に頼んだらよかったのでは?」

すると、ミネルバはあきれたような顔をして言った。

「あのね、今、我々は女神様に試されてるのよ」

「え?」

「あの方は全て分かった上で我々の解決力をテストしてるの。頼んだ時点で落第だわ」

なんと、全て先輩の手のひらの上だったのか……。となると、エステルが新人類であることも知っていたはずだ。その上で俺に結婚を勧めた。これはどういうことだろうか?

マリアンに連れ去られてしまったエステル。絶対に奪い返さないとならない。しかし……。俺は彼女にどう接したらいいのか少し悩んでいた。もちろん、人間でなかったとしても彼女は俺にとっては愛しい存在だ。でも、その愛おしさが人工的に作られた物から来ているのだとしたら……。それはプログラミングされたゲームキャラを一方的に好きになっただけ、ではないのだろうか?

俺は彼女を愛しているのだろうか? 彼女にとって俺の愛って迷惑ではないのだろうか……?

奪還出来たらゆつくりとエステルの考えを聞き、心で感じてみるしかない。

ああ、屈託のないあの優しい笑顔に早く癒されたい……。

俺は悶々としながらミネルバについて階段を上っていった。



「見つけたわ、これね！」

そう言つて、ミネルバは円柱の一部を指さした。

「これを抜くんですか？」

「そうよ、ここにロックの金具があるから外してね……。じゃあ引つ張るわよ」

「せーのっー！」

そう言つて二人で引つ張ると、ガコツ！　っと音がして畳サイズのブレードが抜けた。

ブレードを床に置いて二人で観察してみる。入り口に置いてあつたものと同じ構造をしていて、ガラスの微細な構造がキラキラと照明を反射し、美しかった。

しかし……。特に怪しい物は見つけられない。

「もしかしたら一ミリくらいの小さなものかもしれないわ。そうだったらちよつと見ただけじゃわからないかも……」

ミネルバは眉間にしわを寄せて言う。ヒゲがしよんぼりと下がつてきてしまう。

「この間にもマリアンは魔物の侵攻を進めてるんですよね？」

「そうですね。ぐずぐずしていられないわ。手分けして候補を一つずつしらみつぶしで行きましょう」

「分かりました。頑張ります！」

「じゃあ、ステータス画面開いて」

「え!?　海王星でも開けるんですか？」

「この肉体に実装されているのよ。ここに直接映像が行くわ」

そう言つて、ミネルバは頭を指さした。

「分かりました。『ステータス！』」

すると、確かに青白いウィンドウが空中に開いた。そこにはスマホのようなアイコンも並んでいる。

「今、メッセージ送ったから、そのリストの上からチェックお願い」
ピコピコと点滅するアイコンをタップすると、リストがズラツと並んだ。その量にちよつと気が遠くなったが、多くの人命がかかっているのだ。頑張るしかない。

「了解です！」

俺はそう言っ走り出した。



カンカンカンカン！

金属の網目でできたグレーチングの上を俺は淡々と走った。どこまでも並ぶ巨大な円柱群の間を息を切らしながら走る。

マリ안의野望を止め、エステルを取り戻す。そのために、今の俺にできることを淡々とやるのだ。

『ソ、ソータ様、ち、違うの！』

エステルが新人類ネオエンジェルだと暴露された時に、エステルが必死に叫んだ言葉がまだ耳に残っている。

あの時、俺はひどい目でエステルを見てしまった。プロポーズしようと言っていた愛しい人をなぜあんな目で見ってしまったのか……。

俺の腕にしがみつき震えていたエステルを、なぜ温かく抱きしめてあげられなかったのか？

新人類ネオエンジェルだからといって傷つかない訳はない。俺が向けた冷たい視線が、彼女の小さな胸に大きな傷を負わせてしまったとしたら取り返しがつかない。

俺は自分勝手に生きてきた浅はかな今までの人生を心から反省し、エステルにちゃんと謝りたいと思った。

「エステル……」

自然と涙が湧いてきて、走りながらポロポロとこぼれた。

3—20. 貨物船襲来

それは何個目かのサーバーにたどり着いた時だった——。

俺はハアハアと息を切らしながらロックを解除し、力いっぱい引き抜いた。

ヨイシヨ！ と掛け声をかけて、床の上に置く。だいぶ慣れてきた。

美しいガラスの工芸品をじっくりと見ていく。変な物はないか、異常はないか……。

と、ここでコネクタの所に小さくゼロハンテープのような物が貼られているのに気がついた。こんな物、今までのサーバーには無かった。もしかして……。

俺はステータス画面を出して、ミネルバに連絡を取った。

「すみません、変なの見つけたんですが、これですかね？」

俺はカメラ機能を使って動画で実況する。

「ハアハア……。どれどれ……。うーん、これだけじゃわからないわね……。今すぐ行くわ！」



程なくしてミネルバが走ってきた。

「ハアハア……。お疲れさま……。これね……」

ミネルバはテープをジーツと観察し、テープに手をかけ、ペリツと剥がした。

すると、その瞬間、サーバー全体がピカツと光り輝く。

「うわぁ！」

俺が驚いていると、ミネルバは

「ビンゴー！」

と、うれしそうに叫んだ。

「え？ これで問題解決ですか？」

「そうよ、マリアンはこのチップでサーバーを誤動作させ、OSの特権処理に介入していたんだわ。ソータ君、お手柄だわ！」

そうやってミネルバはいきなりハグしてきた。

モフモフとした猫の毛が柔らかく俺を包み、俺は何だか幸せな気分になる。猫ってすごい。

「これでもう大丈夫！ 戻ってマリアンをとっちめてやるわよ！」

ミネルバはヒゲをピンと伸ばして力強く言った。

その時だった、

ヴィ——ン！ ヴィ——ン！

急に警報が鳴り響き、照明が全部真っ赤に変わった。

「えっ!? なにこれ？」

俺がビツクリしていると、ミネルバはどこかと通信を始めた。

「えっ!? 貨物船? 十五分後!」

深刻そうな話が聞こえてくる。

「警備隊は何やってんのよ!? えっ? 強硬突破? こっちにはシャトルしかないわよ! ……。分かった。コードを送るからやってみて。うん……、うん……」

通話が終わるとミネルバは頭を抱えた。

「ど、どうしたんですか？」

「貨物船がここに突っ込んでくるわ」

「ええ!? そんなの、ジグライトは耐えられるんですか?」

「耐えられるわけじゃないじゃない。外壁を破壊されたら氷点下二百度の高圧ガスが一気になだれ込んできてサーバー群は全滅だわ」

「えっ? サーバー群全滅ってことは……」

「うちの星は消えるわ……」

ミネルバはガツクリとうなだれる。

「マリアンがやってるんですか?」

「多分そうじゃないかしら? 私たちが海王星へ来たのを知って証拠隠滅を図ったんだわ」

「証拠隠滅のために星ごと滅ぼすんですか!」

「サーバーハックは重罪。星を滅ぼしてでも逃げたいんでしょうね。

あー、私に対する恨み……かもしれないけど……」

「狂ってる……」

「今、魔王がシャトルを遠隔操作して、貨物船に体当たりをさせている

わ。何とか針路をそらせたらいんだけど……」

ミネルバはそう言つて、シャトルからの動画を俺にシェアした。動画を開くと、雪が舞い散る風景と、レーダーの画像が見えた。レーダーには巨大な貨物船が迫ってきている様子が映っていた。

「シャトルぶつけたら何とかなるんですか？」

「貨物船の全長が四百メートル、シャトルの全長は十五メートル。どうかしらね……」

ミネルバは渋い顔で淡々と言う。

「厳しい……感じが……」

俺はちよつと気が遠くなつた。

「魔王の操縦に期待するしかないわ。私たちにもできることをやりましょう。えーと、粘着ゴム弾……。ついてきて！」

ミネルバはそう言つて駆けだした。

3—21. エステルの決断

しばらく行くと小さな倉庫のようなところがあった。ミネルバは扉を開け、中から大きな筒を出してきて俺に渡した。

「はい、粘着ゴム銃よ」

「え？ 何に使うんですか？」

「これは外壁に亀裂が入った時に応急処置するためのゴム銃なの。撃つとゴムが広がってビチャツと引っ付くのよ」

「衝突して裂けた外壁に撃つんですか？」

「まあ……、気休め程度だとは思うわ……」

ミネルバは渋い顔をして、ヒゲもだらんと下がった。

俺たちは衝突予定箇所へと急ぐ。

動画を見ていると、シャトルのカメラが何かの明かりをとらえ、直後に爆発炎上して映像が途切れた。

レーダーの画像を見ていると、針路はほとんど変わっていない。やはりダメかと落胆しかけた時、急に針路が大きく変わった。なぜだかわからないが、これなら衝突は回避できそうである。

「どう？ 上手くいった？」

走りながらミネルバが魔王と通信している。

「うん、うん。やったじゃない！」

弾む声が聞こえ、ミネルバは立ち止まる。

「どうやら上手くいったようだ。これで危機は回避できたという事だろう。これで一安心だ。」



この少し前にエステルはシステムに回答をしていた。

『ミネルバとソータ、二名に重大な命の危険があります。衝突回避しますか？ はい／いいえ』

これに対してエステルが押した先はなんと『はい』だった。エステルは生まれて初めてマリアンに逆らったのだった。

「うわああー！」

激しい頭痛がエステルを襲い、エステルは椅子から転げ落ちてのた

うち回る。マリアンの命令に背いた罰は苛烈なものだった……。

エステルはなぜ自分がそんな事をしたのか全く分からなかった。でも、薄れゆく意識の中で、絶対に譲れない大切なものを守った充実感にエステルは満足していた。



俺はそんなことになっているなんて全く気が付かずに、ただ漫然と喜んでいた。

ところが……。

「え？ コンテナ……？ 十五階の五十番辺り……。外壁は耐えられるの？ ……。いやちよつとそこ重要なんだけど……。うん……。うん……。仕方ないわね……。分かった……。」

ミネルバは暗い声で通話を切ると、逆方向に走り出して言った。

「場所が変わったわ、ついてきて！」

「ど、どうなったんですか？」

「貨物船は回避できたんだけど、積み荷が散乱してコンテナの一つが衝突軌道上にあるそうなのよ」

「コンテナなら耐えられますか？」

「積み荷によるから分かんないって……。」

「そんなあ……。」

「急ぎましよ！ 衝突までもう時間がないわ！」

一難去ってまた一難。コンテナが衝突してくるのはもう確定らしい。外壁が耐えてくれるかどうか……。俺は暗い想いに押しつぶされそうになりながらミネルバの後を追った。

「ハアハア……。ここよ、準備して！ 来るわよ！」

ミネルバは粘着ゴム銃のロックを外しながら言った。

目の前に広がるのっぺりとした漆黒の壁。ここにコンテナがすごい速度で突っ込んでくる……。らしい。大穴を開けられたらこの星は終わりだ。エステルもみんなもこの世から消え去ってしまう。俺にできることは穴が小さかった場合、ふさぐことだけだ。ゴム銃のロックをガチャツと外し、俺も構えた。

「あと三十秒！」

ミネルバが叫び、いよいよ秒読みが始まった。

「十、九、八、……」

何億人もの人たちの命運が決まる瞬間がやってくる……。

俺は心臓がバクバクとかつてないほどの音を立てて鼓動してるのを感じた。数日前まで就活でリクルートスーツを着ていた学生が、世界を守るため、愛する人を守るために海王星でゴム銃を構えている。どうしてこうなった？

俺はこの数奇な運命に苦笑いをし、ゴム銃をもう一度構え直した。

3—22. 失われた未来

「三、二、一、来るわよー!」

ズーン!

激しい衝撃音がして床が揺れ、亀裂がブワツと広がった。

「うわあ!」

噴き出してくる氷点下二百度のガスが真っ白なキリとなり、一気に視界を奪う。

ガンガンガン!

俺は亀裂が発生した辺りへ向けて粘着ゴム弾を撃ち続ける。

「どんどん撃って!」

ミネルバが檄げきを飛ばす。

「やってます!」

吹き付けてくる超低温のガスで顔の表面がパリパリと凍っていくのが分かるが、そんなのを気にしている場合じゃない。何億人もの人たちの命がこの一発一発にかかっているのだ。俺は必死に撃ち続けた。

ガンガンガン!

徐々に噴出ガスが減ってくる。

「何とかかなりそうね!」

ミネルバの明るい声が響いた。

「良かったですよー!」

俺はホツとしながらゴム弾のカートリッジを交換し、さらに追加で撃っていった。

と、その時だった、急に照明が落ち、真っ暗になる。

「えっ!?!」

直後、俺は意識を失った……。



目を覚ますと……、薄暗い天井が見えた。

「あれ……?」

シヨボシヨボする目をこすりながら起き上がり、辺りを見回す

……。

そこは俺の部屋だった。

「え……う？」

ミネルバは？ 異世界の星は？ エステルは？

全てを思い出し、愕然がくぜんとした。

え？ あの後どうなったの？

ベッドから飛び降りると、鏡の所へ行ったが、鏡面は硬い。

急いで「φ」の文字を書いてトントンと叩いた……が、何も起こらない。

「えっ!? なんでだよ!」

何度も何度も「φ」を書いた。

しかし、鏡はいつまで経ってもただの鏡だった。

なぜだ？ 亀裂は解決できてたじゃないか。なぜ、俺だけ日本に戻された？

いきなり日本に戻されたということは、海王星でのミッションが失敗したからとしか考えにくい。それはすなわち……、ミネルバの星の消滅……。

エステルもミネルバももうこの世にいないってこと……？

全身の血の気がサーッと引いていくのを感じ、ひざから崩れ落ちた。

「え……、まさか……、そんなことないよなあ!? おい……、エステルう……」

涙をポトポトと落とし、鏡をバン！と叩いた。

「うわあああ……」

床に崩れ、無様に泣き続けた。

全てを失ってしまった。サーバーは壊れてしまったのだ。もう異世界はこの世にないのだろう。エステルもみんなももう消えてしまったのだ。

「ぐあああ……」

もうすべてが嫌になった。就活地獄を強いるこのクソツタレな日本社会も、マリアン一人に滅ぼされてしまうぜい弱な異世界も、エス

テルに大切なことも言えずに失ってしまった俺のいい加減な生き方も全てにウンザリだった。

「ああああ……」

そのまま床にあおむけに寝転がると、ぼんやりと薄暗い天井を見ながら、ただただ涙を流し続けた。もう何も頭に浮かばなかった。

もう壊れてしまったように、床を濡らし続けた。



涙が枯れた頃、俺はスマホを取り出して先輩に電話をかけた。しかし、出ない……。

俺はメッセンジャーでメッセージを送る。

『ごめんなさい、世界を救うのに失敗しました。もう一度チャンスをもらえませんか?』

しかし、既読スルーだった。失敗した者はもう要らないという事だろうか。俺は先輩にも捨てられてしまったのだ。

ベッドに横になり、一縷の望み^{いちろ}を託し、スマホを抱いて寝る。

薄れゆく意識の中で、今後どうやって生きていったらいいか考えていた。異世界が無くなったなら、もう一度就活を始めないといけないのかもしれない。でも、今さら就活? 世界一つ滅ぼし、何億人も殺しておいて自分は就活かよ……。

エステルに会いたい。エステルのあの屈託のない笑顔に癒された
い。

「エステルう……」

俺は、ズタズタになった心のまま意識が薄れていった。

3—23. 足りなかった運

目を覚ますと真っ暗だった。

グウギルギル……。

お腹が鳴る。

こんな時でも腹は減るのだ。

ひどい顔をしながらゆっくりと起き上がると、ジャケットを羽織つて街へと向かう。

行くあてもなく、フラフラ歩くうちに、エステルと行ったイタリアンに足が向いた。

キラキラと水面に灯りをゆらす運河沿いの道をトボトボと歩いていくと、温かな照明の点るレストランが見えてくる。

ガラス窓をのぞくと、ピザ釜にはあの時と同じように火が入っていた。

「こんにちは」

店に入り、エステルと座った窓際の席をお願いした。

そして、エステルと食べた時と同じメニューを注文する。

スパークリングワインで献杯し、一口含む。あの時と同じ味なはずだが……ひどく苦い。

俺は黙々と思い出の料理を味わい、あの時、エステルと何を話したかを一つ一つ丁寧に思い出し、ポトリと涙を落した。

「エステル……」

エステルと過ごした時間がこんなにも大切なものだったなんて、当時は全然わかってなかった。俺はポトポトと涙をこぼし、頭を抱えた。

「ハイ、いいかしら？」

急に声をかけられ、顔をあげると、美奈先輩がいた。

俺は急いで涙をぬぐうと、

「ど、どうぞ」

と、答えた。

「すみませーん！ 私にも同じワインを」

先輩はお店の人に声をかけた。

「ひどい顔ね……、残念だったわね」

先輩は俺を見て言った。

「あの星は無くなっちゃったんですか？」

「そう、残念だけどね……」

先輩は淡々と言う。

「亀裂は上手くふさいでましたよね？ 何がマズかったんですか？」

「別のコンテナが送電線を切っちゃったのよ。電源が全部落ちて全て
パアよ」

先輩は肩をすくめる。

「送電線!?! そんなの俺のせいじゃないじゃないですか!」

「そうね、ソータはよくやったと思うわ。でも、運が……足りなかった
かな？」

「運……」

俺は心底ウンザリしてうなだれた。

ワインが運ばれてきて、先輩は美味しそうに飲んだ。

「あの星を復活は出来ないんですか？」

「うーん、できない事もないけど、もともと停滞してたし復活させる価値
なんてあるかしら？」

そう言いながら、先輩はブルスケッタをつまんでほお張る。

「え!?! じゃ、どうするんですか？」

「……。新しい星を作るわ。縄文時代くらいからやり直し」

「そ、そんな。エステルは？ みんなは見殺しですか？」

「見殺しになんてしないわよ。縄文人として赤ちゃんから再スタート
よ」

「じよ、縄文人……。エステルも縄文人ですか？」

「そう、かわいい赤ちゃんになると思うわ」

そう言ってニツコリと笑い、一口ワインを含んだ。

「俺の事なんてすっかり忘れて転生ですか……」

先輩は肉を一切れフォークで刺すと、

「だからプロポーズを急げって言ったのよ」

そう言つて美味しそうにほお張った。

「え!？」

「結婚してたら日本人としてこっちに連れてこれたのにね」

「い、今からじゃダメですか?」

「んー、あの子記憶全部消されちゃったからね。今プロポーズしても逃げられちゃうわよ」

「え!？」

啞然あぜんとした。マリアンめ、そこまでやるのか……。

俺と過ごしたあの濃密な日々はもう俺の中にしかないらしい……。

俺は言葉を失い、ガツクリとして動けなくなった。

「可愛い女の子なんていくらでもいるじゃない。異世界の、それも人造人間にそこまでこだわらなくてもいいんじゃないの?」

先輩はピザをつまみながら言った。

理屈ではそうかもしれない。しかし、『ソータ様』と言つてニツコリと笑うあの可愛い娘がいいのだ。忘れられないのだ。

「うっ……、うっ……、うっ……」

俺はエステルを思い出し、またポタポタと涙を流した。

「ちよつとー。まるで私が泣かせてるみたいじゃない……」

先輩は少し慌てて周りを見る。

「そもそも、なぜ先輩は助けてくれなかったんですか?」

俺は涙声で聞いた。

「女神は世界を作るのが仕事、基本干渉はしないわ。星で生まれた人たちが紡ぎだすオリジナリティあふれる文化・文明を邪魔しちゃダメなのよ」

「マリアンの人造人間もOKですか?」

「あれ、面白いと思うわよ。もちろん、エステルみたいな人だらけの社会はつまんなくなるけど、その過程や、つまなくなつた結果どうなるかは興味深いわ」

俺は絶句した。この人にとっては非人道的な試みすら楽しみなのだ。

3—24. 最後の賭け

「今回は残念だったわね。それじゃ就活頑張つて。そろそろ行くわ」

先輩はそう言つて立ち上がる。

ヤバい、全てが終わつてしまう。

俺も急いで立ち上がり、先輩の腕をつかむ。

「ごめんなさい、どうしてももう一度エステルに会いたいんです。会わせてもらえませんか？」

すがりつくように言つた。

「だから、彼女は記憶ないって言つてるじゃない」

先輩は俺の手を振り払い、あきれたように言う。

「なくてもいいんです、会わせてください！」

俺は必死に頭を下げた。もう俺の心の中にはエステルがたくさん沁み込んでしまっている。エステルなしには生きていけないのだ。

「君がそこまで入れ込んだじやうとはねえ……。でも、記憶ない以上、無理なものは無理よ」

先輩は肩をすくめ、首を振る。

「じゃあ、賭けをしましょう！」

俺は最後の手に出た。先輩は勝負事が好きなのだ。

「賭け……？」

「エステルにプロポーズします。OKもらえたら異世界を元に戻してください」

「断られたら？」

「何でも言うこと聞きます」

「奴隷になるのも？」

「もう何だつて」

俺は真剣に先輩を見る。先輩は宙を眺め、何かを思索した。そして、

「面白いじゃない。いいわよ」

そう言つてニヤツと笑つた。

俺の事を覚えていない人へのプロポーズ。どう考えても勝機はな

いが、それでもやらない訳にはいかない。

人生をかけた一世一代のプロポーズ、俺は全ての思いをしつかりとぶつけようと心に誓った。

「じゃあ、彼女呼ぶわよ」

「あ、呼ぶならあそこをお願いします。あの、地面が鏡みたいになつてるところ」

「ウユニ塩湖？」

「そうです、そうです。魔物倉庫行く途中で見かけたので」

人生最大の賭けになる場所くらい、我がままを聞いてもらいたい。

「いいわよ。じゃあウユニへ送るわ。奴隷になる覚悟はいい？」

先輩は意地悪な顔で言う。

「いつでもOKです。先輩こそ異世界を戻す準備しておいてくださいよ」

俺はニヤツと笑った。

勝ち目のない賭けだったが、俺はエステルに会える喜びで胸がいっぱいになった。



気が付くと俺は見渡す限り広大な鏡の上にいた。正確には止まった水面なのだが、水面は夕暮れの太陽や茜色に染まる雲たちを反射し、水平線はるかかなたまで美しい空を映し出していた。

「うわあ、綺麗ですう！」

気が付くと隣にはエステルがいた。

サラサラとした金髪に深い青をたたえた碧眼、少し幼さを残した美しい顔の透き通る白い肌、俺はつい見入ってしまう。例えば奴隷になつたとしてもまた会えてよかった。俺は湧き出してくるうれしさに思わずほおが緩んだ。

「エステル……」

俺が声をかけると、エステルはこちらを向く。そして、クリツとした目で俺をジツと眺め……、

「どちら……様です？」

と、首をかしげて言った。

「この四日間、エステルと一緒に冒険をしてきたソータだよ」
俺は優しく言った。

「四日……？ あれ？ 私は何してたですか？ 思い出せません……」

エステルは不思議そうに首をひねる。

「ダンジョン行ったらエステルがゴブリンに襲われていてね、一生懸命戦って助けたんだよ」

「えっ!? 私は大丈夫だったですか?」

丸い目をして驚くエステル。

「大丈夫、ちゃんと守ったんだ」

俺はしみじみと当時の事を思い出しながら優しく答えた。

「ありがとうございます」

うれしそうなエステル。

「その後、一緒に冒険したら、スライムにエステルが食べられちゃってねえ……」

「えっ!? 私やられ過ぎじゃないです?」

「大丈夫、また助けたんだ」

「ありがとうございます……」

俺はさらに、ワナに何度も落ちたこと、毒矢にやられて死にそうになったことなどを伝えた。

「なんだかすごく迷惑かけちゃいました……」

エステルは恐縮する。

と、その時、エステルが急に何かに押されたようによろめいた。

「わあ!」

「おっと危ない!」

俺はエステルを抱きかかえた。

柔らかな温かいエステルの香りが、ほのかに立ち上ってくる。
俺はその大好きな匂いについて、涙がポロリとこぼれた。

「ソ、ソータさん……? ん? ソータ……様?」

「え? 思い出した?」

俺は驚いてエステルの顔を見つめた。

「わからない……、わからないです……。でも、この匂い……好き
……」

そう言つてエステルは俺の胸に顔をうずめる。

俺も優しく抱きしめる。息とともに緩やかに揺れるエステルの温
かさを、俺は全身で感じていた。

3—25. 言い損ねてたプロポーズ

「エステル……俺は君に言い損ねていたことがある」

「なんですか？」

「俺はこの四日間エステルと一緒に命がけの冒険をしてきた。そして気が付いたんだ。これからはずっとエステルと一緒に人生を歩んでいきたい。エステルじゃないとダメなんだ」

「え？」

「どういふことか分からず、怪訝けげんそうなエステル。

俺は大きく息をつき、しっかりとエステルを目を見て言った。

「結婚……、してくれないか？」

「はあっ!？」

面食らってポカンとするエステル。

「俺は一生エステルを大切にする。だから考えて欲しい」

俺は微笑みながらも涙をたたえた目で言った。

エステルが驚き、固まり……。そしてゆっくりと首を振りながら後ずさりする。

「やっぱりだめか……。そりやそうだよな……。」

これで奴隷決定……。人生終わった。

でも、最後にエステルに会えてよかった。もう悔いはないな……。

と、その時、いきなりエステルが金色に光り輝いた。

「うわあー!」

俺はまぶしさに目がくらみ、よろよろと後ずさる。一体何がどうなったのか？ エステルは無事なのか？

夕闇のウユニ塩湖に輝く黄金の光、それは水面に反射され、まばゆい光の筋がいくつも天へ向かって伸び、辺り一面に荘厳な雰囲気を出した。

やがて光は徐々に弱まり、また静かな夕闇が戻ってくる。

そつと目を開けると、そこには大人の女性が目を閉じて立っていた。立派なブロンドをたたえ、身長も俺と同じくらいだ。

「え？ 誰？」

俺が驚いていると、女性は目をゆつくりと開く。深い青をたたえた美しい碧眼だった。

「も、もしかして……」

すると、彼女はニコツと笑って言った。

「呪いが解けたわ、ありがと」

「え？ 呪い？」

「そうよ、マリアンによってかけられた呪い……、ネオエンジェル新人類の呪いよ」

「え？ じゃあ、もう人間……、これが本当のエステル？」

「そうよ、これが本当の私……、人間の私だわ」

俺は圧倒された。まさか、エステルがいきなりしつかりとした大人の女性になってしまうとは、全く予想もしていなかった。

「私、今までの私じゃないわよ。疑うし、嫉妬するし、計算高いわよ。マスコツトみたいな都合のいい女じゃないわ。浮気なんかしたら殺しちゃうわよ？」

エステルはそう言って鋭い目で俺を見る。

俺は大きく深呼吸をし、言った。

「でも、心はエステルのままだろ？」

エステルは目をつぶり、一呼吸置くと、

「ふふっ、そうですよ」

と、ニコツリと笑って言った。

「なら、想いは変わらない。どうか僕と結婚してください」

俺はポケットからダイヤモンドの指輪を出すと、ひざまずき、エステルにささげた。

エステルはしばらく指輪を眺め、小さな声でゆつくりと言った。

「私、人間になってもドジなままですよ？」

「大丈夫です」

「私、もう二十七歳なんです」

「年上大好きです」

「これからもいっぱい迷惑かけちゃうですよ？」

「かけてください。二人で一緒に解決しましょう」

エステルは目をつぶり、涙をポロリとこぼした。そして、

「うっ、うっ、うっ……」

と、嗚咽おえつするエステル。

俺は立ち上がり、震える彼女をそっと抱きしめた。

そして、耳元で、

「僕の……、お嫁さんになってください」

と、優しく言った。

美しい茜色の空が広がり、夕陽が水平線の上で最後の輝きを放つ。

エステルはうなずくと、

「はい……、お願いします……」

そう言っつて、涙いっぱいの目で幸せそうに頬を緩ませた。

「もう二度と離さないよ……」

「ずっと一緒ですう……」

二人は離れていた時間を取り戻すかのように、きつくお互いを抱きしめた。

助け合い、一緒にあがき続けた濃密な時間で深まっていた愛は今、形を持って二人を結びつけた。

3—26. 新しい管理者

パン！ パン！

クラッカーが鳴らされる。

周りを見ると、先輩や先輩の会社の神様たちがいて拍手をしている。

「やるじゃない、おめでとう」

先輩がにこやかに言った。

「あ、ありがとうございます」

エステルは先輩を見ると恐縮し、恥ずかしそうに、

「あ、ありがとうございます……」

と、言った。

と、その時、ポン！ と音を立ててエステルのブラウスのボタンが飛んだ。子供用の服ではもう彼女の豊満なボディを包み切れなかったのだ。

豊かな胸が飛び出してしまいそうになり、

「きゃー！」

と、エステルはかがんだ。すると、あちこちがビリビリつと音を立てて破れた。

「いやあ！ うわああん！」

慌てふためくエステル。

「もう、しょうがないわねえ」

先輩はそう言うと、パチンと指を鳴らす。

すると、エステルの服は純白のウエディングドレスになり、俺は白のタキシードに変わった。

「えっ？」「あわわ！」

いきなりの事で驚いたが、ウエディングドレスはマーメイドラインの大人びたエレガントな物で、長身のエステルにピッタリと似合い、花をあしらった純白のレースが華やかさを演出して、思わず見ほれてしまった。

「美しい……」

俺がつぶやくと、

「うふふ、夢みたいですよ」

と言ってエステルは幸せそうに顔をほころばせた。

ドレスのすそが濡れちゃうのではと心配したが、しっかりと防水してあつて綺麗に水面に浮いていた。

「写真撮影しましょ。前撮りよ、前撮り！」

そう言つて先輩はエステルに近づくと、髪の毛を器用に整え、大きな花の髪飾りを編み込んだ。そして、最後に手早く化粧を施して、

「はい、それじゃ並んで〜！」

そう言つて、先輩は俺とエステルを並ばせる。

「はい、笑つて笑つて〜！ チーズ！」

美しいウユニ塩湖の夕景をバックにiPhoneで写真をパチパチと撮つた。

俺とエステルは見つめ合う。自然と笑みが浮かんでしまう

「はい、じゃ、キスして〜」

先輩は無茶振りする。

俺もエステルも驚き、とまどう。

「結婚式ではするんでしょ！ はい、恥ずかしがらない！」

先輩がせっついてくる。

俺が困惑していると、エステルが俺の方を向いて目を閉じた。俺も覚悟を決め、そつとくちびるを重ねる。すると、エステルが舌を入れてくる。

え!?

俺は驚いたが、つい合わせてしまう。

二人は舌を絡ませ、想いを確かめ合つた。

「はいはい、写真撮影中ですよ！」

盛り上がる二人に先輩は呆れて言う。

すっかり太陽は沈み、茜色から群青への美しいグラデーションが広がる中、俺たちは見つめ合い、幸せに包まれながら微笑んだ。



「ねえ、ソータ、アドミニストレーター管理 者やらない？」

先輩がいきなり聞いてきた。

「え？ それは就職的な意味でですか？」

「まあ、アドミニストレーター管理者に就職ってことになるでしょうね。マリ안의
枠が空いたからミネルバの下で副管理人からね」

「え？ 給料とかはどうなるんですか？」

「給料？ あんたバカね。アドミニストレーター管理者ってのはこういう事よ！」

そう言うのと先輩は扇子を取り出し、パチンと鳴らした。

すると、空から膨大な数の金貨が山のように降り注ぎ、あつという
間に小山を作った。

「うはあー！」

一瞬で何百億円にも相当する金が出てきたのだ。俺もエステルも
ビックリ。

「どうするの？ やるの？ やらないの？」

「やりますやります！ やらせてください!!」

「よろしいー！」

先輩は扇子でパタパタと仰ぎながらご満悦の様子だった。

そして、一緒に来ていたリーダーの男性に向かって、

「誠！ そういうことだから研修に回しておいてね」

そう言ってパチツとウインクする。

「はいはい、美奈ちゃんも毎度強引だなあ」

男性はそう言って苦笑した。そして、俺に向いて、

「じゃあ、いつから研修やる？ 明日とかでも大丈夫？」

と、優しく聞いてくる。

「私はいつでも」

「じゃあ、明日朝十時に田町の会社に来てね。担当はあの子」

そう言って男性は水色の髪の子を指した。女の子はサムアツ
プしてニヤツと笑う。

「分かりました！ お願いします！」

俺は女の子に頭を下げた。

「ちなみに彼女はああ見えて宇宙最強だから覚悟しててね」

男性は耳元でそつと言う。

「宇宙最強!?!」

俺は思わず声をあげてしまい、女の子は

「きゃはははー!」

とうれしそうに笑い、碧あおい目をぼうつと光り輝かせた。

なるほど、ただ者ではない……。

「お、お手柔らかにお願いします……」

第61話

「今から考えると、就活失敗しててよかったですよ」
先輩にそう言うと、

「あー、ソータの応募は全部不採用にしといたのよ」
と、とんでもない事を言い出した。

「えっ!? 先輩が全部落としてたんですか!? ひ、ひどい……」

俺が愕然^{がくぜん}としてると、先輩はギロつとにらんで言った。

「何? じゃ、今からでもサラリーマンやる? どの一流企業でも突っ込めるけど?」

「い、いや、アドミニストレーター管理者の方がいいです!」

「そうでしょ? 嫁さんも紹介してあげたし、感謝しなさい!」
先輩はドヤ顔で言った。

「紹介? エステルが襲われてるところに繋がったのは、偶然じゃなかったんですか!?!」

「そんな都合のいい話、あるわけないでしょ! この子敬虔なのにドジで、襲われちゃってかわいそうだったから、時間止めてあなたの登場待ってたのよ」

「な、なんと……」

俺が言葉を失っていると、エステルは

「女神様! ありがとうございます! 毎日お祈りしててよかったですう……」

そう言つて先輩に手を合わせた。

「これからも祈りなさいね」

先輩はそう言つてニヤツと笑った。

俺は先輩に祈る意味が良く分からなかった。

「はい、じゃあ解散! あなたたちはここでゆつくりお楽しみタ〜イム!」

先輩はそう言つて立派なコテージをボンツと出して言った。

赤い夕焼雲がたなびく中、丸太で組まれたコテージは鏡のような水面の上に静かに降りてきて、大きな波紋を作った。ヒノキの爽やかな

香りが匂ってくる。

「おお、すごい……」

俺が驚いていると、

「このくらいすぐにはできるようになるわよ。研修はこの時間で二十時間後。コテージの鏡使つて来なさい。じゃ、また明日」

そう言つてみんなを連れ、そそくさと消えていった。

◇

コテージの中にはダブルベッドがあり広く、快適だった。窓の外を見ると、水平線に残つた茜色が弱まり、宵の明星が明るく輝きだしていた。

「綺麗ですう……」

隣でエステルが言った。

「今、明かり点けるね。どこだろう？」

俺が動こうとしたら、いきなりエステルに抱き着かれた。

「点けなくていいですう」

「えっ？」

驚いていると、エステルがくちびるを重ねてきた。

いきなりで驚いたが、俺も合わせる。

エステルの柔らかいくちびる、チロチロと愛おしそうに動く舌……。

多くの想いを重ね、今、二人はお互いを貪るように舌を絡めた。

離れてお互い見つめ合う。

窓から入る明かりがほのかにエステルの顔を照らす。その瞳には涙が浮かんでいた。

「どうしたの？」

「人間って凄いです……」

「えっ？」

「愛しい想いが次々と押し寄せて、おかしくなっちゃいそうです」

「ふふっ、俺も同じだよ」

俺はそつとエステルの頬をなで、微笑んで言った。

「ずっと……、いつまでも一緒に居てくれるですっ。」

「もちろん」

「約束ですよ？」

「ああ、約束だ」

エステルはうれしそうに笑うと、またくちびるを重ねてきた。

甘く香るエステルの唾液に脳の奥がツンとする。

俺はエステルをきつく抱きしめ、エステルの想いに応えた。

心の底から愛しい想いがどんどん湧いてきて、俺は限りない幸せに包まれる。

そうか、俺はこの娘を愛するために生まれてきたんだな……。ほとぼしる熱情に流されながら、俺は生まれて初めて人生の意味を理解した。

こうして、俺の限りなくぎやかな新生活が始まった。

窓の向こうにはくつきりと天の川が流れ、愛を深める二人をほのかに照らしていた。

※特別編 登場人物インタビュー

作者「はい、みなさんこんにちは！」

ソータ「こんにちは！」

エステル「こんにちはですう」

作者「最後までお読みいただき、ありがとうございます！ ここでは登場人物にインタビューをしてみたいと思います！ さて、まずはソータさん、いかがでしたか？」

ソータ「いやもう、あつという間にいろんなことが起こって、まるでジェットコースターみたいでしたよ」

作者「美奈ちゃんの陰謀に巻き込まれて大変でしたね。エステルさんはいかがでしたか？」

エステル「私は、ソータに会えて本当に幸せで、みんなに感謝してるですう」

頬を赤らめるエステル。

作者「あれ？ もう呼び捨てですか？」

エステル「ふふっ、もう夫婦ですから……、ね、ソータ？」

ソータ「ね、エステル」

見つめ合う二人。

作者「……。まあ、幸せそうで何よりです。結婚式も挙げたんですよ？」

ソータ「そうです。東京のホテルで挙げました。先輩が景気よくお金かけてくれて、なんだか盛大な挙式でした」

作者「ご両親にはどういった説明を？」

ソータ「異世界の人造人間ということとはちよつと説明できないですからね。外国の孤児って説明しています」

エステル「もう人間ですう！」

ソータ「そ、そうだったね、ゴメンね……」

そつと頬をなでるソータ

エステル「プンプンですう！」

口ではそう言いながらも、なでてもらってうれしそうなエステル。

作者「コホンツ！　ところで最近はどういった暮らしをしているんですか？」

ソータ「異世界の八ヶ岳の山麓にコテージを建てて、そこを拠点にしています」

エステル「インテリアは私が担当したですよ！」

そう言つて室内の写真を見せるエステル。そこには純白の家具と花柄の壁紙が写っていた。

作者「これは……、とても可愛い新婚家庭ですね」

ソータ「ちよつと可愛すぎる気もしますけどね」

エステル「あれ？　ソータは気に入つてないです？」

ソータ「そそそ、そんなことないよ！　素敵なインテリア、感謝してるよ！」

エステル「……。ホントです？」

ソータ「ホントだつて……」

そう言つてソータはエステルの頬に軽くキスをした。

エステル「うふふ……」

幸せいっぱいエステル。

作者「いやあ、ラブラブで見てる方が恥ずかしくなっちゃいますね……」

ソータ「人生かけてプロポーズした愛しい人ですからね」

エステル「ソータは白馬の王子様なのです！」

作者「うんうん、ハッピーエンドで良かったです。ソータさんはプロポーズ上手くいくと思つてました？」

ソータ「理屈で言えば無理でしょうけど、心に訴えたらワンちゃんあるかな……と」

作者「ほほう、秘かに勝算はあつたんですね」

ソータ「エステルを信じてました」

エステル「ふふっ」

作者「エステルさんは記憶全くなかつたんですか？」

エステル「四日間の記憶がすっぽり抜けてたですね」

作者「じゃあ、プロポーズされた時、ビックリしたでしょ？」

エステル「はい、この人何言いだすのかと焦りました」
作者「まあ、そりやそうですね」

ソータ「でも、愛の力で呪いを吹き飛ばしたんですよ！　すごいですよね、僕たち？」

作者「あれ、何で呪い解けたんですかね？　そんな設定なかったんですか……」

ソータ「え？　あなたが書いたんじゃないんですか？」

作者「気が付いたらそう書いてあったんです……」

エステル「オカルトですう……」

ソータ「愛の力が物語を切り開いた……、いい話じゃないですか！」

作者「確かに……。二人の愛の力に負けました」

エステル「ふふふっ」

見つめ合う二人。

作者「それではこの辺にして、最後に読者の皆様にメッセージを……」

ソータ「応援してくれてありがとうございます！　皆様の感想、コメント、全部読ませてもらってました。とても勇気づけられました！」

エステル「ハッピーエンドを祝福してくれてすごく嬉しかったです！　ありがとうございます！」

作者「皆様のおかげでここまでやってこられました。ありがとうございます。ございました。さて、次回作はこちら！」

『宇宙一強いあの娘は雑過ぎる　くお気楽娘と純真少年の国づくり』

<https://syosetu.org/novel/262659/>

ソータ「おお、もう始まってるとですね」

エステル「宇宙一強いって……？」

作者「宇宙最強の女の子……心当たりないですか？」

ソータ「もしかして……青い髪の……」

作者「はい、彼女にひと暴れしてもらおうかと」

ソータ「いや、彼女……ヤバくないですか？ 物語になりますか？」
作者「結構苦労しています。本気出させると宇宙壊しかねないの
で」

ソータ「ですよね……」

???「えっ？ 壊したら壊したでいいじゃん。きゃははは！」

作者「え!! 呼んでないんですが……」

ソータ「し、師匠！ お、お世話になっております！」

???「僕が出るからには思いつきり活躍させてもらおうよ！」

作者「あ、ありがとうございます。ただ、常識の範囲でお願いしま
すよ。物語の根底から破壊とかしたら読者ついてきてくれませんの
で」

???「うーん、それは作者の都合でしょ？ 僕関係ないもん。きゃは
はは！」

作者「……」

ソータ「やっぱり……」

作者「コホン！ とりあえず、新作、始まります！ どういう結末
になるか作者にも分かりません!!」

ソータ「ヒャー！」

エステル「g k b r」

作者「皆さんよろしくお願ひします！ それでは新作でお待ちして
おります！」

???「マツテマス！」